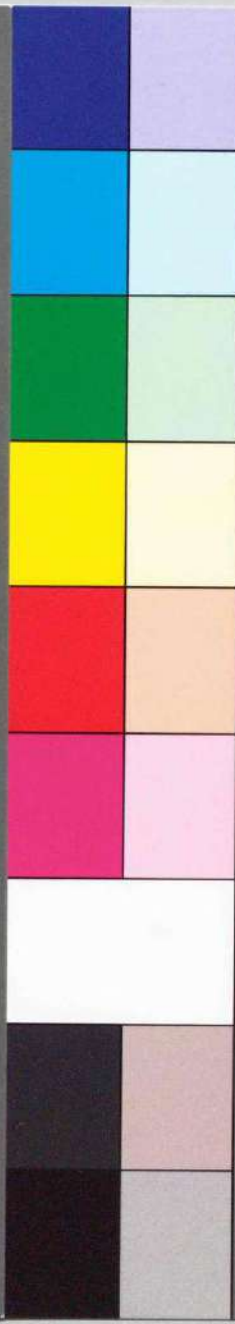


Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Z32-B88

金の星

四月号



国立国会
8. 3. 26
図書館

第四号

第八卷

世界少年少女偉人傳大系⁽³⁾ 三井信衛先生著・裝幀 寺内萬治郎書伯

ネルソン

勇將ネルソンの名は、ナポレオンと同様に知らない人はいないでせう。トラファルガルの大海戦に打死したネルソン！その勇壯な場面は、永く傳へられて歴史を飾つてゐます。

命を賭けての戦は幾度であつたか知れない軍神ネルソンは、そもく如何なる人であつたか。先づ本書を一讀せられよ。

幼い時からあらゆる困難と戦ひ、負けず嫌ひで十二歳の時から水夫生活をはじめ、忽ちにして英國の大海軍の指揮者となつて、幾度か母國の危機を救ひました。正義の念に強く、國家を愛し、部下には慈父の如く慕れ、しかも、常に鐵の如き意志を以て事に望んだネルソンこそ、世界的偉人として恥しからぬ人であります。

諸君！爲すあらんと欲する人は、先づこのネルソン傳を讀まれよ。そして、弱い心を鞭うたれよ！

四六判箱入類美本

内容一九〇頁

挿畫三色版外數頁

定價金九拾錢

送料六錢

東京本郷町 金星社
振替東京五九五六番

お伽王國

オハナシ

巖谷小波聞 橋本邦助、太田三郎、鹿島鳴秋著
紙數各册八十頁 定價各一圓 送料各八錢

(書圖傳通定認省都文)
お話し——それはお子さんたちの成長に伴ふ止みがたい教養の表現です。篇みちのたつたお話しはお子さんたちにどれ程大きな糧となるか量り知れないもの、あることは否めない事實です。鹿島先生のお話しは直ちにお子さんたちの心に強く入つてゆくことな信じます。

日本の畫噺

巖谷小波 著
岡野榮、小林鶴吉、杉浦非水畫
袖珍假裝全三十五册 定價各二十五錢 紙數各册三十餘頁 送料各四錢

お子さんたちの一番のお友達はお伽噺と動物の世界です。その抱く想像力は到底大人の及ばぬ夢の國の美しい宮殿です。小波先生はお子さんたちのお相手として少しも不満のない物語りを綺麗な繪に添へて書いて下さつたのがこれです。

オトギウタ

巖谷小波 著
太田三郎、岡野榮、細木原静岐畫
四六判假裝全三册 定價各八十錢 紙數各册三十餘頁 送料各六錢

見るものも聞くものも、お子さんたちにとつて、それはすべて歌びです。歌びを感じたとき誰しもきつと唱はすには居られないでしやう。これは美しい詩と一緒に次々と讀いてくる小波先生のお伽噺、さあ皆して唱ひませう。唱ひませう。

東京日本橋通 丸善株式會社
東京神戶京都名古屋大阪
札幌仙台福岡横濱
丸・田・三・岡・神・京・東

沖野岩三郎先生著・装幀 柳田謙吉畫伯・四六判箱入三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の兒童と藝術教育

著名の題問
！る現よいよい

本書一冊によつて讀者の思想に大變化を來さすべき使命を帯びた一大著述であります。沖野先生の三十年來の體驗ご思索から生れ出でた本書こそ、わが國の兒童教育及文學にたづさはる何人も、一讀せねばならぬ本であることは言ふまでもありません。内容三百餘頁、一々一大警鐘となつて皆さんの胸を打つてせう。殊に「現代の日本の兒童に如何なる童話を與ふべきか。」に就ての著者の大抱負を聽かれよ。

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

赤い猫

装幀・装畫・岡本歸一畫伯、寺内萬治郎畫伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・定價金壹圓
日本で出來た最初の童話讀本であつて、又最も立派な童話讀本として大評判の本です。各篇とも面白いこと此の上なく、しかも深い教訓を持つたものばかりなので、沖野先生の大傑作集ともいはれてゐます。是非一度は讀んで置かなければならない名著です。

沖野岩三郎先生の二大童話讀本

金の釣瓶

装幀・装畫・寺内萬治郎畫伯、水島爾保布畫伯
四六判箱入美本・内容一五〇頁・定價金壹圓
『赤い猫』と同様大評判を受けてゐる童話讀本です。沖野先生の童話讀本は、本書の發行によつていよいよ有名になつて、各學校の課外讀本として最もよい本であるばかりでなく、少年少女を持つた家庭には是非備へねばならないといふ讃辭を受けました。

番 六 九 五 九 五 京 東 替 振
番 七 八 三 五 川 石 小 話 電

社 星 の 金 郷 本 京 東
町 坂 動 郷 本 京 東

錢二十料送。錢十九金冊各價定。本美入箱判六四

第五編
膝栗毛物語
近刊

第二編
八
犬
傳
物
語

キリスト教徒を迫害する爲に、圓形劇場に押し込んで。生きながら猛獸の餌食にしたり、或はローマの市街に火をつけて、炎々たる光景を眺めながら、詩を作つたといふ、暴君ネロ皇帝の暴力と、鮮血に彩られた一代記は、本叢書中の讀物として異彩を放つてゐます。原作は有名なシェンキーウィッチの世界的名作であります。

頁〇八一文本
葉數十齋插

永橋卓介編 ◇ 高坂元三裝幀插畫

さきに世界童話叢書を發行して多大の御賞讃をいさよきまし。弊社はその御厚情に報ゆる爲め更に世界名篇物語叢書を發行いたしました。少年少女のお友達への贈り物に、益々その本領を發揮するの爲め定價も一層引き下りました。内容御覧は、何所へだしてもひけなとらない立派な物である事に世界童話叢書と同じで御座います。どうか引續き御愛顧を願ひます。

本書は伊太利文豪アミチスの作つた世界的名作であります。「クオレ」の名で、全世界の少年少女から熱烈な愛讀を受けました。

さて、「クオレ」は何によつて有名かといひますと、「月次講話」といふ幾つかの物語りがあるからであります。で、本書は、その「月次講話」の中で最も有名であり、又最も讀んで見て面白いものばかりを集めました。

『母を尋ねて三千里』『難破船』『父ちゃんの看病』『少年斥候』『少年筆工』『ローマニヤの血』『少年鼓手』——等何れも不朽の名作であります。三千里の道を遙々と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を捨て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。

名著大系の第二十一篇として發行された本書こそ、是非皆さんの一讀せねばならぬ尊い名著であります。

東 京 本 郷 勤 坂 町
金 星 の 社
振 替 東 京 五 九 五 六 番

母を尋ねて二千里を

四六判箱入美本
內容一九〇頁
插畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

世界少年少女名著大系 (21) 金の星社編・装幀 寺内萬治郎畫伯

東京上野駒込二八番
金 蘭 社
振替電話 東京一六七一〇番
東京浅草七四七番

[illegible][illegible]



「誰^だアーれ？」

(金の星物語)

岡本 歸一 畫



ゆへくは何處



(大風のゆへくを覽下さい)

寺内萬治郎畫

全二十卷完成

小兒文學讀本

編輯者

成城小學校主事 小原國芳
成城小學校訓導 岸英雄
成城小學校訓導 奥野庄太郎
成城小學校訓導 田中末廣

挿畫 武井武雄
齋田喬
裝幀 恩地孝四郎

全國各小學校讀方の學
習に絶大の
好評を博す

文學作品の粹を蒐め内容の精選されたる文學讀本
低學年の國語科指導に有力なる新假名遣を採用す
材料の選擇が編纂者の教育經驗より來てゐること
國語教育理想の基礎に立ち國語教育の使命を示す
裝幀口繪挿畫は高尚清楚にして純美を誇る

各地小學校で副讀本として御採用の御申込を
お待ちしております。多少に不拘御問に合せ申しま
すから御注文の豫定冊數を御通知下さいませ

定價各卷五拾錢
送料四錢

發兌 東京區山伏町一四 三三五六 電話 三六五五 三六五四 三六五三 東京電報掛

イデア書院

世界少年少女偉人傳大系

錢六料送・錢十九金價定・頁數外版色三畫插版六四

(編二第)

英雄シーザー

霜田史光先生著・裝幀柳田謙吉畫伯

世界的英雄、ジュリアス・シーザーの一生を書いたもので、その幼年時代から、ローマの元老院で刺殺されるまでの、大活劇を現した歴史物語です。

(編一第)

ジャンヌ・ダルク

大木雄三先生著・裝幀柳田謙吉畫伯

可憐なる一少女ジャンヌ・ダルクが、奮ひ起つて、母國を滅亡から救ふ健な氣な物語は、如何に讀者の血を跳らせるでせうか。教訓と興味ある一大雄篇。

偉人英雄の一生を書いた面白い物語！

振替東京五九六番
電話小石川三五七番

東動 坂本 郷町 金星社

會員大募集

講義録見本つき規則書は
申込み次第無代で進呈します

創立は第一番古い内容は一は新番
大日本國民中學會
會費が安く卒業が早い

世界一の

中學講義録



名實共に第一の通信學校
大日本國民中學會
東京駿河臺
振替東京四〇〇番
電話大手五七七番
七〇一〇番

金社の星 世界少年少女著名大系

四六判箱入美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第一編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程深山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編

ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、病馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編

ガリバー旅行記

大人國小人國めぐり

ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやリ、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさんくなく目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

金社の星 世界少年少女著名大系

四六判箱入美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六編

ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは白癡であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後には殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編

アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかかわかりません。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤの詩神ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが、歸の途に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のま』『ベニスの商人』『がみ』『女驢し』『夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置べき物語りです。

第十編

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので、各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。少年少女の珍寶として讀ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められてゐるグリムの數多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

金社の星 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第
入 給

イソップ物語

編二十第
神 日 本 話

古事記物語

編三十第
子 供 キ リ ス ト 傳

新約物語

編四十第
西 遊 記

編五十第
ローマ英雄物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで、随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れたお話と兼て、兩方面で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それこそすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

支那から印度へ、はる／＼お經を取りにつた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟淨、八戒、沙悟淨の三人の怪物がつひて行き、途中で様々の魔物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的名作。この本を讀まない者は不幸である。

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、すから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロムラスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

編六十第
こ ぞ も 聖 書 物 語

編七十第
奴 隸 ト ム 物 語

編八十第
ギリシヤ英雄物語

編九十第
アンデルセン童話

編十二第
小 公 子

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、親戚となく繰返し讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にいつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことゝわかつて面白味深いでせう。

白人種のために大猫同様にあつかはれてゐた奴隸の涙の物語りです。偉人リッポルンが現れるまで、米國のあらはれた奴隸たちの生活を書いたもので、最初の一頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに養はれることとせう。

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングスレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の寶です。本書に収めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてなりました。少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇清い愛と涙と教訓に満ちたされてゐます。

金社の星 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

本書は佛國の文豪マローの原作であつて、世界の少年少女にこれ程深い感動を與へた名作はないと云はれてゐます。重版又重版！絶えず大歓迎を受けてゐる偉大なる姉妹篇であります。是非御一讀下さい。

家なき子

三宅房子先生譯

四六判美本・内容二七〇頁
定價 金壹圓八拾錢
送料 金 六 錢

本篇の主人公である哀れな少年ルミは、名家の生れでありながら不思議な運命にもてあそばされて、捨て子としてバリーの大通りで拾はれます。そして流れくで遂に旅役者に賣られ、旅から旅とすらひ歩く、その一生を書いた真に人生の哀れを覺える名篇であります。

家なき娘

三井信衛先生譯

四六判美本・内容三六〇頁
定價 金壹圓九拾錢
送料 金 六 錢

本篇の女主人公である哀れな少女バリンヌよ！父母によつて手中の玉のやうに愛されてゐたのに、旅の間に悲しくも父と母を失ひ、全くの孤兒となつて、まだ見ぬ祖父を尋ねてさすらひ歩くのです。旅から旅へ！その間に如何なる出来事に遭遇したでせうか。

英國文豪キツプリング原著・小島政二郎先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀

狼少年

【次 目】

- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 第一 狼少年 | 第二 虎！虎！ | 第三 狼の町 |
| 一 大虎あらはる | 一 人間の世界に歸る | 一 狼の同情 |
| 二 狼に助けらる | 二 鐵砲の名入 | 二 虎の使 |
| 三 熊と豹の親切 | 三 水牛の突厥 | 三 大蛇の加勢 |
| 四 虎の野心 | 四 大虎退治 | 四 狼の町へ着く |
| 五 赤い花 | 五 プルテオとの決闘 | 五 大戦争はじまる |
| 六 狼會議 | | |

『狼少年』は日本圖書館協會より、過去一ケ年間に少年少女から愛讀された良書の中で、最もよい本の一ツとして名譽ある推薦書に擧げられました。本書が如何に面白くて良い本であるか、これを以ても知られます。

野口雨情先生著

裝幀 落谷虹兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
編輯 武井武雄畫伯
網表紙箱入美本・定價壹圓八拾錢
内容 二三〇頁・送料 六 錢
雨情先生の童話集で先生の最も圓熟せる時代の傑作のみを集めた本書こそ、童話研究家の座右になくならぬ名著である。

青眼の人形

四六判美本・内容三六〇頁
定價 金壹圓九拾錢
送料 金 六 錢

東 京 本 郷 町 金 星 社
振替 東京五九六番
電話 石川三五八番

東 京 本 郷 町 金 星 社
振替 東京五九六番
電話 石川三五八番



(通零第七拾七號)

本日代表童謡作曲界の金星童謡曲譜集

一輯二各金十六錢・三輯以下各金十錢・送料金六錢

第十輯 名所めぐり (目曲) 長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳鉈、石山寺の秋の月	第九輯 あの町のこの町 (目曲) あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の御囃	第八輯 べんべん鳥 (目曲) 紅殻蛸蛤、さみだれ	第七輯 お人形さんの夢 (目曲) お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	第六輯 子守唄 (目曲) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、煮坊主、蔵の下道	第五輯 夢語り (目曲) 夢語り、おしやれ棒、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	第四輯 赤い靴 (目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮蛤屋、眠り蟲の子	第三輯 青い空 (目曲) 青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼蟲、雀の酒盛り、呼子鳥	第二輯 一つお星さん (目曲) 一つお星さん、七つの子、鰐と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	第一輯 人買船 (目曲) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
---	---	-----------------------------------	---	---	--	---	--	--	---

東京 本郷 金星社 振替 東京 五五五 九三六 番 石川 三五八 番 小石 五五五 番 東 五五五 番 替 五五五 番 振 五五五 番 社 五五五 番

東京 市外 白眉 大 賣 捌 振替 東京 五五五 番 東 五五五 番 替 五五五 番 振 五五五 番 社 五五五 番

猫さんお手まり

作曲 藤井清水

作 謠 野 口 雨 情

M.M. ♩ = 116
Scherzando

mf

12 2 3 4

おてきり おひとつ おひとつ

f

mp

метро Моск.

(17 4 2)

おふたつ

Tempo 1.

senio juaten

perississimo

(最上速く)

おひき 2 おひき 2

missina
(B. 1. 8. 6.)

猫さんお手まり

野口雨情

岡本錦一畫

猫さんお手まり

お一つ お一つ

お一つついては

ころりころりがし



お二つ お二つ

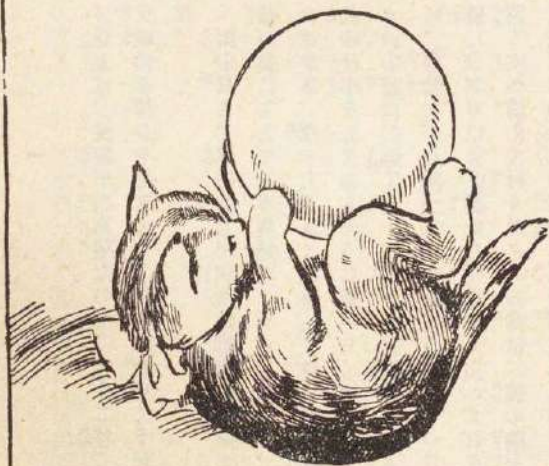
お二つついては

ころりころりがし

おいくつついても

猫さんお手まり

お一つ お一つ



少年馬車

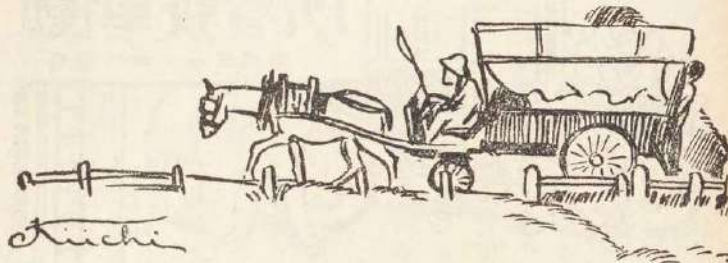
水谷 三郎
園本 一重



新太は、父親が馬車屋なので、もう二年この方、父親の手傳ひをしてゐた。新太は明けて十五であつた。

雨の日も、風の日も、新太は忠實に働いてゐた。彼が腰にさしてゐる眞鍮のラツバをぬいて、ブウブウと、頬べたをふくらまして吹く時、彼は一人前の仕事をしてゐるやうな氣がして嬉しかつた。ラツバの音は、遠く響いて行つた。彼はいつもその音に、自分ながら酔つた。山峽にさしかゝつた時なぞ殊にラツバはよく響いた。山から山へこだまして、遠く空へ消えて行くラツバの音は、彼の胸を渡だたせた。その美しい音色に耳を澄ましてゐると、彼の目にはいつか涙が浮んだ。

がらごろと音をたてるガタ馬車の音も、新太の耳には一つの唄であつた。更に、父親が鳴らす鞭の音



も、新太の耳には快よかつた。彼はいつも、馬車の後の踏臺に乗つて、馬車の屋根につかまつて、いろんなことを空想しながら、だんだんに變つて行く、あたりの景色に目を向けてゐた。

お客の乗り降りに、荷物のお世話をするのも新太であつた。馬に飼料をやるのも彼であつた。すべてが彼の仕事であるといつてよかつた。といふわけは、父親は身體が弱くて、たゞ馭者臺に乗つて手綱をとつたり、鞭をあ

げたりするのがせいゝであつたから。

そんなわけなので、新太としては、なにかもさせてほしいとさへ思つた。父親が家で遊んでゐて、身體の養生をしてくれたら、自分は心配のないやうに、ちやんとこの仕事をやつて見せると考へてゐた。けれど、父親はまだ新太に、すべてを許さなかつた。すこしい心配なのであつた。

「ね、父ちゃん、おらにやらしてくれろよ。まちがひ起しやしねえよ。」

新太は、時々、父親にねだつて、鼻を鳴らすこともあつた。だが父親は、

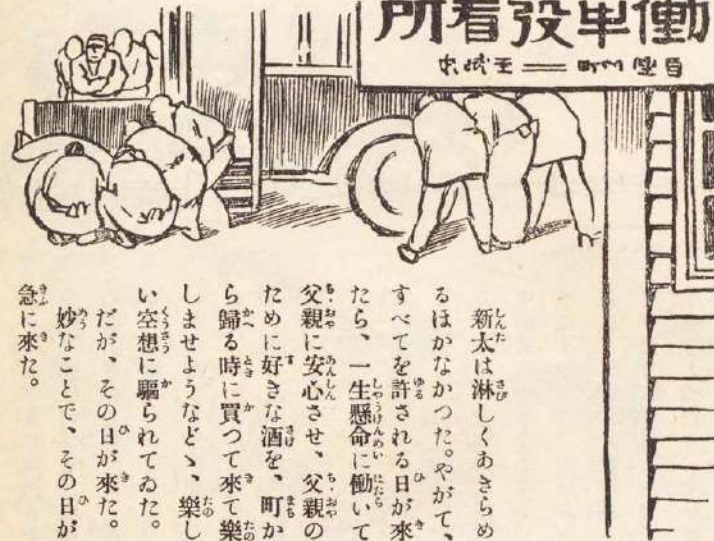
「たくさんのお客さまの生命あづかる商賣だからなあ。」

と云ふばかりで、うすら笑ひを浮べて、新太の言葉にとり合はなかつた。

「父ちゃん、心配性だな。おらのこと安心できねえのかな。」

働半役所看

目録 — 王城史



新太は淋しくあきらめるはかなかつた。やがて、すべてを許される日が来たら、一生懸命に働いて父親に安心させ、父親のために好きな酒を、町から歸る時に買つて来て楽しませようなど、楽しい空想に驅られてゐた。だが、その日が来た。妙なことで、その日が急に來た。

二

八

この街道へ、乗合自動車ができるといふ噂がたち初めた。町の呉服屋だの、宿屋だの主だった商人たちが、共同でやり初めるといふのであつた。

父親は、その噂を耳にした日から、眉をしかめて不機嫌になつた。

「なあ、新、おれたちの口は乾あがるぞ、自動車は早えからな。」

でも新太は、さうは思はなかつた。

「なあに、父ちゃん、心配するでねえよ。自動車にや自動車の客があるべえが、馬車にや馬車の客がある。馬車のラッパを聞いたたら、どうでもかうでも、乗りたくなるお客があるだあ。」

さう云つて、新太はほ、笑んだ。新太の耳には、あの澄んで響く、ラッパの音が、その時ほんとに聞いてでもあるやうに、幻覺となつて響いてゐた。

「なあに、おめえは年がゆかねえから、安心してんだが、とても競争にやならねえよ。」

父親の眉は、相變らず暗かつた。

二ヶ月も経つて、菜の花が咲く頃に、いよいよ町に自動車が來た。そして、營業を初めることになつた。びか／＼光つた自動車が、二臺そこには並んでゐた。洋服を着た若い運転手が、すらつと取り巻いてゐる見物の前で、巧みな操縦ぶりを、得意になつてやつて見せた。

「早えな」とか「氣持がよかんべな、あれに乗つたら……」とか、いろいろの言葉が、感心した見物の唇から洩れた。そして「馬車屋は、商賣あがつたりだぞ」と云ふ言葉も出た。

いよいよ自動車、商賣を初めたとすると、もう父親は我慢にも馭者臺に乗つてはゐられなかつた。父親はやけ酒を飲んで、もう馬車を動かさねえと云ひ張つた。

新太は父親の苦しみを察したが、強ひて平氣に、大丈夫なことを説いて、自分が父親に換つてやりたといふ云つた。父親はてんで駄目だと云つて、なかなか承知をしてくれなかつたが、やつとそれでも、やるならやつてみていゝと云つて許した。

新太は嬉しかつた。いよいよ一人前の仕事をやるのである。たゞ然し警察で許さないので、父親には馬車へ時々乗つてもらふことにした。

新太は、今までよりも、もつと張り合ひのある氣持で、ラッパも吹いた。お客さんの荷物も、親切に世話をした。馬の世話も、いそいそとしてやつた。そして、いつも自分が手綱をとつて、鞭をあげるのがある。なんといふ、喜びであつたらう！新太の目は輝いた。彼は一つの小さな失策さへも、してはならないと心に決めた。

なるほど、新太の云ふ通りであつた。自動車のできて、賃金が高かつたので、珍らしい

九

い間だけは、土地の人たちも乗つたけれど、やがて、みんなは馬車を選ぶやうになった。遠くから来たお客さんたちが、乗るくらゐのもので、自動車に一人も人の乗つてゐない時さへよくあつた。

三

新太のラッパは、ますますよく響いた。

彼は赤く頬をふくらまして、勢ひこめて吹きだてた。彼はラッパの響きのなかに、また一つ新しい氣持をそそられた。それは、勝利の氣持であつた。

彼はこんな意味のことを思つた。

『この昔ながらの山や川は、ガソリンの匂ひが好きである筈がない。また、警笛の響きが好きである筈がない。どうしたつて、この馬車のラッパが好きなんだ。がらごろと響く車輪の音が好きなんだ。』

彼はそんな意味のことを思ひながら、そのやさしい目を、山や川に向けた。



新太にはわからなかつた。

『あゝ、詩人だよ、君は。詩人といふのはね、暖かい愛の心に燃えてゐる人のことだ。』

新太には、よけいわからなかつた。

『おら、なんでもええよ。おら、馬車屋なんだ！』

旅人は、にこ／＼笑つてゐた。そして、

『ますます詩人だ。その氣持がすばらしいんだ。』

と云つたが、小さく口のなかでつぶやいた。

『どうして、どうして、お

ある日、もう夕方のこと、一人の旅人が馬車に乗つた。やさしい目の人であつた。その旅人は、この方がいと云つて、馭者臺へ新太といつしよに並んで腰をかけた。ちやうど、父親が乗つてゐなかつたので、馭車臺が空いてゐたからであつた。

ほかにお客はゐなかつた。新太はその旅人から問はれるまゝに、いろいろの話をした。旅人は、新太の語に、耳を傾けた。その時、自動車の話も出た。

新太は、いつも思つてゐることを話した。旅人は、飛びあがつて喜んだ。

『うん、さうだ。さうだ。この山や川が、自動車なんて好くものか！君のラッパの響きの方が、どんなに好きか知れたものぢやない。』

旅人はさう云つて、新太の肩をたゝいた。

『ほんとに君は詩人だ！』

旅人はなん度もくり返して云つた。

『詩人？』

れなんぞ、足もとにも寄りつけない。きれいな心の持主だ。おれの歌なんぞ、つくりものだ！」

旅人は、旅の好きな歌詠みであつた。

新太は、その旅人と別れる時、なんとなくもの淋しい氣持になつた。旅人も新太と別れるのを淋しがつてゐるやうであつた。旅人は新太に、餘分にお錢をくれた。そして、父親に酒でも買つてあげるがよいと云つた。

その後も、新太は、その旅人のことを、よく思ひ出した。



四

一一二

新太は、自動車に對して、勝利の感じばかりを持つてゐなかつた。

すゝぶん意地わるく、自動車の方で、新太の馬車の後から警笛を鳴らして、馬をわざと驚かしながら追ひ抜けて行くやうなこともあつたが、新太はいつもすなはに、道のわきへ馬の手綱を引いて片寄せた。

ある日、ちやうど山へさしかゝつたところで、自動車が溝に落ちたことがあつた。その時も、自動車が意地わるく、新太の馬車を追ひ抜けたために、そんなことが起つたのであつたが、新太は、けつして『さあ見ろ！』といふやうな氣持にならなかつた。

彼は自分のことのやうに心配して、すぐに馬車をとめて、運轉手を助けに行つた。さいは溝は浅かつたので、運轉手は投げ出されたが、怪我もしなかつた。

つた。自動車も、べつに傷みはしなかつた。新太の馬車にもお客はゐなかつたが、自動車にもお客はゐなかつた。新太と運轉手のほかに、この山にさしかつた静かな場所に、人はゐないのであつた。

運轉手は、新太のすなはな暖かい氣持を、しみじみと感じずにはゐられなかつた。

『よかつたなあ、おら、ほんとに魂消たよ。でも、怪我がなくて、よかつたよ……』

新太は、運轉手のズボンの、泥を手で拂ひ落しながら云つた。

運轉手は、自分がはね飛んで、ころがつた醜い姿を思ひ浮べながら、それでも、こんな場合に、新太がすこしも侮らずに、やさしく心配してくれるのが有難かつた。

もし位置をかへて、自分が新太の場合だったら、『さあ見ろ！』と思つて、そのまゝ溝に落ちた馬車を尻目にかけて、置いてきばりにしたであらうこ



一一三



三つ頭のひと

水島爾保布

同 畫

一助、二作、三吉——といふ三人の旅商人がありました。一しよに國を出て一しよに都で商ひをしてさて一しよに故郷に歸らうといふとき、その歸り道の途中にあたるある國の大名が、むほんを起しました。街道筋には見張りの兵隊が十人も二十人もゐて往來の者は誰彼の容捨なく引とらへ持つてゐるお金はことごとく取りあげて了ひ、その上否應いはず軍の人夫にして了ふなどいふ噂さが、まるでつむじ風のやうに傳はつて來ました。

『どうも困つたことになつたものだ。本街道を行けばどうしても戦さの騒ぎにぶつかなければならぬ。戦さに出あはぬ迄も見張りの兵隊にはきつとつかまる。お金を取られた上に俄か仕立ての兵糧かきなどにされて牛馬同様にこきつかはれたりしてはかなはない。』と、一助はため息をつきつひままし

とを考へて、胸のうちに深く耻ぢた。また、今まで新太の馬車のことを『ガタタリ馬車』と云つて、侮つて來たことを思ひ出して耻ぢた。

『濟まなかつたな。おれがわるかつたよ、今まで、おめえと口一つきかなかつたんで……』

運轉手は、二十五六の若者であつたが、新太がなにくれとなく手を貸して、自働車の始末をしてゐる時、ふいに新太の手をとつてさう云つた。運轉手にとつては、云ひにくい言葉であつたが、わるいと感じた今、すらすらと口をついて出た。そして、手を握りながら、頭をさげた。

『なあに、お禮なんか云はんでえうだ。みんなお互ひこつこだあ。』

新太は、その時も、ふつと旅人のことを思ひ出した。人間と人間のふしぎなつながり、そして、どこにもわるい人間はゐないといふ感じが、新太の胸を動かした。

あゝ、その時、ほかにだれ一人、見てゐる者はなかつたが、昔ながらの山は、春の光のなかで、ぬくぬくと暖められながら、このよき場面を眺めてゐはしなかつたか？

また、青い青い空も——すぐそばに立つてゐる幹のくねつた松も——やはり、このよき場面を眺めてゐはしなかつたか？

新太は、しあはせな氣持で、今も豫いでゐる。父親は、新太に對して、危ながつてゐる氣持を、もう今は持つてゐなかつた。

父親もしあはせであつた。をり／＼新太は、たくさんお客を乗せた日なぞ、父親のために酒瓶を、駟者臺の下に入れて來た。父親の病氣も、この頃は大方いゝ方であつた。

母親が生きてゐてくれたら——それだけが新太の心を淋しくした。

(をほり)

た。

『さうだ。牛馬どころかまかり間違へば二つとない命まで取られて了ふかも知れない。』と、二作は首筋をおさへてブルブルとふるへました。

『今日も町の人のいつてるのを聞けば、都方から食ひとめに行つた軍隊は、賊軍のためにメチャメチャにやられて了つたさうだ。賊軍はその勢に乗つて



都道攻めよせて來るといふ事だ。もしそれが本當だとすると、この都にも安心してはゐられない。』と、三吉はつき物でもしたやう、にそこら中をキョトキョト見廻しながらいひました。

『ぐづ／＼してゐると、出ることも引く事も出来なくなつて了ふかも知れない。一その事、運を天に任せて出かけるとしやうちやないか。本街道を離れてあべこべの路から途中で山へ這入つて、そこから山傳ひで行けば、日数は倍も三倍もかゝるが途中で難儀に出あふやうな事はあるまい。』と、一助は二人にかう相談を持ち出しました。

『どうも今のところではさうするより他に仕方はなさうだ。』

『さうだ。たとへ日数はかゝつても、又路は峻険でも、無事に歸るところへ歸れさへすればいい。ではこれから直に出かけよう。』

と、二作も三吉も直に賛成して早速に旅立ちの支



度に取りかかりました。

二

三人は山から山へ谷から谷へと路を求めて歩きつづけて行きました。都に居たときに聞いてゐた亂暴な兵隊の噂や身の毛のよだつやうな戦さの話などとは全く離れて、澄み徹つた谷川の水音や美しい小鳥の囀りや遠く幽かな木を伐る音やを思ひ思ひの道

づれにして、寂しいけれ共今迄にない静かなのんびりとした気持ちで、お互いのん氣な話を取り交はしながらある時は岩の洞穴にねたり又ある時は炭焼小屋に泊めて貰つたりして、いくつかの峻しい山を越し、又いくつかの深い谷を危い丸木橋をたよりに渡りさうしていく日かを過ごして行きましたが、ふとある日の朝、一助は俄に氣がついたやうに顔色をかへていひました。

『どうも私達は路を間違へて了つたらしい。何故といふのに、今迄西へ西へと方角をとつてゐたんだが、今朝になつて見ると、私達の路は日の出る方へ向つてゐる。』

『それは困つた。一體今私達のあるところは何といふところなんだらう。向ふに見えるあの高い山は何といふ山だか君は知つてゐるか。』と、二作はいひました。

『私は富士山より外に知つてゐる山はない。』と、三

吉はじやうだんのやうな事を、大さう引きしまつた顔をしてみひました。

「いやそればかりではなく、この路のうねつて行く先を見玉へ。あの森の向ふに細く糸のやうになつて白く見えてるだらう。誰にも判る通りすつかり下り坂になつてゐる。さうして下り切つたところは、あのやうな廣い原つばだ。まるで沙漠見たいな原つばになつてゐる。私はまだ、山の中にあんな大きな原つばがあるところなんか見た事も聞いた事もない。」

一助のいふ通り三人の行く路は、山の尾根を傳つて下つてゐました。そしてその向ふにはまるで沙漠のやうな原つばが果てしもない灰色を擴げて居たのでありました。

「路を取り違へたかも知れないが、今更あとへ引かへしたところで同じ事だ。とにかく行けるところ迄行つて見よう。」

「さうだ。さうするより外はない。さうしたらそのて来て、空の色までが、地面と同じやうな灰色にばやけ出して來ました。」

「何といふ寂しいところへ來てしまつたんだらう。しかももう日の暮れだ。間もなく夜がやつて來る。一體どうしたらいいのだらう。」と、三吉は泣き出しさうな聲でいひました。

「晝間でさへやり切れない程寂しい原つばだ。こんなところを歩きつづけたら、誰だつて生きてゐるといふ事はどれ程つまらない事だかつて事を考へたくなるに違ひない。」と、二作は心細げにブツ／＼いひ出しました。

そんなことを云ひ合つてゐる中にも、太陽はどんどんと落ちて行きました。さうして地面と空との境からは暮が張られてでも行くやうに次第次第に薄暗くさうして次第次第にその色が濃くなつて行きました。と、突然一助がいひました。

「あれ、あれを見玉へ。星ちやあない。たしかに燈

一八
うちには木樵りか炭焼きか何かに行きあふだらう。人を見かけ次第聞いて見れば又何とかなる。」

と、二作と三吉はかたみがはりにいひました。

三

三人の歩いてゐた路は、その廣い原つばの中途でばつたりと消えて無くなつてしまひました。車のあととはもとより、人の足跡も獸の歩いたらしい跡も全くなく、ところどころに一かたまりづゝの青い草が生へてゐる以外には、ほとんど石つころと沙としか無い、それこそ思ひ切つて寂しい景色でありました。見かへる後ろには今迄通つて來た山の姿が既に雲に半分過ぎまで隠されてぼんやりと頂きを霞めて居るさりで、行く先には右にも左にも目あてにする森はおろか、一本の木の影さへも見えてはゐませんでした。

さうかうするうちに日の影さへもだん／＼と傾い

火だ。あそこにはきつと家があるに違ひない。」

と、一助が指した方角に、なる程ボツツリと一つ闇に開いた瞳のやうな火の光が見えて居りました。

「なる程、たしかに燈火だ。どういふ人の住家だかは判らないが、とにかくあれを當てに訪ねて行つて見よう。」と、三人は急に元氣づいてその燈火の射す方へと歩き出しました。

間もなく三人は大きな門がまへの、まるでお寺のやうな大きな家をたづね當てました。さうしてその廣やかな玄關の前で異口同音に「御免下さい。」と叫んだのでありました。

「オーイ」

「オーイ」

「オーイ」

と、中でも同じ調子で三聲一とくにこたへて來ました。さうして重々しい足どりと一しよに、がらりと、玄關の障子が明けられました。

そこへ立ち現はれた人を見ると、三人は思はず、「きやア」とばかり、一ときに悲鳴をあげて、さうして三人が三人ながら、ベタベタとその場へへたばつて了ひました。

家の中から出て来た人は、朱色の繪にかいた唐人のやうな着物を着てゐました。さうしてその着物の上には顔が三つ乗つてゐました。さうしてその顔はどれも關羽のやうに長い嚴めしい髯を生やして眞赤な顔には鏡のやうな眼がらん／＼と輝いてゐたのでありました。

「アハ、ハ、ハ」と、三つ頭の人は三つの口を開けて大きな聲で笑ひました。

「怖がるには及ばない。お前方からはこの私が化物に見えるだらうが、私から見るとお前方の方が却つて化物だ。——いやそんな事はどうでもいゝが、お前方は……」

と、三つの口が一しよにかういひました。

「お前方は路に迷つた上にこゝ迄やつて来たんだな。」と、これは一ばん左にある頭がいひました。すると今度は眞中の頭が直ぐとその後を引き取つて、「さうしてお前方は大さう草疲れてゐる上に大さう腹を減らしてゐる。まア、こつちへ上つたがよい。」と、いひました。

頭が三つ、しかもそのどれもが恐ろしい顔ではありましたが、さういふ聲や調子には何ともいへぬ優しさと、人なつこい情愛が籠つてゐたのであります。三人はたちまちに今迄の驚きと恐ろしさとは打つて變つた本とうに心から安心した氣持ちになつて了ひました。さうして、少しの疑ひもなくその三つ頭の人に導かれて奥の間に通つて行きました。

「おい、お客様が三人見えた。御馳走をして上げろ。」と、三つ頭のまん中のがいひました。

次の間には優しい女の聲でこたへがありました。と一しよに、さらりと間の襖が開けられました。そ



こへ立ち現はれた人は髯通り女の姿をしてゐましたが、それもやつぱり三つの頭を持つて居りました。同じやうな唐人の風をした胴から、てうど枝の生へたやうに頸が三つに分れて居りました。そしてその上にはちようど花が咲いたやうに美しい顔がどれも同じやうに笑つてゐたのであります。

「これは私の妹だ。」と、關羽髯の男はさういつて三人にその女を引き合せました。



三つ頭の妹の拵へたいろ／＼の御馳走が三人の
前に山のやうに持ち出されました。その御馳走は三
人が三人ながら今迄見た事も嗅いだこともない、世
の中にこんなうまいものがあつたのかと思ふやうな
結構なお料理ばかりでありました。三人はそれを食
べてゐる間にも、まず／＼心は安いでまるで自分達
三人の體が一つの體になつて、頭丈が三つに岐れて
でもゐるやうな氣持ちになつて、相手の三つ頭の人
とは久しぶりであつた友達か何かのやうに打解けて
話し合つたのでありました。さうした愉快な話を聞
きながら、三つ頭の妹は始終ニコ／＼笑つて居ま
したが、その話半ばにその兄の三つ頭にかうさうや
きました。

「この人達は私の見たところでは、どの人も今迄福
運に恵まれてはゐなかつたやうですね。」と、その
左の方の頭がいひました。

「さうだ。私の見たところもお前と同じだ。殊に、

四

あくる朝になりました。

男の三つ頭は庭の隅の大きな櫻の樹の枝を一本切
つて来て、それを三人のうちの一助の手に渡して、
「君達は今迄目ざしてゐる方角とはまるで反對の方
角へ向つて歩いてゐた。こんな事をしてゐては百日
歩いたつてとても故郷に歸することは出来やしない。
しかしこの木の枝を持つて行けば迷つた路から出る
事も出来やうし、又これからは方角を取り違へる事
もない。これをかうやつて、日に磨いてその落ちた
影を踏んで行きさへすればよいのだ。ところで、も
う一つ注意しておくが、今日から二日半ほどすると
君達は又山へかゝる事になる。その山の申腹には古
い小さな辻堂がある。多分君達はそこで晝飯を食べ
る事になるだらう。晝飯を食べても休んでも決して
差支へはないが、その辻堂の軒の鰹口を鳴らす事は

一番上手に坐つてゐる男などは、幼い時に両親に死
なれてゐる。」と、男の左の頭がいひました。一番上
手に坐つてゐたのは一助でありました。

「ところで、この先ともどんな事になるでせう。
私の見たところを申しませうか。」

「あゝ、いつて御覽。」
「一番上手の方丈は長命でさうして福運もかなりあ
るやうですが、外のお二人は誠にどうもお氣の毒な
事になりさうですね。」と、三つ頭の右の方の頭がい
ひました。

「私もさう思ふ。」

「どうにかしてそれを逃れるやうな方法はないもの
でせうか。」と、今度は三つ頭のまん中の頭がいひま
した。

「私もそれを考へてゐる。明日の朝までに何とかい
い考へが出るだらう。」と、男のまん中の頭がいひま
した。

勿論忘れても手を觸れてはいけない。必ず君達に大
難が降りかゝる。いゝかね。」と、三つ頭のまん中の
頭と右の頭とが交々にいひました。

「誠に何から何まで御親切に有り難う御座います。

厚く御禮を申し上げます。……ところで、そのあなた
様は」と、一助がいひました。

「あの何といふ神様でゐらつしやいませうか。」

「どうか、お名前を仰やつて下さいませんか。私達
は今後自分達の守り神として……」

と、二作と三吉とが後を引き取つて交る交るにい
ひました。

「アハ、ハ、ハ、私は神ではない、君達の見た通り
の三つ頭の化物だよ。だが、とにかくに、君達にこ
れ大の事はいつておかう。私のこの左の方の頭は人
間の過去の事を見る働きをもつてゐる頭、真中ののは
現在、それから右の方の頭は未來の事を見透す力があ
る。私の妹の頭も私と同様だ。」と、まん中の頭が

いひました。

五

三つ頭の人がいつた通り二日半ほどすると果して路は又山へかゝつて行きました。そしてその山の中



腹迄来ると、三つ頭の人いつた通り果して古びた辻堂がありました。

「三つ頭の方はこゝで休んでも晝飯を食べても決して差支へはないが、只鰐口に觸つてはいけないと云つた。だから、晝飯を食べる丈なら少しも悪い事はないわけだ。どうだこゝで辨當をつかふとしようではないか。」と、一助がいひました。

「さうしよう。私はこの辻堂を見ると、どうしたものが急にお腹が減つて了つた。何だかもう一足も歩けさうもない。」と、二作がいひました。

「私もさうだ。早速にお晝としようではないか。てうど、側にはこんなきれいな水も流れてゐる。」と、三吉は側の岩傳ひで流れて来る清水を手で掬つて一口飲みながらいひました。

三人はその辻堂へ腰をかけて、お辨當をつかひはじめました。さうして、三人共にやうやく食べ終らうとすると、ふいに、何千何萬とも数へもならぬ程



澤山の鴉がけたゝましい羽音、けたゝましい鳴き聲と一しよに、空をまつ暗にして襲ひかゝつて來ました。さうして交る交るにその鋭い嘴で三人の頭や眼をねらつて突つつきにかゝるのでありました。一助は幸に三つ頭の人から渡された木の枝を持つてゐたので、それを頭の上で振り廻はしてゐましたが、

得物のない二作と三吉とは兩手の握り拳丈ではとても追ひつかないで、いきなり路傍の小石をつかみ程拾ひとつて、バラバラと投げつけました。

と、その石の一つが外れて、辻堂の軒に釣るしてあつた鰐口へぶつかりました。「ガーン」といふ音——それが、辻堂の中一杯に鳴り響いたと思ふと俄にあたりが震動するやうな凄まじいこだまが起りました。

今迄群がつてゐた鴉がバツと一ときに消えて無くなつて、カラリと空が明るくなつたとたんに辻堂の奥からは青赤二疋の鬼が飛び出して來ました。

「うわあ」と、三人が首を縮めて逃げ出す間もなく早くも二作と三吉は、その鬼の爲めにつかまへられて了ひました。

一助だけがこの危いところを逃れられたのは、多分三つ頭の人にくれた木の枝を持つてゐたからだらうといふのでありました。

(をばり)



愛犬物語

小島政二郎

寺内萬治郎畫

二六

七

バックが幾ら利口な犬でも、まだ経験のないこと故、橋の先導犬としてはスピッツやソルにはとても叶ふまいと、フランソアは考へてゐました。ところが、どうでせう。彼がこの上の先導犬はないと信じ

てゐたスピッツよりも、バックの方が一層すぐれてゐることが、その日のうちに證據立てられました。殊に、自分の組犬全體に規律を與へて、それに服従させることにかけては、バックは不思議な力を持つてゐました。デーブとソルとは、誰が先導に就かうが、そんなことには頓着なく、たゞ橋を惹いてさへゐれば愉快だと云つた風の純粹な橋犬でした。で

すから、面倒はありませんでした。しかし、バックのすぐうしろにゐるバイクと云ふ犬は、狡い奴で、叱る者がゐなければ少しも力を入れず怠け放題怠けてゐました。

どうしてバックがそれを許して置きませう、忽ち飛びかゝつて、さん／＼牙できめつけました。すると、その日のうちに、バイクの怠け癖が直つて、今まで見たことがない程一生懸命に惹き出しました。

その晩、夜營地に着いて草具から解かれるのを待つて、バックは、今度は性惡のジョーをメチャ／＼に牙で罰しました。ジョーに向つては、流石のスピッツも一目置いてゐたのを、バックは平氣で立ち向つて、譯もなく降伏させてしまひ、莽猛なジョーがしまひには又向ふことを止めて、キャン／＼哀みを乞ふまで攻撃の牙を弛めませんでした。

これでもう、バックの規律に背向く犬は一匹もなくなりしました。組犬全體が、まるで一匹の犬のやう

に調子を揃へて、素晴らしい速さで橋を惹きました。『リンクの瀧』と云ふところで、チークとクナと云ふ二匹の山犬が加へられた時など、バックは忽ち二匹を牙で征服して、おとなしい自分の部下にしてしまひました。

『どうだい、バックのやうな犬は、鐵の靴を穿いて探したつてありやしないぜ。』と、フランソアが目を輝しながら云ひました。

『全く、こいつは千弗以上の値打がある。』

實際、橋は、バックの指揮のよろしきを得て、實によく走りしました。往きに五日かゝつたところを、歸りは一日で通り越しました。湖の地方を十七時間で七十哩走つた時には、フランソアやベローの方々が、却つて橋のうしろの網の尖に體を縛り附けて、やつと附いて行つた程でした。ですから、二週間目には一行は早くも目的地であるスカグエーの町へ着いてゐました。つまり、毎日平均四十哩走つた譯で、

二七

こんなことは未だ會つてない早さでした。

『え、おい、どうだい。』

ペロールとフランシアの二人は、町の本通りを歩
きながら、犬師共に出逢ふ度に、かう云つて自慢し
ました。

『俺達のバツクを見てくれよ。』

バツクばかりでなく、組犬全體が、町に集まつて
來てゐる犬師共から尊敬されました。ペロールとフ
ランシアとは、毎日のやうに仲間から酒盛の招待を
受けて、名譽な思ひをしました。

しかし、やがてバツクを始め組犬全體が、ペロー
ルとフランシアとに別れなければならぬ日が來ま
した。と、云ふのは、ペロールが政府の命令を受け
て、外の土地へ行かなければならなくなつたからで
した。

『バツク、バツク。』

フランシアは、別れて行く時、バツクを抱き締め

て泣きました。

八

バツクの今度の主人は、混血兒でした。

その頃、アメリカでは、アラスカの金鑛探検が大
流行で、我れもくと慾張連が出掛けて行きました。
で、あとに残つた家族の人達が、雪の深い北極に行
つてゐる息子や良人の身の上を心配して出す手紙や
小包が山のやうに溜まります。郵便局では、それを
橋に積んで、一々届けなければなりません。バツクの
組犬を買ひ取つた混血兒と云ふのは、さう云ふ郵便
橋を指揮する人でした。

郵便橋は、一臺や二臺では、ありませんでした。
従つて、犬も全部合はすと、百匹近くもゐました。
その中には、癡猛な喧嘩犬もゐましたが、中でもみ
んなの恐れてゐる猛犬三匹と、バツクは激しい命の
遺取りをして、完全に勝つて、百匹近い犬を悉く



自分の手下にしてしまひました。どんなに威張つてゐる犬でも、彼が一たん齒を刳いて毛を逆立てると、忽ち路を避けるやうになりました。

しかし、バツクは郵便橋の牽犬の役を喜びませんでした。尤も、この旅行は随分と苦しく、犬共はみんな疲れて弱つてしまひました。それでも、どうにかかうにか、目的地のドーソンへ着いた時には、彼等はみんな瘦せ衰へて、少くとも一週間は休息しなければ元氣を回復することは六ヶ敷さうに見えませんでした。

ところが、混血兒は情容赦もなく、中一日休むと、三日目には、早くもまた、アラスカへ来てゐる人達が故郷へ送る手紙や小包を一杯に積んで、スカグエーの町をさして歸路につくことになりました。犬はいよいよ疲れて、犬追の人々が幾ら小言を云つても、云ふことを聞きませんでした。おまけに、雪が毎日降るので、路は柔く、犬はますます挽くの

骨が折れるばかりでした。

しかし、夕方が来て夜聲が張られると、犬追達は、何をおいても自分達の犬を一番初めに勢はることを忘れませんでした。人間よりも先きに食事をするのは犬でした。そのあとで、犬の足の裏を調べる、それが済まないうちは、犬追達は決してパンを噛むことをしませんでした。さう云ふ風に、大事にされながらも、犬全體の力は弱つて行く一方でした。考へて見れば、冬の初めから、彼等は既に千八百マイルと云ふ長距離を、橋を挽きつゝ歩いてゐました。どんなに強い犬でも、千八百マイルを歩いては弱るのが當り前でせう。

ところが、バツクは見事にそれに堪へ忍びました。彼とてもヘトヘトに疲れてはゐたのですが、それでも猶、仲間の犬を勵まして、よく秩序を保つて働かせるやうにしました。ビリーは、毎晩寝てから、キャン／＼泣き悲しみました。ジョーはいよいよ性

が悪くなり、片目のソルは氣が荒々しくなりました。あのデープは、この旅行中、雪の大海原の真中で病を起して死んでしまひました。死ぬ時のデープについては、悲しい勇ましい物語がありますが、話が脇へ逸れますから、わざと省いて置きます。

ドーソンを發つてから三十日の後に、郵便橋は、バツクとその組犬と共に挽かれて、漸くスカグエーの町へ着くことが出来ました。しかし、犬達は疲れ果て疲れ切つて、見るも哀れな有様をしてゐました。百四十ポンドからあつたバツクの目方が、百ポンドに減つてゐました。ジョーもソルも跛を引き、ビリーは肩の骨を挫いて苦しんでゐました。外の犬達もみんな足をひどく痛めて、跳ねる力も飛ぶ力も全く抜け切つてしまつてゐました。もう精も根も使ひ盡して、この上は唯倒れるのを待つばかりでした。

「しつかりしろよ。」犬追達は、組犬全體が重い足

を惹きすりながら、ヨロ／＼とスカグエーの町の大通を下つて行くのを見て勵ました。

「もう少した。小屋へ着けば、休めるぞ。今度はゆつくり休ませてやるぞ。」

實際、犬よりも犬追達の方が、休みたくつてウツクツしてゐました。ところが、小屋へ歸り着いて見ると、留守の間に溜つた郵便物が、また山のやうに積まれて、彼等の歸るのを待つてゐました。で、彼等は、三日休息を取ると、またしてもドーソンをさして出發しなければなりませんでした。

しかし、犬は一匹とて役に立つものはありませんでした。で、混血兒は惜しげもなく、革具ぐるみ全部賣り拂つてしまひました。

九

バツクは三日の間寝通しました。四日目に目をさますと、新しい主人が傍に立つてゐました。一人は

チャールスと云つて三十五六の男、一人はハルと云つて、十九か二十の青年でした。ハルの方は、ピストルとナイフとを腰にさげて、革帯には彈丸を一杯付けてゐました。

天幕へ連れて行かれて見ると、今までバックが見馴れてゐたキッチンと整頓された夜營の様子とは違つて、いろいろのものが出しっぱなしになつてゐて、見るからダラシのない光景でした。もう一つ、バックの驚いたことには、二人の外にメルシードと呼ばれる女のゐることでした。彼女は、チャールスの妻、ハルの姉でした。

見るから、この三人が、雪國の旅に不馴れの人であることはすぐ分りました。しかも、この華奢な體の都會人が、女連れで、アラスカへ金鑛の探検に行くのだと聞けば、驚かない人はないでせう。バックは不安な氣持で、この三人がテントをはづすのを手始めに、いろいろな品物を櫓に積み込むの

を見守つてゐました。彼が不安に思つたのも無理はありません。三人達は、テントの疊み方一つ満足には知りませんでした。ですから、上手な人がたゞ三倍にも嵩張りました。

メルシードはメルシードで、着物のほひつてゐる袋ばかり大事にして、チャールスが櫓の前方へその袋を抛り込むと、

「あら、いけませんわ。それは是非うしろへ積んで頂戴。」

ハルが受け取つて、うしろへ積み、その上へ二つ三つ外の荷物を重ねて、荷全體を革紐で締め上げようとしてゐる時、

「ハル、ちよつと待つて。私寢間着を仕舞ふのを忘れたわ。今の袋を取つて頂戴。」

で、折角積み終へた荷を、また卸さなければなりません。そんなことで、いつまで經つても、荷拵へが出来上りませんでした。

すると、その様子を見た近所のテントから、三人の男が出て来て、互に目くばせをしながら、笑ひたいのを堪へて眺めてゐました。

「大變な荷を拵へたもんだなあ。」

やがて、一人がさう云ひ出しました。

「どうする氣なんだらう。」と、外の一人がポケットに兩手を突ッ込んだまゝそれに答へました。

すると、もう一人が銜へてゐた煙草を捨て、「餘計な差出口をするやうですが。」と、バックの主人の方へ歩み寄りながら云ひました。「わし達なら、そんなテントは持つて行きませんがね。」

「まあ、テントを持つて行かないんですつて？」メルシードが驚いてこちらへ振り向きました。

「テントなしで、どうして夜が過せるでせう。」

「だつて、もう春ですよ。テントがなくなつては眠れない程寒い日はありやしませんよ。」

(つづく)





童謡

野口雨情選

(大人篇)

芒(賞)

高橋徳三郎 (英城)

狐の家が
芒のなかに
さらさらはい

狐がよびます
子供の姿して
ちらちらはい
ながいお手で
手まねきします
さらさらはい

親馬(賞)

茶木 七郎(横須賀)

馬屋で親馬
夢を見る
かわい子馬の
夢を見る
馬屋の親馬
月を見る
白いひる間の
月を見る

野風呂

仙波しげる (愛媛)

ケンケン 野狐山狐
こんばん外風呂
沸きました
冷たい三日月 山の月
遠くに木枯吹いてます
お風呂が冷めたら
焚きましよか
夜風が寒いよ
氣をおつけ
ケンケン 野狐山狐
お風呂があいたが
入らないか
ケンケン 野狐山狐
外風呂冷めたら
夜が更ける

おぼろお月さん

名方 和郎 (大阪)

おぼろお月さん
おしやれ月
日傘をさして
出て来てる
綺麗に花が
咲いたから
夜櫻ながめに
来たんだろ
日傘をさして
ながめてる
おしやれお月さん
おぼろ月
かくれんぼ
立花 清 (東京)
お蔵の 中から

もう いーかい
葉屋の うしろで
もういいヨ
鶏や黙つて
しらんかほ

土堤の水引

本多 鐵磨 (東京)

土堤の
みづひき
赤とんぼ
小供はかへる
かげながい
向ひのやぶに
なく雀
おまへも
お家に

戸をたてろ

いたち

若衣ひろし (廣島)

いたちが
いたちが
言ふてたぞ
こんばんこつそり
はつてで
お堀の鯉を
とつちやふと

雀

大島 秀夫 (豊橋)

たんぼの稲は
刈られたに
雀きてなく

今日もなく

たんぼの水は

涸れたのに

雀きてなく

今日もなく

さり株たんぼに

風吹くに

雀きてなく

今日もなく

春の空

柳瀬まさし(和歌山)

春の空は
ねむいね
とろ／＼ 薫も
ねむさうね
春の空は

ねむいね

うつとりお山も

ねむさうね

我が家

首藤 花枝 (東京)

とうやがくる／＼
わらをひきや
母やはかた／＼
はたおりだ
姉やはねん／＼
子守歌
たまやおこたで
おねんねだ
夕やけ小やけの
日もくれた

冬の夜

能登 鯛介 (秋田)

冬の夜は寒い
猫の眼は光る
冬の夜はながい
月がしろく出てる
厩の馬は
まだまだ寝ない
冬の夜は怖い
狐ないてあるく

冬の朝

藤野富久雄 (大阪)

からつころく
下駄の音
土のいててる

寒い音

からつころく

下駄の音

すべつてころぶな

はををるな

港の夜

名和 暢兒 (福岡)

らんぶが消えても
びつちやりこ
子供が泣いても
びつちやりこ
大きな船にも
びつちやりこ
小さい舟にも
びつちやりこ
びつちやりこ

びつちやり
夜が更ける

牛かひ

日高 紅椿 (臺灣)

お牛を引いた
牛かひは
ねむの街道を
行きました
短いおべの
牛かひは
わき見もしないで
行きました

松の細葉の

濱田 均二 (小樽)

チラリ チラ チラ

雪や やつて来ます
庭の松の木
みな かこひました
見ても暖かそに
お庭の松よ
雀 来てなけ
チラチラ雪ぞ
松の細葉の
かげでなけ

田圃道

松井 雅夫 (福岡)

麦笛
草笛
青い唄
雲雀が
ビリユル

青い空

お使ひがへりの

田圃道

米つきばった

平岡いはは (東京)

ばつたん ばつたん
米つきばった
今日も朝から
米つきだ
はよはよ 倉建て
米つきな

日暮道

橋本 暮村 (群馬)

枯草カサリコ
日暮道

ふこのから箱
お辨當箱よ
枯草カサリコ
日暮道
いたちがヒョッコリ
とびだした

夜道

中村 武男 (東京)

お星さん 夜道は
暗いでしょ
ほれほれ 鼻が
啼いてゐる
お星さん 提灯
消えそうよ
はれはれ 夜風が
吹いてゐる



捨てられた仔犬

牧 氷 雨 (宇都宮)

夜道

涙 浮いても
西風強い
顔へる 芝生に
ねんねも出来ず
三日月様が
かくれたら
仔犬何見て
なくののだろ

みの虫

西野 光兒 (岩手)

みの虫 みのぬげ
雨やんだ
雨降つた上りは
夕やけた
みの虫 簀ぬいで
簀をほせ

熊と子供 小寺融吉 劇童児

きいち画



熊、豚、狼、子供（男でも女でもよし）

（幕があくと、豚が寝てゐる。下手から熊が出てきて、豚を起す）

熊。オイ、豚ちゃん、豚ちゃん。

豚。だれだ、せつかく寝てるところを起すのは、熊公かい。

熊。よく毎日さうねられたもんだなあ。

豚。世の中に、ねるほど楽はなかりけりだ。それに肥つてゐるから動くのが面倒だ。

熊。怠け者め。今日は一つたのみがあるんだが、聞いておくれよ。

豚。ねてゐて出来ることならいゝがね。
熊。實はかうだ。僕はコレ此のとき、身體中毛だ

らけでブク／＼だらう。だから冬はおかげさまで寒さ知らず、生れて風邪を引いたことはないが、そのかはり、夏になると暑くてかなはない。とてもたまらない。

豚。そりやアさうだらう。夏は暑いや。

熊。ところが此の間、町へ下りてゆくと、人間が僕を見て、あんなブク／＼した外套をきて、羨しいなと云つたので、やつと氣がついた。

豚。へえ、なんと氣がついたね。

熊。つまり此のブク／＼したものは外套だといふことさ。外套なら冬はきて、夏はぬげばいゝんだ。ずるぶん僕もウツカリしてた。

豚。ウフ、ハハ。（ト笑ふ）

熊。笑はずに開きたまへ。そこで僕はもうソロ／＼外套をぬぎたいが、ボタンがどこについてゐるのか、身體ちう探したが分らない。頭のテッペンから足の裏まで探したよ。

豚。見つかつたかい。

熊。見つからない。あとは背中だ。然し自分で自分の背中に手が届かない。仕方がないから誰かにたのんで、ボタンをばづしてもらひたいんだ。すまないが君たのむよ。此の外套をぬいだら、どんなに身軽になるか知れないんだ。

豚。お安い御用だ。そんなら君の背中に僕をのつけたまへ。

熊。いゝとも（ベタリと大の字形にねる、豚の上に仰向きにねころぶ）

豚。全く毛がブク／＼してあつたかい。とても寝心地がいゝぞ。

熊。なんだつて。

豚。ナニ、ボタンはなか／＼はづれないよ。少しの間、待つんだよ。

熊。いゝとも。

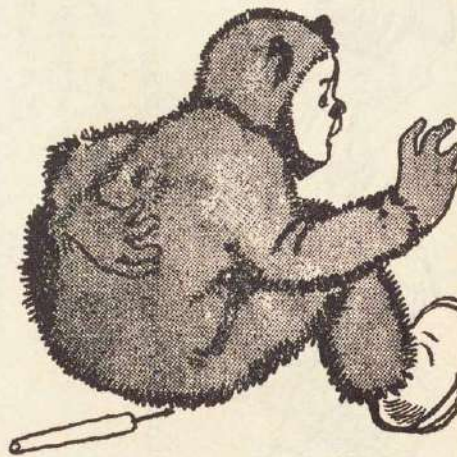
豚。ダウ、ダウ（トいびきをかく）

熊。君、まだかい？
豚。あゝまだだ。もう少しだ。グウ、グウ。
熊。まだかい。
豚。まだよ、グウ、グウ。
熊。まだかい？おい……おい、なんだ、イビキをかいてるぢやないか（ころがる）
豚。（落されて目がさめる）あゝッ。
熊。君ッ、今か——と、今日で一週間待ったんだぜ。



ボタンは、はづしてくれたかい。
豚。トテモ堅くてダメだった。
熊。ナインダ、バカ／＼しい。（怒って上手に引っこむ）
豚。一週間も立つたかな。あんなあつたかなふとんの上に寝たのは始めてだ。あゝいゝ氣持だった。バカな熊だ。毛だらけなものだから、外套をきてると思つてゐる。をかしな奴もあるものだ。（下手に引っこむ）
熊。（上手から出てきて）あゝ損をした、一週間豚の寝どこになつてやつた。誰か正直な奴がこないかな。

熊。（下手から出てくる）熊さん、しよげてゐるね。
熊。おゝ猿公か、いゝ所へきてくれた。僕は此の外套をぬぎたくてしようがないんだ。背中のボタンをはづしてくれ。
熊。なんだつて、外套をぬぐつて？
熊。だつて、こんなに春になつたぢやないか。背中



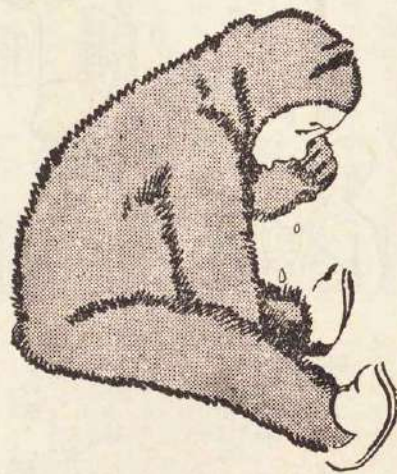
のボタンを外してくれ。
熊。（横を向いて）コイツ、すゐふんまぬけたなア。ヨシ、ふだんの仇を取つてやらう。
熊。ねえ、たのむよ、猿公。
熊。承知した。ドレ向ふを向きたまへ。（客に熊の背を

見せるやうにして）なるほどボタンが五つついてるぜ。
熊。すぐ見つかつたかい？
熊。だつて、こんなに大きな丸いボタンなもの。ここに一つ。ここに一つ。これで三つ。こゝにも。これで五つ。
熊。あゝありがたい、早くはづしてくれ。
熊。まあ、すはりましたまへ。（すはらせる。そしてポケット（又ははふところ）から鋏、キリ、釘抜きを出す）
熊。（向ふを向いたまへ）君、一週間なんてかゝらないだらうね。
熊。かゝつてたまるものか。ほんの一時間だ、けれどもその代り少し痛いよ。
熊。一時間のことなら、がまんする。
熊。（キリで熊の背中を突く）
熊。（とびあがる）痛いッ。
熊。だつて、かうしなければ、はづれないよ。

熊。さうかい、ヤレ〜（元のとほりになる）
 狼。（キリを突いて、鐵錘で打ちこむ）
 熊。（右にころがる）痛いッ。
 狼。ダメだなあ。
 熊。（元へ起き直り）これも我慢するのかい？
 狼。せつかく取れかゝつたのに。
 熊。仕方がない。
 狼。（今度は釘めきで毛をむしる）
 熊。（左にころがる）痛いッ。
 狼。ふだんおれをいぢめるから、その仇を取つたん



だ。いゝきみだ（ト上手へ逃げる）
 熊。（お客の方へ向いて座り）ドイツもコイツもひどい奴ばかりだ。ゆだんもすきもありはしない。（下手を見て）ヤッ、向ふから、かあい、子供がくるぞ。旨さうな奴だな。あいつを取つてたべてやらう。（思ひついて）さうだ、あの子供にボタンをはづさせやう。その上でたべるといゝわけだ。
 子供。（下手からくる。男の子なら、次ぎのお嬢ちゃんを坊ちゃんに改める）
 熊。お嬢ちゃん〜。
 子供。こんにちは熊のおぢちゃん。
 熊。一寸おねがひがありますが、聞いて下さいな。私は今この外套をぬがうとしてるのですよ。けれどボタンは背中についてゐるので、自分の手は届かないのです。すみませんが、お嬢ちゃん、取つて下さい。
 子供。まアお氣の毒ね。ちや、わたし、取つてあげ



ませう。（熊の後にまはり、背中をさする）
 熊。（客の方を向きアグラをかき、早く子供をたべたいといふことを手まねで客に知らせる）
 子供。（左の手の掌をにぎって、前に出てくる）熊のおぢちゃん、ボタンはとう〜見つかかなかつたのよ。
 熊。見つかかなかつた？ ちやモウ、ボタンはどう

でもいゝ、早く此の子を（トせしめる）
 子供。でも、おぢちゃん、サツパリしたでせう？
 熊。え、ナルホド、さういふと、外套はぬがないが、なんだか、お風呂から出たやうにサツパリした。どうしてだらう。
 子供。だつて、ボタンがなかつたから、毛の中のノミを取つてあげたんだもの（ト左の掌をひらく、ノミが一ぱいたまつてる）
 熊。（それを見て）えつ、それちや、お嬢ちゃんはノミを取つて下さつたの……（ベタリと下にすはつておじまして）すみません。お嬢ちゃん。すみません……（涙をふく）
 子供。アラ、おぢちゃん、なにが悲しいの？ をかしいわ。

（幕）

「自然の不思議」

蠅取ベンベクス

宮嶋 資 夫
寺内 萬治 郎 畫



この前、左官蜂のことを書いたときに、左官蜂を、採集箱に入れて一里も遠い場所に運んで行つて放しても、すぐに自分の巣へさつさと歸つてくることを書きました。が、昆虫はみんなこう云ふ不思議な本能を持つてゐて、象鼻虫といふ虫を餌にしてゐる蜂も、やつぱり同じような本能をもつてゐることをファアブルは實驗しました。

このときもファアブルは、セルセリスを十二疋つかまへて、みんな別々の紙の漏斗の中に入れた上、一つの箱に入れて、半里も先の野原へ行つて放して見ると、セルセリスは、暗闇から真晝の光の中へ出た瞬間、一寸眼眩でもしたような風でしたが、その中にめい／＼空に飛上ると、別に自分の巣がどこらだらうと探すような風もなく

直ちに南の方、即ちもとの住家の方へ飛で行きました。そこでファアブルもすぐにもとの巣の所に引き返して見ると、どうでせう、さつき記しをつけて放したセルセリスの中の二疋がもうそこへ歸つて

の、セルセリスには便利だからいけないと考へたので、三キロ米突も離れた隣り町の人ごみのところ

さすがのファアブルも感心してゐます。

働いてゐるし、それから間もなく第三疋目の、途中で狩をした、自分の身體よりも大きい象鼻虫を引かへて、野から歸つて來たのです。四疋目のもそれに續いて歸つて來ました。それがファアブルが、その巢の所へ着てから十五分もたない中だと云ふのです。そこで今度は、また九疋のセルセリスをつかまへて、眞暗な箱に入れおまけに一晚、自分の家に泊てから、翌朝、野原の真中では田舎も

放されると、すぐに町の家の上の方へ飛んで行つて、一寸下を見下したと思ふと、すぐに元の巢のあつた、南の方を指して飛んで歸つてしまつたのです。そうしてみんな無事にもとの巣へ歸つたのを、ファアブルは翌日發見したのです。この田舎で育つたセルセリスには珍しい初めて見る家々の家根も煙突も結局邪魔にはならなかつたのです。

ベンベクスの巢は、こう云ふ巢の奥に出來てゐるのです。昆虫の觀察家ファアブルは、ある日の砂山のところに寝轉んでゐまし

た。七月のまだ暑い日が頭の上からかん／＼照りつけるので、彼は日傘をさして横になつてゐたのです。

すると、どこからともなく一疋のペンベクスが飛んで来て、別段あたりを探し求める風でもなく、自分がすつと飛び降りた場所を、丈夫な細い毛のついた筈にも刷毛にも、熊手にも見られるような前足の跗節でその地下の家を掘りはじめました。最後の二本の足を少し離して、四本の後足で突立つて前足で砂を掘つては掃くのです。その動作の正確で速いこと、云つたらまるでバネ仕掛のようです。腹の下に投げられた砂はまるで噴き出す水のように、後足の股をく

ぐつて、七八時も向ふへ飛んで行くのです。この砂の流れが、五分間も十分間も續いて行く事はこの器械がどれほど早く動いてゐるか云ふことを十分に説明してゐます。

いまこの虫の掘つてゐる砂地は實にさく／＼した動き易い所で、蜂が掘る、すぐとそばの地が崩れて穴を埋める。そうして崩れてくる土の中には、小さな木のかけもあれば、腐つた葉のいつばもあるし、大きな砂粒も交つてくるのです。するとペンベクスはそれを口に啣へて後すさりして遠くへ持つて行つて、また歸つて来て掃除をします。けれども穴を掘るように深く掘つても行かなければ、また

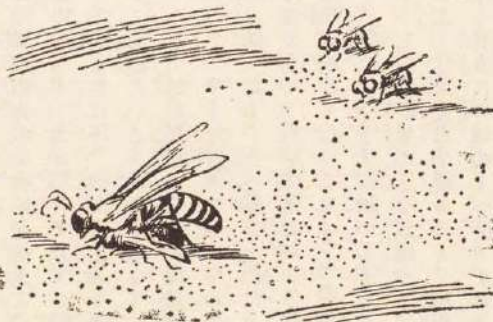
自分が砂の中へ潜つて行く事もしないのです。

これはどう云ふわけかと云へばこの砂の奥の、濕つてしつかりした、崩れない場所にペンベクスの巢が作つてあつて、そこには母型の運んでくれる、餌を待つてゐる幼虫がゐるのです。そうしていまペンベクスは、幼虫に餌を與えるべくお腹の所にしつかりと餌をおさへて、一生懸命に砂を掃いてゐるのです。おまけにもう一つ危険なことは、このペンベクスの労働の際をねらつて、その腹の下におささる大切な餌に、うまく自分の卵をひりつけようと絶えずねらつてゐる、寄生蠅が、後ろにちやんとひかへてゐます。もしこの蠅

に卵をひりつけられでもしたら、それこそ大喰な居候の爲に、大切な幼虫は餓死をしてしまはなければならなくなるのです。

ペンベクスはこういう危険をちやんと知つてゐるので、巢の中の幼虫に喰物が充分にあてがはれてゐる時には、いつも自分で巢のそとに出て、前足の熊手で砂を篩にかけるやうにしては邪魔なものを取り除けてゐるのです。小さな木の切れや、大きすぎる砂粒だの、木の葉の腐つたのを掻きのけて、自分が歸つて来たときに、なるべく速に頭で一つ押し、前足の跗節で一つかけばすぐ入れるような工合にしておかうとするのです。こういう時のペンベクスの勢

のよい樂しそうな工合と云つたら全く母たることの満足に浸り切つてゐると云ふ風なのです。



で、ペンベクスがゐない時に、その掘つてゐたあとを小刀でそつ

と掘ると、やがて玄關が現はれます。この玄關口の坑道が、真直であつたり曲つてゐたりすることはあつても、大抵八時から十時ぐらゐまでの長さがあつてその突當りの濕つた砂の中に、たつた一つの室があつて、そこでペンベクスの卵は、金蠅の死體の上に生みつけられてゐるのです。

卵は二十四時の後に孵つて、幼虫になると自分の生みつけられてあつた金蠅とか、さし蠅、はなあぶの死體を喰ひはじめなのです。それから母親は忙しくなるのです。この幼虫は實に大食で、繭になるまでの二週間ほどの間に、フアーブルが實驗した所によると八十二疋もの蠅を喰へてしまつたと

云ふのです。それだけの餌を、捕る度に砂を掘り、敵を防ぎながら運んで行く母親の苦勞は、なかなか尋常一様のことではありませ

ん。
蜂の中でも、セルセリスとか、スベクスとか云ふ類のものは、卵を生む前にちやんと澤山の餌を貯へておくのですが、たゞこのベ

ンベクスだけは、平常の餌とする蠅の身體が小さい爲に、一つ一つ

巣に歸つてくるところを見てゐました。するとベンベクスは、その腕の間に餌物の長吻蛇を抱えて、鋭いぶん／＼云ふ羽音を立て、歸つて來ました所、砂山の上まで來ると用心しい／＼降りて來ます。そして何か異常なことが目に觸れると、すぐに降りるのをやめて暫く舞つたり、上へ飛び上つたり降たりして、やがて電光のように素早く逃げて行つてしまふのです。暫くたつとまた歸つてくる。そして再び巢の上を飛廻つて、こんどは大丈夫と認めると、用心深く真直に砂地の上へ降りて來

ます。
ベンベクスが降りた場所は、ほかの砂地とはちつとも違つたとこ

ろがありません。假令は人間なら棒抗をたてるとか、眠るしの石がおいてあるとか云ふ風な、特別な點は何にもない。たゞ、なみの砂地の一點に、ずつと降りて來たのです。だから恐らく誰れでも、ベンベクスは、自分の巢のどこか近くの一處におりて來て、そこからだん／＼巢を掘りあて、行くのだと思ふでせう。

ところがベンベクスはそうではありません。降りるとすぐに、その砂地を掻き初める。砂を掻ては頭で押し進んで行つて、その餌物を抱えたまゝ、砂の中に潜つて行きます。やがてベンベクスの姿が砂の中に隠れてしまふ。上からは砂がくづれて來て戸が閉つてしま

ふ。たしかに、ベンベクスの降りた砂地は、人間の眼にも分らないければ、何の記もなかつたが、自分の家の玄關の真前だつたのです。それが證據には、少時たつと、ベ

ンベクスは、またその砂の下からそとに姿を現はしてどこかへ飛んで行きました。
これは不思議だ。一つ試験をして見てやれ。初に書いた、セルセリスの、遠い自分の巢に歸る不思議な本能を試した時のような興味

が、フアーブルの心にそのとき起つたのです。
そこでフアーブルは先づ最初に

はまた歸つて來ましたが、留守の間にそんな變化の起つたことは氣にもかけないやうに、石の上に降りてそこを掘らうとしましたが、それは、その石の上をどこでも出鱈目に掘らうとするのではなく、巢の入口に當る一點だけを掘らうと試たのでした。そしてその障害物の堅いと云ふ事がわかったとすると今度は石の四方八方を廻つて見て、やがて石の下にもぐりこんで、ちやんと自分の家の方に向つて砂を掘りはじめたのです。

そこでフアーブルは、これでは駄目だと考へたので、石の下に半分身體を埋めたベンベクスをつまみ出して、ハンケチで追いやつて、今度は近くから、馬糞を澤山探つ

て來て、一尺四方位、一寸程の厚さで敷いて見ました。ベンベクスには砂なら判るか知れないが、馬糞の敷物と云ふのは判るまいと考へたからでした。やがて蜂はまた歸つて來ましたが、どうでしょう、今度もまた、その馬糞の上に正確に巢の入口の前に降りて、筋つばい馬糞の中に穴をあけて砂の中へ入つて行つたのです。これは確に、蜂の眼や記憶だけがその巢に導く證據でない事を證明しました。それなら或は句かしら、フアーブルはそう考へたので、次には、その糞を掃き清めて、苦の敷物を敷いて、その上に持合せてゐたエーテルを撒いて見たのです。蜂が歸つて來た時には、そのエ

イテルの強い匂にむせたと見えて少時遠くで休んでゐましたが、少したつとすぐに歸つて来て、まだエーテルの匂のふん／＼する苦の上に降りて、また正確に自分の巢の入口の土を掘つて、中へ潜り込んで行くのでした。ベンベクスは巢に對する記憶は臭でもない事がわかりました。

それでは昆虫の持つてゐる特殊の器官である觸鬚かしら？ フアーブルはそうも考へて見たのです。少し殘酷ではあるけれど、ベンベクスをつかまへて、觸鬚を根本から切つて放して見ました。蜂はその痛みに苦んで、氣狂のようになつて飛んで行きましたが、やがて一時間ばかりもたつと、歸つて來

ました。蜂の留守の間にフアーブルは、また巢の上一面に小石を敷きつめておいたのですが、それにも不拘、正確に戸口の前に降りて、人間にしたらば、一軒の家にらゐる大きなある石の間を潜り込んで、とう／＼巢の中へ入つて行つてしまひました。

フアーブルは遂にどう云ふ手段でも、この蜂に自分の巢を迷はせることは出来なかつたのです。戸口の前の道や臭や材料をかへてもまたその大切な觸鬚まで切り取つてしまつても蜂はちやんと正確にその巢へ歸る。そういう特殊の能力、それはどこから來るのだらうか。昆虫の觀察には非常な經驗と才能を持つフアーブルも、その日

は遂に諦めて、ベンベクスに負け歸つて行きました。

それから數日たつてフアーブルはまたベンベクスの巢へ出かけて行きました。今度はまた別な方法を考へたのです。

母蜂が巢の中から砂を潜つてそとに出て、どこかへ餌を探しに出て行つたのを見届けると、フアーブルはすぐに自分の仕事にかゝりました。今度は、巢の前の砂を小刀で靜に削り取つて行きますと、すぐにその砂の戸の奥にある玄關が現はれました。そこから奥はざつと七時はかりの坑道が掘つてあつて、その突當りに幼虫が、喰へ荒した餌物のからの間に横はつゐるのです。

そこでフアーブルは、またその幼虫と、その食物とをつまみ出して、巢の中を空にしてしまつて、蜂の歸つてくるのを待つてゐました。

ベンベクスはすぐに歸つて來ました。けれども蜂は、いつもあれほど苦心して、砂を掘つて潜つて行く、自分の巢が眼の前に、太陽の光の下に掘り出されてゐるにもかゝはらずそんなものには眼もくれないで、そとの戸口の敷居の所の砂を掘るのです。さうして彼れこれ、一時間ばかりもの間も、自分の巢の周圍をあちこちと探し廻つては砂を掘ります。そこでフアーブルは、藁の先で、母蜂をもとの巢の坑道の中へ押し込んで見ま



した。然し、今は溝のようになつてゐる元の坑道が一寸注意を引くようにも見えますが、すぐに戸口の方へ歸つて来てしまふのです。それから時々、幼虫のゐた突當りのところまで行つて二三度ぞんざいにその砂を引掻て見るのですが、すぐにまた戸口の方へ歸つて来てしまふのです。こうして、自分の巢に對する搜索は、一時間以上も續いたのですが、まだ思ひ諦めずに同じことを續けてゐるので、フアーブルも遂に根負けして退却しました。

次にこの人が考へたのは、もしあの掘出された巢の中に、母蜂の愛してゐる幼虫がゐたらばどうだらう、と云ふ事でした。然し今試

験した蜂はもう氣狂のようになつてゐるから駄目だ。ほかの蜂でやつて見よう。

そこでフアーブルは、もう一つ新しく、試験をはじめて見たのです。今度も前のように、巢は掘り出されたのでしたが、その中にゐる幼虫や、たべ物はそのまま、そつくりしておきました。可哀そうなことに、今まで地下の柔い濕つた處で育つてゐた幼虫は、俄に激しい太陽の光の下にさらされたので、のたうち廻つて苦しんでゐるのでした。

そこへ母蜂は歸つて來ました。けれども、母蜂は、その可哀そうな幼虫の方へ行かうとはどうしてもしません。依然として、戸口の

そばの砂の上を、あちこちと、僅き廻してゐる丈なのです。この母蜂にとつては、いま眼の前で焼死そうになつてゐる幼虫は、砂の上の小石や土くれと同じことになつてしまつたのです。彼女はたゞ、いつも自分が入つた入口の戸、いつもの戸が欲しいのです。その戸を通つて行つてから、初めて自分の可愛い幼虫に餌物をやる事が出来るのですが、太陽の下にさらされた、こんな虫は、自分の子でも何でもない。慈悲深い忠實な母親は、たゞさうして戸口をあさり廻つてゐるのでした。

やがて、母蜂は坑道の奥にある獲物の殘物の臭に引かされたのか、もとの廊下の方へ入つて行き

ました。そうして二三度そこを行き來してゐる中に、遂に幼虫に出逢しました。

長い間心配したあとの、こうした親子の再會に、どんなにどちらも喜び合ふ事だらうと誰れしも思ふに違ひありません。けれどもベンベクスは、自分の幼虫をまるで知らなかつたのです。彼女は歩いてゐる中に邪魔になる幼虫を蹴飛ばす。幼虫は自分の身を防ぐ爲に遂に母蜂の足にかみついてしまひました。そこで烈しい闘が起つて幼虫の猝猛な口がやつとくはへた足を放すと、母蜂は氣狂のように羽をぶん／＼うならせてどこかへ飛んで行つてしまひました。昆虫の本能と云ふものは大變賢

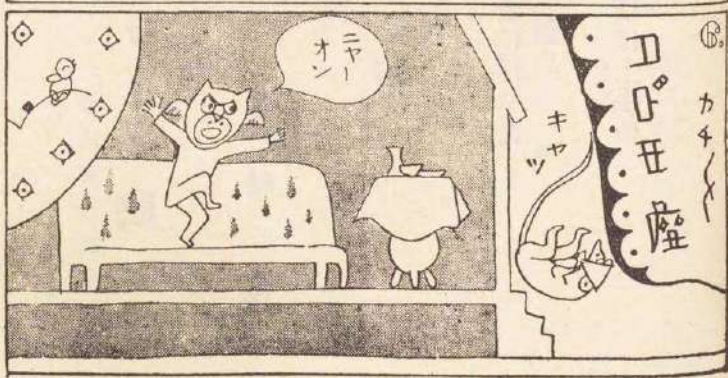
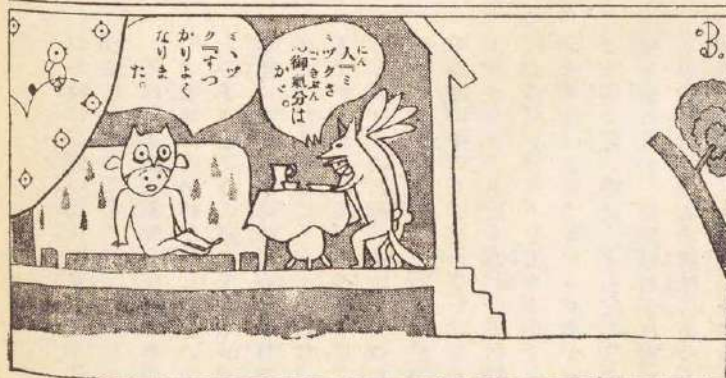
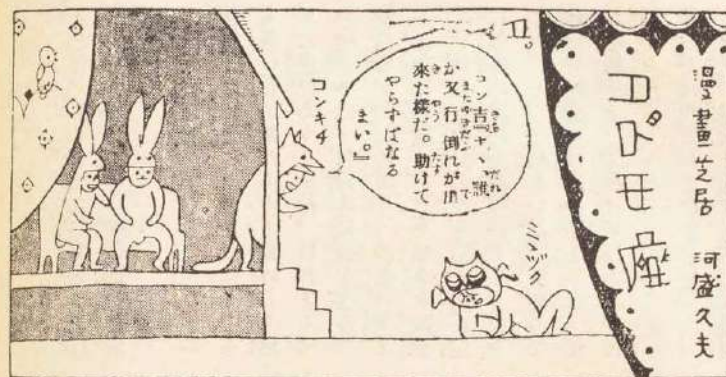
く出來てゐるようですが、たゞ一つの事だけしか出來ないのはこれでも判ります。この母蜂の探して最後のものも矢張り自分の大切な幼虫でした。けれどもそこへ行きつく爲には巢の中へ入らなければならぬし、巢へ入るには戸口を探さなければならぬのです。

この順序がこはれたら、もう、あとは一切駄目なのです。自分の作つた巢も大切な幼虫も眼の前にさらされてゐても決して判らなくなつてしまつてたゞ氣狂のようになり口をさがすよりほかには何にも出來ないのです。自分の戸口へ歸つて來る時には石も馬糞もエーテルも防げることも出來ないほど鋭い本能も、こう

いふ時には何の役にも立たなくなつてしまふのです。

それは本能と叡知の相違にあつて、叡知に導かれた母なら急いでその子のところに歸つて行くが、本能に導かれた母蜂はいつも戸口のあつたところにとどまるのだ、とフアーブルは云つてゐます。

ベンベクスと云ふ蜂は、いつも蠅ばかり取つて喰べてゐますが、その蠅の中でもごく小さい、ミルトグランマ、と云ふ蠅が、どの位にこのベンベクスを苦めるか、ベンベクスはまた、ミルトグランマより遙に強い癖に、どんなにこの蠅を恐れるか、自然のわざは實に不思議に出來てゐて興味のあるお話は、この次にまた致しませう。





ホロホロ鳥どり

達崎 龍

五六

ホロホロ鳥どりを

さがしに行つた

たんぼぼ土手どての

綿坊主わたぼうず 白いナ

陽炎かげろふの蔭かげは

ホロホロ鳥どりは

青麥畑あおむぎばたけは

果はてまで 青あをいナ

寺内萬治郎畫

五七





（傳説巡禮）

草とり二王

織田小星

岡本歸一畫

これから諸國の傳説をめぐつて、ほつ／＼お話を参りたいと思ひますが、中にはもう御承知のものも有ると考へます。けれども人の見方によつて事物は又新しい姿を取りましますもので古いお囃し或は昔様に新しい興味を引かないとも限らない

と考へ、こゝに「傳説巡禮」を思ひ立ちました。話の大骨は取り換へない心算ですが、そのまはりを飾る色彩や衣は、筆者の想像の向くにまかせて頂きます。尙この機会に、各地方の傳説の中でまだ一般に知られてゐない

様なものが有りましたら、「金の星社」氣付け筆者宛にお知らせ願はれましたら幸甚の至りと存じます。

一

昔、上總國埴生郡に、藏持と言ふ、草ぶきの農家が道の兩側に立ち並んだ小さな村がありました。その又昔はこの地方も榮えて、立派なお寺なども有りましたが、今はそのおもかげもなく、西の山々に沈む夕陽を田の面にうつし、物さびしい夕靄の中に暮れては又東から靜に明けて、人は單調な農家の仕事をくり返へしてゆきます。

このさびしい村で、いつも人の話にのぼるものが一つありました。それは村はづれの路ばたに、いつの頃からか、おいてきばりにされた様にぼつねんと草むらの中に只一つ佇んでゐる二王門であります。以前はまはりに寺なども有つたのでせうが、今では何處の寺の持ちものでもなく、人も手入れをしない

ので朱塗の色も薄くあせ、家根の瓦も處々落ちて、夕闇などにその前を通ると、樓門をすかして向ふの稲田が四角に、まるで怪物の口の様に光り、心の弱い者などは、一人で前を過ぎかねる程うす氣味の悪いものでありました。その上この樓門の右と左には誰れの作かは知りませんが、恐ろしい顔をした二王が立つてゐて、其一つは昔ながらの眼珠の、まるで生てゐる様な大目玉をぎよりとさせ、焰でも吹きそうな口を耳まで開けて、かつとにらんでゐます。今一つの方は之れも恐ろしく大きな目玉を漆と箔に塗りつぶされ、心持ちどんよりした光をたゝえて薄暗い二王格子の中から外をにらんで立つてゐます。けれど村の長老たちもこの二王が何時の頃から其處に立つてゐるのかは知りませんでした。

二

そのうち、村に不思議な噂がたちました。

○倉さん、お前聞いたかい。隣り村の作兵衛さんがこの間……そうだ真夜中頃とか言つてゐたつけ……あの二王門の横を通らうとしたらね、門の中から門を横にギリ／＼と引く様な音がするのでな、はて今頃誰れがあるのだらうと、そつと忍び寄つて中をのぞくと誰れもないのだよ。どうもおかしいと思つてゐると、こんどは頭の上で又ギリ／＼とえらい音がするので、ふいと見上げるとね、二王様が目をつぶつて口を横に動かしながら齒ざしりをしてゐたんだ。作兵衛さんはそれを見ると思はずワツと聲をあげたまゝ、一目散に家に飛んで行つたが、一體どの道さうだ。さうして作兵衛さんは、それから熱が出てな、今では物もよく言へないと言ふことだよ。」

「フーン、そりや初耳だ。けれどな、實は俺もこの間不思議な事につつかつた。それはお月さんが斜にあの二王門にかゝつてゐた夜だつたが、馬鹿に淋

六〇
しい晩だと思ひながら、あそこにさしかゝるとね、洞間聲で人の聲話をするじやないか。それで俺は誰れか村の者がゐるんだと思つて「今晚は」つて中に入つたんだ。すると話聲がびたりと止んだが、其處には誰れ一人、人がゐないぢやないか。あんな吹き通しみたいな處だらう。それに月は出てゐるんだし誰れか居りや、どつちにぬけたつて見つかると譯なんだが、いくら廻りを探したつて犬一匹のやしないのさ。俺は不思議だと思つたが、こりや自分の氣のせいだと思つて、そのまゝ、今日まで黙つてゐたんだが、お前の話を聞くと、何だかあの二王がおかしいせ。」

○「ホー、そんな事が有つたのかい、それやいよいよおかしいぞ。一體あの二王門が何のゆかりもなくあそこに建てゐるのが不思議な事さ。それにしても何か不吉の前兆ぢやあるまいね。」

「フーム、まさかそんな馬鹿氣な事も有るまいが、村の衆に話をして何とかしなけりやなるまい。あの

く者で村中一ぱいになつてしまひした。

門を手入れもせず立ち腐れにしてふ事も餘りよい事じやないからな。」

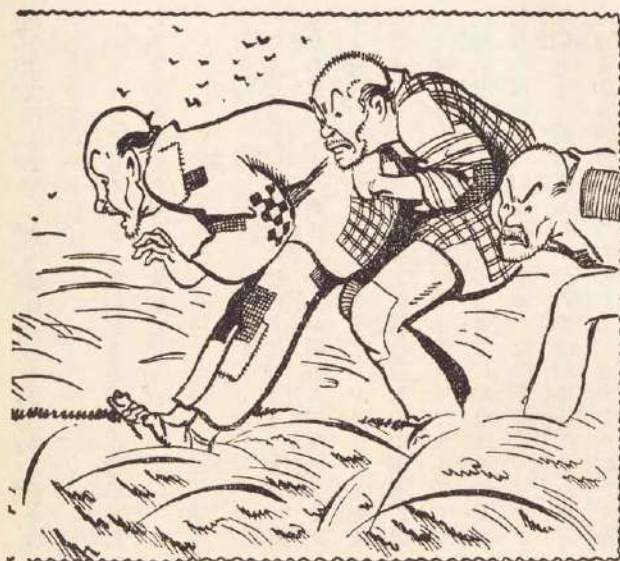
○「フーン、なるほど、理屈がある。そんな事で村に祟りでも有つた日には大變だ。」

三

こんな話が村から村に傳はつてゆきましたが、其翌年の夏のこと、藏持村の人が四五人、突然ゲーゲーと食べた物を吐いたと思ふと、コロ／＼と死で了ひました。人々は其死方が餘り急なので不審に思つてゐる中に、さあ大變、あちらでもこちらでも同じ様に物を吐いては死でゆきます。つまり今で言つたならばコレラの流行でもあつたのでせう。けれど學問もまだ行き渡らなかつた當時の事とて人々は、之はものの祟りに會つたのだと、うろたへ騒いでゐるうちに、とう／＼年寄りも若いものも、男も女も一人残らずその流行病にかゝつて、死ぬものや、うめ

六二
世の中は文明が進めば進むほど衛生の設備がゆきとゞく様になつて行かねばなりません。年々チブスやコレラなど流行病の爲に澤山の人が命を失ふ事はその國なり、其土地の文化の程度が低い事を示してゐる譯です。例は支那あたりに比べれば日本は今日では衛生の設備もゆき届いて居りますが、ヨーロッパやアメリカのそれに較べるとまるでお話にならない程劣つてゐます。それが爲年々流行病で死ぬ日本人の数が歐米の文明諸國に比して多いと言ふ事は國民の不幸でもあり又耻でもあります。一體國民の衛生と言ふ事はその設備をしてくれるのを待つてゐる様ではいけないので皆一人々々がよく注意をして行つてこそ其設備も早く備はる譯ですから、日常私共は其點に心がけて一生懸命にお互の健康を保持する様に努力しなければならぬと思ひまゐ。

話が横にそれましたが、當時蔵持村には今の様な良いお医者もなく、豫防注射などと言ふ事もとよ



り有りませんので、人々は目に見えぬ病魔に對し、手をつかねて死ぬのを待つてゐる様な次第でありました。其上村中残らず病氣にかゝつてしまつた爲誰れ一人田畑に出て耕作する事も出来ず、假令病氣はなほつても其年の作物はまるで無くなつて結局は飢死しなければならぬ様な悲しいはめになつてしまつたのです。

その時もし村の端から端までを、一軒毎にのぞいて見たならば、どんなに恐ろしい光景で有つたでありませう。

ぼく／＼した白いほこりの村道を照り返へす夏の太陽、汗ばむ體に色蒼ざめた顔の人々が頰もこけ、目もくぼんでどんよりと、近づいて来る死を待つてゐる絶望の面持ち、其傍には親が倒れ妻が死に、子供が最後の息を引きとつても自分はどうする事も出来ず、呻きながらそれを見つめてゐるだけです。それに死んだ人の埋葬は出来ず、夏の日の腐敗しやす

きまゝに、耐えられぬ死骸の臭氣が村中を閉ざして此の世そのまゝの地獄としか思へなかつたに違ひありません。

四



こんな恐ろしい状態が三四ヶ月續きましたが、秋風が野面を渡つて来る頃からだん／＼其流行病も下火になり、四方の景色が黄ばんだ時には、生き残つた者は全快してはつと安心の一息をしましたが、さて心が／＼は田畑の農作物で、大切な手入れ時を放つて置いたのですから今收穫時に追つて來ても實入りの有る筈はどうしても有りません。病後瘦せ衰へた二三の村人は體を竹杖にすが

り、よろ／＼と自分の田畑に出かけてゆきました。すると不思議な事柄が村人の目に映りました。それは今までまるで手をつけなかつた等の田畑がきれいに耕されてゐて雜草一本すらなく、刈入時に當つてゐる穀物などは黄色くふさ／＼と實り、常にないだ豊作なのです。村人の驚と悦とは大變です。

○これは一體どうしたつて言ふ事なんだ。誰れが俺の畑をこんなにまあ親切に手入れしてくれたんだらう。」

△「村中や一人残らず疫病にかゝつたんだから、隣り村の人がやつてくれたのかも知れないぜ。」

×「うんにや、隣り村もこんどはやつぱり疫病に祟られたので耕作は出来なかつたと言ふぢやないか。」

○「おい／＼、これやきつと神様のお助けに違ひないぞ。ほんとにもつたない話ぢやないか。……」

や、金さん、ごらんよあそこを！」

△「エ？何處さ？」

○「あそこだよ、あの畑の畝の處だよ。」

△「畝かね、ウム、足跡があるね。」

○「その足跡をよくごらん、恐ろしく大きいぢやないか。」

×「ほう、言はれて見ると、なるほど大きな足跡だ、……おや、その足跡が方々についてゐるぜ。」

×「これや變だぞ、人間の足跡じやない。山男が何かの大きな奴の足跡だ。」

○「けれどな、その跡のつき方を見ると其大男が俺達の田畑を皆耕してくれたらしい。」



×「ウム、なるほど、さうだお前の言ふ通り、その山男が何か親切に俺達の田の草まで取ってくれたら

しい。これや村中の者に早く知らせてやらにやらない。」

と、其人々は杖にすがりながらも急いで村に戻つて行きましたが、恰度二王門の前にさしかゝつた時、其中の一人が、

○「おい、一寸待つた、ごらんよあの二王様をさ。」

×「おや、手がまるで泥だらけだ……それに膝から下も……」

○「おい、すっかりよめた。俺達がねてゐる中に田畑の手入れをして下さつたのはこの二王様だ。それで先刻の足跡もこの二王様の足跡に違ひない。見ろ見ろ片方の二王様の手足も、やつぱり泥だらけだ。」

△「ワッ、これは有り難い、もつたいない、日頃怪體な二王様だなんて、うつちやつて置いた事は申譯がない。これや早く村に歸つて事の始終を皆に話さにやならない。」

と轉ぶ様にして馳せ戻り、一軒々々を訪ねて其話

をしましたので、村中の人はもつたいない事だと、花やらお線香などを手に手に持つて、荒れはてた二王門に集つて來ましたが、その廻りは人の難踏で時ならぬお祭りの様な騒がはまりました。

それから後村の人はこの二王様を「草とり二王」と稱び讀んで、參詣の人が引きもきらず、近所近在まで其名が聞えて、中には態々遠くからお詣りに來る者すら有る様になつたと言ふことです。

この二王様は今長生郡廳南町の清淨院に隸してゐることですが、その眼にはめられた眼珠は其後盜難にかゝつて、今では二つとも新しい玉眼になつてゐると聞きました。

いくら悪い奴でも物を盗むにもほどがあると思ひます。

(を は り)



幼年詩

若山牧水選

海(推薦)

熊本流尾 海達 公子

海が光る

半分から

こつちが光る

水のかげ(推薦)

同 人

浅い川を

水のかげが

流れていく

露(賞)

芝居本芝 北村 政夫

かれた枝に露が

いくつもく

たまつてゐる

枝をゆすぶつたら

皆落ちてしまつた

評、明瞭な、そして美しい寫生です。君のはほかのもの皆よ

かつた。(秋水)

へいたいおくり

(賞)

千葉縣平 御園 成次

兄さんが

へいたいにてるよ

僕は

はたふつて

みおくれたよ

評、だいぶ得意だナ、御園君。

きはつ油(賞)

千葉縣平 根本 悦子

きはつのにほひが

一寸した

きものとりかへた姉さん

評、いかにも少女らしい歌です。(秋水)

まつかさ

兵庫縣別 横山しげる

道ばたに一つの

まつかさころんでた

人にふまれて

ころんでた

評、一寸した寫生の中に優しい心持が出てゐる。(秋水)

口笛

千葉縣平 高吉 長三

學校のかへり

だまつてかへると

キツト口笛をふく

私が吹くと

友もキツト吹き出す

かへりの口笛

評、「歸りの口笛」とはよく云つたナ。(秋水)

カラス

東京縣 長尾セイニ

トウグウゴシヨノ

木ノムカフヘ

五六バノカラスガ

ナカヨク

クワア クワアト

ナイタイク

評、カワイイライ、ウツクシイケシキダスネ。(秋水)

白

吉村 貞子

お餅ついた後の

白は淋しさう

枯葉が二枚

入つてた

すずめ

群馬縣大 小林 四郎

すずめが

ないた

二三びき

なきく

とんだ

二三びき

ゆきのおこ

東京市京 橋竹川町 平岡 葉子

さらりんさらりん

ゆきのおと

やねからさらりん

ゆきのおと

ふれよこんこん

つもれよこんこん

雪道

山形縣横 澤校尋二 峰田アサ子

だれもあるかない

雪道を

犬一人

はしつてゐる

學校にいく時も

犬のあとばかり

金魚

滋賀縣膳 山本みゆき

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

金魚

くるりと廻つて

大きく見えた

評、関子もなか／＼面白い。(秋水)

霜

千葉縣眞里 宮崎 とり

眞白な眞白な

今朝の霜

お家の屋根も

眞白だ

たき火のあと

眞白だ

(秀逸)

雪いちり

お湯屋

母さん

山下 文雄

山本 榮

太田 貞夫

六七



ジャンバルジャンは、もと、しよのない悪人でしたが、ふとした事から善心にかへつて、今ではメールの町の市長にまでなつて、人々から敬ばれて慕はれて暮らしてゐました。人々は彼の事を、マドレーヌ市長と呼んでゐました。

その頃、この町に、フアンテヌと云ふ、哀れな女がゐました。彼女には、コゼットと云ふ一人娘がゐりましたが、これは遠い田舎の、テナルディヌと云ふ人の所に預けられてゐました。テナルディヌは無縁な男

だつたので、コゼットを奴隷のやうに酷き使ひました。そして、母親の方へは、コゼットを養ふ金が足りないから送るやうにと云つてやりました。母親は自分の娘の爲めに、一生懸命になつて働きました。しまひには、自分の髪を切つたり齒を賣つたりして、そのお金をテナルディヌへ送りました。併しテナルディヌは、もつと／＼お金が欲しかつたのです。

一、病氣

その頃フアンテヌは、なんとなく身體の工合が罷れませんでした。掌が燃えるやうに熱くて、ひっきりなしに軽い咳をしてゐました。夜はまた、いやな夢ばかり見て、ぐっしり寝汗をかきました。

フアンテヌは到々、病氣になつてしまつたのでした。

誰れも看護をする者がなかつたので、彼女は町の施療院に入れられました。この施療院は、マドレーヌ氏の建てたものでした。

フアンテヌは此處で、修道士達の手厚

い看護を受けましたが、容體はだん／＼悪くなつて行つて、しまひには熱が高いので、コゼットのうはごを云ふやうになりました。

マドレーヌ市長は、毎日のやうに、彼女を病院に見舞に來ました。

『安心するがよい。私がきつと、そのコゼットを呼び寄せて遇はせてあげるから。氣をしっかりと持つておいで。』マドレーヌ氏はかう云つて、彼女を慰めるのでした。

彼女は、言は云ひませんでしたが、その潤みのある眼に深い感謝の色をこめて、ぢい々とマドレーヌ氏の顔を見つめるのでした。

マドレーヌ氏は、百法の金をテナルディヌの所に送つて、直ぐコゼットを連れてくるやうにと云つてやりました。その手紙を見たテナルディヌは、

『ふふん。』と鼻先で笑つて、かう獨り言を云ひました。

『しめ、しめ、こいつはい、金邊にありついたぞ。誰れが手離すものか。』

マドレーヌ氏は、何時まで経つてもコゼットが來ないので、改めて二百法の金を送つて、テナルディヌを催促しました。テナル

ディヌはその手紙を見て、又ニヤリと笑ひながら獨り言を云ひました。

『しめ、しめ、こいつはい、金邊にありついたぞ。誰れが手離すものか。』

たうとうしまひにマドレーヌ氏は、もうこの上は自分自身で出かけて行つて、コゼットを連れて來ればならぬと思へました。

マドレーヌ氏は、その翌日の朝早く、出發するつもりでした。

ところが其晩に、急に大切な用事が出來て、アラスと云ふ町へ出張せねばならない事になりました。

病氣のフアンテヌを放つて置いて出かけるのは、まことに氣がいらでしたが、公務とあつては仕方がありません。マドレーヌ氏は、後に心を殘しながらも、アラスへ出發したのでした。

後に残つたフアンテヌは、マドレーヌ氏は、自分の娘を連れに行つて呉れたものとばかり思つてゐました。

『私のコゼット。私の可愛いコゼットに、もう直ぐ進へるのだ。コゼットはどんなに大きく、どんなに可愛らしくなつた事でせう。』

フアンテヌは、それをなだ／＼一つの望みとして、か弱い命をつないでゐました。實際、フアンテヌの病は重くて、明日とも知れない有様でした。

夜の十時頃、マドレーヌ氏は歸つて來ました。用事が多くて、今日は遂にコゼットを、連れて行く事が出來なかつたのでした。

醫者はマドレーヌ氏に注意して、

『病人は弱つてゐますから、コゼットを連れて來なかつた事は、黙つていらした方がいゝでせう。でないと失望して、病氣が重くなりますから……』と、云ひました。

マドレーヌ氏が病室に這入つて行くと、病人は、その力のない眼に希望の色を輝やかにして叫びました。

『まあ親切な市長様。コゼットを連れて來て下さいまして。ありがたうございます。』

さう直ぐ此處へ呼んで下さい。』

其時、醫者が進み出て云ひました。

『コゼットは隣の室にゐます。併し、今、こゝへ連れてくる事は出來ません。貴方には熱があります。その熱が下り、病氣が癒つてからでなくては駄目です。』

それを聞いたフアンテューヌは、眼の色が變へて叫びました。
「私が病氣だから駄目ですつて？ まア！私にはもう病氣がありません。この通り、

ちやんと癒つてゐます。え、癒つてゐますとも。この醫者は、なんてわからずやでせう。私が病氣だなんて嘘つき！ 私はコゼットに會ひたいのです！ コゼットは私の子



供です！ さア會はせて下さい！」
「それ、その通り興奮するぢやありませんか。そんなに興奮する内は、私は會はせて上げる事は出来ません。貴女は、子供に會ふだけではなく、子供の爲めに生きなければなりません。れ、分りましたか？」
フアンテューヌは眼を擧げて、ちいッとした醫者の顔を見つめてゐましたが、やがてハラ／＼と涙を流しました。

「私が悪うございました。お醫者様。なんと云ふ口なき、ましたらう。どうかお許し下さいませ。氣が許たつてゐたのです。もう決してあんな事は申しません。おとなしく、ちやんとして居りますから、れ、どうか子供に會はせて下さいませ。たつた一目で宜しうございませう。コゼットは丈夫ですか？ どんなに大きくなりましたらう？ さつぱりした身なりをして居りますか？ あ、ほんの一すぢいのです。れ、ほんの一すぢ、こへ連れていらして下さい……」
彼女が涙を流しながら、さう云つてゐる時、突然、ドアの所を、コウ／＼と烈しく叩

セ〇



ジャブエルの恐ろしい眼には、なみならゐ色が浮んでゐました。そして、ツカ／＼とマドレーヌ氏の傍へ近寄つて來ました。
「ジャンバルデヤン！ 彼は叫びました。
「ジャンバルデヤン。いよく／＼時が來た。もういくら睡したつて駄目だ。さア眼目につけマドレーヌ氏の顔は、さツと土色に變りました。

「埋め。よくも今まで我々を騙して來たな。市長様が聞いて呆れる。貴様がミリエル僧正の家で強盜を働いて來た事は、すつかり證據が上つてゐるのだ。壁の燭臺と、六枚の血は、貴様の家の天井から發見されたのだ。さア、おとなしく俺と一緒に來るか、さもなければ手錠だぞ。」

ジャブエルは嚙みつくやうにかう云つて、詰めよりました。
「醫者も、フアンテューヌも、驚きの餘り言葉さへ出ずに、ぼかんとしてこの場の有様を眺めてゐました。
「なんと云ふ事でせう！ この聖者のやうな市長が強盜であらうとは。
マドレーヌ氏は、やがて決心したやうに、

二、ジャブエル刑事

「お這入り。」と、醫者が云ひました。すると、ガタリと扉を開けて這入つて來たのは、例のジャブエル刑事でした。

聲を低くして、囁くやうに云ひました。
「ジャプエル君。僕は君に、一つのお願ひがあるのです。聞いて呉れますか？」
「もつと大きな聲で云へ、大きな聲で……」
「僕は、低い聲で言ふのは大嫌ひだ！」
「ジャプエル君……」
「もつと大きな聲で云へッたら……」
「ジャプエル君。どうか、もう一日待つて呉れませんか。この女の娘を連れに行かれます。その娘を連れて来なければ、この女は死んでしまふのです。い、もう一日待つて下さい。」
「ふん。うまい事を云つてゐる。そんな事で俺が騙されるとでも思つてゐるのか。案外貴様も馬鹿な男だな。その女の娘を連れに行くつて？ なるほど、そうして逃げだすつもりだらう？」
「君、もう少し小さな聲で云つて呉れたまへ。」
併し、もう駄目でした。フアンテメは、その言葉を聞いてしまつたのです。
彼女は、ガバと寝臺の上へ跳れ起きました。
「えッ、娘を連れに行く？ では娘は此

處へは来てゐないのですか！ あ、神様。なんと云ふ事です。私はもうロゼットには逢へないのですか！ コゼット！ 私のコゼット！」
彼女は突然、寝臺から飛び下りやうとしました。
併し其時、彼女の喉が、ゴローと異様な音を出したかと思ふと、息がつまつて、彼女の身体は仰向けに寝臺の上に倒れました。
頭はひどい音をたて、枕木にぶつかり、つづいて、がっくりと前へ垂れました。口を、ぼかんと開いて、眼は吊し上がったまゝ、光りが消えてゐました。彼女は死んだのです。
ジャンバルヂヤンは、やがて、靜かにジャプエルの方へ向いて云ひました。
「ジャプエル君。君はこの女を殺した！」
「よし、それでもよい。だが、貴様も許されなぞ。」
ジャプエルはかう云つて、ジャンバルヂヤンの肩へ手をかけやうとしました。
ジャンバルヂヤンは、まるで赤子の手をばづやうにその手を振り拂つて、窓の所へ近寄りました。そして、窓枠の所に附いて

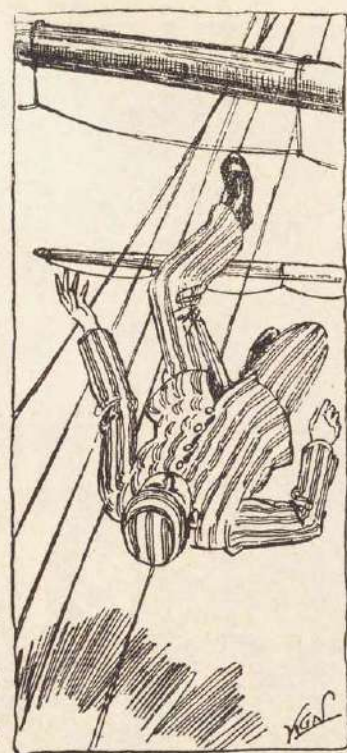
七二
ゐた二尺ばかりの鐵棒を、またたく間にもぎ取つてしまひました。
ジャンバルヂヤンはその鐵棒を握りしめて、デリーとジャプエルに近寄りました。ジャプエルは思はず後退りをしました。
「あと五分間だけ、ちいッとしてゐる。其處を動くな。ジャンバルヂヤンは命令するやうにかう云つて、靜かにフアンテメの傍へ歩み寄りました。
そして、彼女の頭を枕の上に載せてやり、開いてゐる眼を閉し、髪をなでつけたりしました。彼女の右の手は、寝臺の外へ垂れてゐました。ジャンバルヂヤンは膝まづいて、その手に唇をつけ、靜かに祈禱をさげました。
やがてジャンバルヂヤンは立上り、ジャプエルの方を振り返つて云ひました。
「お待ちさま。さア、どうともして貰ひませう。」
ジャプエルは近寄り、ジャンバルヂヤンに手錠をかけました。

三、荒海へ

ジャンバルヂヤンは再び、牢獄の冷たい鎖の下につながら、身となりました。朝は早くから起されて、苦しい勞役に従はればなりま

た網にぶら下がつて、一命だけはとりとめましたが、疲れ切つてゐたため、その網をよち昇つて、元へ歸ることが出来ません。床の真直ぐ下は、ゴツ／＼と岩の突き出た荒海です。落ちたらそれ切りです。人々は、

體を自分の身にくりつけ、又靜かに網の上りだしました。
人々は喜びの聲を擧げました。
「あの囚人を赦してやれ！」 人々は口々に叫びました。
ところがジャンバルヂヤンは、水兵を安全な所に移して、續いて自分も橋を下りやうとした時、足を踏み外して、「あッ」と云ふ間もなく、直逆様に海へ落ちてしまひました。
ジャンバルヂヤンの姿は、一度波の上に浮び上りましたが、續いて来た大波にまき込まれて、見る／＼影を見失つてしまひました。
人々は直ぐにボートを出しましたが、遂にその行方は知れず、ジャンバルヂヤンは死んだと云ふ事になりました。



船と云ふ軍隊で、石炭運びの仕事をしてゐました。その日は風の強い日で、波は荒く、船はひどく揺れてゐました。
其時、一人の水兵が、橋の上つて、眞逆様にゐましたが、ふと足を滑らして、眞逆様に海へ落ちやうとしました。幸ひに途中にあつ

た、騒きたるばかりで、誰れも進んで助けに行く者がありませんでした。
その時、人々の中から進み出て、橋を昇りだした者がありました。それはジャンバルヂヤンでした。ジャンバルヂヤンは、網にぶら下がつてゐる水兵の所まで行つて、水兵の身

四、木星の光り
お話かはつて、少女のコゼットはどうしたでせう。
コゼットは、テナルディユの宿屋で、毎日苦しい仕事をさせられてゐました。薄暗い内に起されて、水を汲んだり、掃除をしたり洗濯をしたり、一寸の休間もないのでし

た。テナルディユのお上さんは、コゼットのやりやうが悪いと云つて、度々、鞭を振り上げました。

それはクリスマス前の晩の事でした。コゼットは裏所で、空箱の上に腰かけて、靴下を編んで居りました。その靴下は、テナルディユの子供の穿くものでした。

其時、ガタリと扉が開いて、お上さんが這入つて来ました。

『コゼット。お前、水を汲んだかい？』

お上さんは眉の間に八の字を寄せて、嘴みつくやうに咆吼しました。お上さんは豚のやうに肥つてゐて、はだけた胸からは赤い胸毛が見えてゐました。

『はい……、いいえ……』

コゼットは立上つて、オド／＼しながら云ひました。

『ナニ、まだだつて？ このろくでなしめ！ 直ぐ汲んでおいで。』

コゼットは水槽を取り上げました。その槽は、コゼットの身体と同じくろゝの大きさでした。コゼットが出て行かうとすると、お上さんは呼びとめて、

『ちよつと、かといふさん。歸りにパンを一斤買つておいで。それ、拾錢だよ』と云つて拾錢銀貨を渡しました。コゼットは、それをポケットに入れて、外へ出ました。

外には寒い風が吹荒んでゐました。テナルディユの宿屋からは、シエルと云ふ淋しい森の中の泉まで、水なくみに行かなければならなかつたのです。

町を出れば、暗い荒野が、遠くシエルの森が、こもりと黒く見えました。コゼットは、恐ろしいので夢中になつて、どん／＼道を走つて行きました。

やがて、森の泉へ着きました。

コゼットは腹が空になつて、槽の水の中へ入れやうとしました。其時、ポケットから先刻の拾錢銀貨がこぼれ出して、水の中に落ちました。コゼットは、それを少しも知りませんでした。

コゼットは、水一杯はひつた槽を傍に置いて、そつと周囲を見廻しました。

遠い地平線の彼方には、名を知らぬ一つの大きな星が、今にも落ちさうに輝やいてゐま

した。コゼットは寒風に吹かれながら、ちい／＼とその大きな星を見つめてゐると、なんといふ事なしに泣きだした。いや／＼気分になつてくるのでした。

やがてコゼットは、槽を取り上げて歩るきだしました。併し、槽があんまり重過ぎたので、十歩ばかり行くと、もう歩るけなくなつてしまひました。コゼットは、ハア／＼息を切らしながら休んでゐました。

暫くして、又歩るきだしました。ところが五六歩行くと、急に石に躓つて、もう少しで水をこぼさうとしました。

コゼットは溜息をついて、思はず獨りごとを云ひました。

『神様、……どうかして下さい……』

丁度其時、一つの黒い影がコゼットに近づいて、黙つてうしろから水の槽を持ち上げました。

その黒い影と云ふのは、一人の背の高い、頑丈さうな男の姿でした。コゼットは急に槽が軽くなつたので、びつくりしてその男を見上げました。

男は低い聲でかう云ひました。



『お前さん、こんな重い物を持つて何處へ行くつもり？』

不思議にもコゼットは、其時、少しも恐怖と云ふものを感ぜませんでした。

『家へ歸るの。小母さんが待つてゐるのよ』

と、コゼットは答へました。

『え、家へ歸る？ それは大へんだ。どれ、お前さんに借してごらん。お前さんが持つて行つてあげやう。随分重いだらう？』

男は槽を受取つて、

『うん、こりや重い！ こんな物を持つて歩るけやしない。……お前さんの家は、何んと云ふ名前？』

『うちは、テナルディユツて云ふのよ。』

『えッ、テナルディユ？』

男は驚いて、

『そして、お前の名前は何？』

『コゼット……コゼットと云ふの。』

男は立止つて、槽を下ろしました。そして俯むきになつて、コゼットの顔を覗き込みました。帯せた青白い頬が、闇の中に浮んでゐました。



要さん辨さん

七六

上京の巻

沖野岩三郎

寺内萬治郎 畫

「要さん、いつまでも、こんな山奥にゐたつて、つまらないネ。どつかへ行かうぢやないか。」

「僕の兄が東京で巡査になつたといふ手紙が来たよ。東京に行つて、兄きに頼んだら、どこかの學校へ入學させてくれるかも知れないぞ。」

「そんな世話してくれるだらうか。」

「行けば何とかしてくれるよ。」

「では、要さん、僕をつれて行つてくれますか。」

要さん辨さんの生れた村は、紀州の山奥の、それは、淋しいさみしい村です。村の入口に草葺の家が一軒見えてから、村の最後の、一軒まで行く里程が、凡そ三里あまりありますが、その間に人の住む家が、たつた百五十戸しかありません。

村から村へ通ふ路が峻嶒なので、荷物はみんな人の肩で運びます。川の瀬が急で、何十といふ瀬があるので、僅に筏が流れるだけで、お舟は通ひません。だから村の人達で、生きた馬を見た人は三十八人しかありません。高い山を一つ越した向ふに、渡し舟が一つあります。愛宕祭りに見に行く子供たちが、年に一度、どんなに珍らしさに、其の渡し舟を見ることがでせう。

こんな所で十七年間育つた要さん辨さんですから、この二人が上京するといふことは、都會の人が歐米へ旅行するよりも、もつと大へんな旅行だつたのです。

「十四日は愛宕神社のお祭りだから、其日の朝はやく、家を出よう。」

「辻堂の地藏さんの前で待合せることにしよう。」

「それまでに僕は郵便貯金を引出して、旅費の用意をして置くから。」

「では、十四日の朝辻堂であひませう。」

要さん辨さんは、こんな約束をして別れました。それは今から二十五年前のお話です。

十四日の朝は、はやくから村の人たちが、愛宕祭りへまわります。要さんは前日の、郵便局から貯金を拂ひ戻して來たので、長い財布の紐を首からかけて、大事の大事の旅費を天笠木綿の帯の間に、くるくると捲き込んで、愛宕詣りの群に交つて辻堂まで來てみますと、もう辨さんは石の手水鉢に腰をかけて、要さんの來るのを今か今かと待つてゐました。

「やあ、お早う。」と要さんは申しました。

「お早う、本當に行くかい？」と辨さんは念をおしてききました。

「行かないで、どうする。安心したまへ。これ、この通り。」

要さんはふくらんだ財布を、帯の上からたいてみせました。

二人は意味のある笑ひを見せ合つて、街道へ出ました。村の人達が三人五人づゝ一組になつて、川に沿うて街道を下つて行きます。高い聲で面白可笑し

い話をするもの、歌を歌ふもの、いろ／＼さまざまです。

要さん辨さんは、友達にも両親にも秘密で東京へ逃げて行くのです。もし上京するなんて云はうものなら、一家親類から大反對を受けるにきまつてゐます。だから、二人は、みんなに悟られないために、出来るだけ愛宕詣りをするやうに見せかけて、みんなと一緒に、歌つたり笑つたり



たりしながら行きました。山を越えると日高川が見えます。そこには一艘の渡し舟がないであります。要さん辨さんは、もうこの舟を五六回みたことがあるので、小學校で舟のことを何度も綴り方に書いたものです。

そこから二里ばかり川下の方に、愛宕神社の森があります。要さん辨さんは、みんなと一緒に宮の鳥居の所まで行つて、直ぐそこから和歌山街道へ出ました。

『今日はお祭りだから、うちの人たちも氣づかないが、明日の朝になると、きつと吾々を伴戻しの追手が来るぞ。』

だから、出来るだけ急いで歩かう。』二人は一生懸命に走りました。そして白馬山といふ大きな峯を越えて、紀州密柑で名高い有田の里へ出ましたのは、もう午後の三時頃でした。

云ひました。辨さんは、何の異議もありませんでした。

二人は一緒にお湯にはひりました。御飯を食べました。そして直ぐ寢床をのべてもらつて、やすみしました。それは翌る朝出来るだけ早く起きて道を急がなければならぬからです。

生れて始めての旅です。しかも、お家の人達に内證で抜け出て来た二人は、度々眼が覺めました。追手につかまつた夢もみました。

翌る朝早く宿を立つた二人は、生石ヶ峯といふ高山を越えにかゝりました。

『昨晚は、うちで大騒ぎをしたかも知れないぞ。』

『うん、僕が郵便局から貯金を引出したといふので吾々の高飛びした事がわかつて、昨晚夜通しに、あの源治が吾々を追つけて来たかも知れないよ。』

『ねえ、あの長崎彦に追つかけては、たまらないぞ。』



有田川を渡つて、小い町へ入つた頃、町並の軒燈がほの白く輝いてゐました。

『こゝまで来れば大丈夫だ。こゝへ宿らうぢやないか。』

要さんは『旅人御宿』と書いた軒燈を眺めながら

二人は勢一杯走りました。そして時々後をふりむいては、

「あれは源治ちやあなからうか。」「あの後鉢巻で走つて来るのは長髓彦らしいぞ。」と云つては一所懸命に走りました。

下り坂になつた時、二人ははつと安心しました。

けれども、やつぱり油断せず走つて、たうとう人力車のある町まで来ました。

「和歌山までやつて下さい。和歌山から大阪行の汽車に乗る所まで。」

要さんは俤の振場の前で、あわただしく言ひました。

「おい、和歌山市驛へ二挺！」

俤夫は元氣に言つて、二挺の俤を往來へ引出しました。

要さん辨さんは、人力車といふものゝ實物を見るのは、此時がはじめです。

「さ、どうぞ早く乗つて下さい！」と俤夫にせき立てられるまで、二人はもちろ／＼してゐましたが、要さんが先の俤へ乗つたので、辨さんも後の俤へ乗りました。

俤が動き出した時、要さんは後をふり向いて、舌を出してみせました。辨さんも同じやうに舌を出して、うなづきました。それは、二人が斯うして俤に乗つた以上、長髓彦の源治が、どんなに汗みどろになつて追つかけて來ても、もう駄目だと云ふ意味を無言のうちに語り合つたのでした。

俤は一時間ほど走つて、和歌山市驛につきました。

けれども二人は汽車へ乗るのは、どうすればいいのか、その手續を知りません。で、要さんは俤賃を俤夫に渡す時、

「俤屋さん、すみませんが、大阪までの汽車の切符を買つて下さいませんか。」と頼んでみました。すると正直さうな俤夫は、出札口の所へ行つて、一口二

口語してゐたが、

「もう五分たてば、こゝで切符を買りますからお買ひなさい。それから汽車はそこから出ますから。」といつて、ていねいに切符の買方から乗場所まで教へてくれました。

始めて人力車へ乗つたほどの二人です。汽車が動き出した時の驚きといふものは、形容する言葉がありません。

「辨さん、あの煙を見い。」

「あそこで石炭をたいてゐるんだぞ。」

「これはゼームス・ワットが發明したんだなあ。」

「さうだ／＼。ゼームス・ワットは、えらい事を考へ出したもんだ。」

二人は田舎なまりの言葉で、窓から顔を出しながら話してゐるうちに、汽車はトンネルの中に入りました。

「要さん、これがトンネルだよ。くらないなあ。掏摸に旅費をとられるな。」

辨さんが大きな聲でそんな事を言つたので、そばにゐた乗客は、みんなふき出すやうに笑ひました。

まもなく車内は明るくなりました。辨さんは、みんなに顔を見られるのが恥しくて、黙つてうつむいてゐました。

やがて汽車は大阪の難波驛へつきました。二人は驛前の俤夫に頼んで、東京行の汽車の出る所まで乗せて行つてもらひました。そこは梅田驛でした。

「辨さん、こゝまで來れば、もう大丈夫だよ。これから汽車に乗つたら、京都も名古屋も見えないから、今晚はこゝへ泊つて、明日の朝早く出立しようぢやないか。」

「さうだ、それがよからう。」

二人の話は直ぐ一決して、驛前の宿へ泊ることになりました。

「私たちは、少し急ぎの用事があつて、東京へ行くのですから、明日の朝の一番早い汽車へ乗れるやうにして下さい。」

要さんは二階座敷へ案内してくれた番頭さんに、くれぐれ頼みました。

「宜しうございます。さつと一番でお立ちになられるやう、お起しいたします。」

番頭さんは要さんの頼みを、あまりに容易く引うけてくれました。それが二人には何となく不安でたまりません。

「辨さん、番頭さんは、あんなに言つてゐたが、大丈夫だらうか。」

「僕も安心できないと思つてゐるんだ。こんな大きな宿に、何十人も泊つてゐるんだらう。いくら番頭さんだつて、一々出立の時間を覚えてゐやしないよ。」

「ねえ、忘れられたら大變だよ。あの源治は大阪鎮

臺にゐたことがあるから、今にこゝに追つかけて来るかも知れんぞ。」

「ねえ、兄きが東京にゐるので、さつと東京へ行くに違ひないと思つて、……」

話してゐるところへ、番頭さんが炭火をもつて来ましたので、要さんは又た繰返して、前の通り頼みました。

「御安心下さい、大丈夫です。」

番頭さんは、まだ要さんの言葉の終らないうちに、さう云ひました。要さんは番頭さんから、からかはれてゐるやうに思ひました。

番頭さんが下へおりて行つた時、天井からぶらさがつてゐる電燈がぱつと明るくなりました。

「要さん、これは電氣燈だぞ。」

始めて電燈を見た辨さんは、びつくりしたやうに言つて、電燈を見つめました。

そこへ女中さんが、お茶盆をもつて來ましたので、

要さんはすぐ、

「ねえさん、この電氣燈はどこの店でも賣つてゐますか。」と、問ひました。

「電球ですか。」女中さんは、笑ひながら問返しました。

「いえ、電氣燈です。賣つてゐるなら、國へ歸る時、土産に買つて歸るつもりです。これはホヤの掃除をする必要もないし、第一石油くさくないから有がたい。」

要さんは大真面目で、そんな事を云ひましたが、女中さんは耳まで真紅にして、さつと座敷を出て行きました。

お風呂を知らせに來た時も、御飯のお給仕に來た時も、女中さんは絶えず前垂で顔をかくして笑つてゐました。二人は何だか知らないが、氣持悪く思ひながら、昨夜のやうに、御飯がすむと直ぐ寢床をのべてもらひました。



不安でたまらないので、寝る前に、も一度下の帳場へ行つて、明日の朝の一番早い汽車の間に合ふやうに起してほしいと頼みました。

番頭さんは、にこ／＼笑ひながら、御安心なさいと云ひました。

二人は二日の旅の疲れで、ぐつすり寝込んでしまひました。

寝てゐるうちに、要さんは長髓彦の源治に追つかれた夢をみました。そして、驚いてはね起きましたが、さア大變です。もう帳場には、番頭さんが起きて、算盤をはぢいてゐます。泊つてゐたお客が、荷物をもつて停車場の方へ出て行きます。

「辨さん、起きないか起きないか、もうみんな出立するぞ!」

「あ、さうか。乗遅れては大變だ。」

辨さんとはね起きました。それから二人は手拭をもつて段梯子を降りて、

「顔を洗ふところはどちらですか。」とき／＼ました。さつきの女中さんが、又たくす／＼笑ひながら洗面場を教へてくれました。

二人は顔を洗つて、帳場の前を通る時、

「お早うございます。」と云ひますと、番頭さんも、にこ／＼笑ひながら、

「お客さま大へんお早うございます。」と、云ひました。

二人は二階へ上りました。そして、出立の仕度を整へて、女中さんが朝御飯を運んで来るのを、今か今かと待つてゐましたが、十分たつても二十分たつても運んで来ません。

「辨さん、そこから番頭さんに請求して見ろよ。」

「さうだなあ、あれだけ頼んであつたのに、まさか忘れやしまい……」

辨さんは呟きながら段梯子の所から、帳場の方を覗きながら、



「番頭さん、早く朝御飯をもつて来て下さい。汽車に乗りおけると大變ですから。」と云ひました。する

女面の怪

西川喜平

寺内萬治郎畫



と、番頭さんは笑ひながら、「唯今さし上げます。」と答へました。けれども五分十分たつても、御飯は運んで来ません。停車場の方では、けたゝましい汽笛が聞えます。宿からは又た四五人のお客が、荷物をさげて、急いで宿を出ます。今度は要さんが、氣がなくなりまして。で、段梯子の上から、「番頭さん、早く朝御飯をもつて来て下さい。乗おくれは大變ですから。」と叫びました。しかし、どうしたものか、番頭さんは返事をいたしません。「番頭さん、早く御飯を願ひます。」あわてゝ風呂敷包を首にかけた辨さんも、要さんの後から段梯子の下をのぞき乍ら言ひました。けれども番頭さんは、算盤をばち／＼ならし乍ら、見向きもしません。要さんは、むツと腹を立てました。「番頭さん、田舎者だと思つて、人を馬鹿にしてはいけませんよ。早く御飯をもつて来て下さい。」要さんは段梯子を二つ三つ降りて、怒つたやうな

聲で言ひました。すると番頭さんは、荒々しく算盤を机の上に置いて、「お客様、御じやうだんも、いゝ加減になさい。今、何時だと思ひます。降りていらして、時計をごらんなさい！」と喧鳴るやうに申しました。要さんは、びつくりして店の柱時計をみますと、時計の針は今しも丁度十一時の所を指してゐます。「十一時？ 十一時？ まさか今頃午前十一時ではなからう？」要さんは、どたん！ と音をたてゝ段梯子に腰をおろしました。女中さんは、廊下のところで、腹をかゝえて笑つてゐます。「おや／＼僕たちは七時に寢て、十時すぎに眼が覺めたんだ。まだ夜は明けないのだ。」要さんは、頭をかき乍ら、逃げるやうに二階へかけ上つてみますと、辨さんは小い風呂敷包を首にし、はりつけたまゝ蒲團の中にもぐり込んでゐました。

(つゞく)

江戸時代に、將軍家お抱の能役者で、立花左近と云ふ人があました。

左近は、まだ年も若く、獨り身でしたが、その道の上手と云はれ、大名方にも、多くの弟子がありました。

ある日、山の手の町を通りましたが、一軒の道具屋の店で、フト目にとまつたのは、一つの女の面でありました。

その面を一目見た左近は、ツカ／＼と、道具屋の店に入つて、面を手に取り上げて見ると、銘がありませんので、何人の作ともわかりませんが、これまでに見たこともない、名作に驚きました。

「昔から名人の打つた、能の面は少なくないが、このやうによく出来た面は見たことはない、無銘ながら、適れの名作だ。」と思ひまして、道具屋の主人に、この面の出所を訊ねました。

主人は、

に、取り出してはながめて心を慰めました。

そして、その面を見入りますと、とても木で作つたものとは思へぬほど、生き／＼した、靈氣が漂つて、思はず、ウツトリと、我れを忘れてしまふほどでありました。

それで自分と、この面とは、何か深い因縁でもあるかのやうに思はれました。

左近はこの萬姫の面をつけて、能を演で見たいとしじう心に望んでゐました所、ある大名の屋敷の、舞臺で、能樂の催しがありまして、左近は（斑女）といふ能を勤めることになりましたので、やうやく自分の望みがかなつて、この面をつける時が來たと喜んでその當日を待ちました。

この斑女の能といふのは、花子といふ女が、夫と思ふ男に別れ、心が亂れ、かたみの扇を持つて、狂ひさまよふと云ふ筋で、左近の最も得意のものでありました。

「へい、このお面は、先代の時から店に御座いましたので、何方から出ました物でございますか……十何年も店に御座いましたのが、あなた様のお目にとまりましたのは、有難い仕合せでございす。」と云ひました。

そこで左近は、主人の云ふまゝに、價の金を取らせ、よい掘り出し物をしたと、喜んで家へ持ち歸りました。

左近の家には、名ある面打ちの作つた、古い能面は數多くありました。

その中に、女の面には、若女、小面、曲見、増など、いろ／＼名のある面も多くありますのに、買つて來たこの面に及ぶものはないとまでに、左近の心をひきつけた面は、どんな面でしたらうか。

これは（萬姫）と云ふ名の、美しい、艶やかな、女の顔を寫した面でありました。

左近は、この面を手に入れてからは、毎日朝に晩

いよく、その當日になりまして、左近は始めてこの萬姫の面をつけて、斑女の能を勤めました。

なにしろ、上手の名を取つた人が、得意の能に、名作の面をつけたので、その出来榮は、いつもよりは一層よく、見る人は皆んな感心して、賞めたゝえしました。

それで、能の中で、あの面が笑つたとか、泣いたとか云ふやうな、とり／＼の噂が立ちました。

左近も、

「これまで、何度も勤めた能で、自分で満足したことは一度もなかつたが、今日の斑女ほど、不思議と思ふほど、よく出来たことはない」と、喜びました。

左近は家に歸つてから、また萬姫の面を取り出して、シケジケと、ながめてゐましたが、まるで生きた人に向つて云ふやうに、

「お前のおかげで、今日の斑女は、自分ながら、

心ゆくまでの出来であつた。」と、繰り返し／＼云ひまして、名残り惜しさうに、紫の帛紗に包み、蒔繪の箱にしまひまして、床の棚へ置きました。

やがて左近は、寢床へ入りますと、宵から降り出した春雨に、軒の雨だれの音ももの凄く、あたりもヒツツリと、夜も更けまして、行燈の灯影は、ポンヤリと銀地の枕屏風を照らして、屏風にかいてある白梅の花も、香り高く匂ふかのやうに覺えました。

左近は、夢心地でウト／＼としてゐると、

『ホ、、、、、、』と、なまめかしい、女の笑ひ聲が、幽に聞えました。

ハツト目をさました左近は、頭を上げて見ましたが、あたりに人のゐるでもなく、まして女の聲のするわけはないので、耳のせいかと、思つてゐますとまた、

『ホ、、、、、、』と笑ひ聲がしました。しかも今度は、耳元近くのやうに、聞えましたので、左

九〇
近はツト身を起こして、座敷の隅々まで、見廻しましたが、何者の影も見えませんでした。「不思議のこともあるもの」と、眼を閉ちて、眠りかけました。折りから障子のすき間を洩る風に、行燈の火はフツト消えて、暗闇になりました。

スルト何とも知れず、枕にサラ／＼とさわつて、額に生あたるかい、人の息が、かゝつたと氣づいた左近は、ガバとはね起きさま、闇の中にもそれかと見えた、スル／＼と行く幻の影を追つて、枕元の小刀を取るより早く、抜き打ちに切りつけました。

ハタと手ごたえがあつたと思ふとたん、床の間の方でバタリとかすかな音がすると、そのまゝ後はヒツツリと静になりまして、窓をうつ雨の音のみきこえました。

左近は、召使の者を呼んで、行燈を灯させ、四邊を見ましたが、取り亂した自分の姿のほか、何の異つたこともなく、また外より人の入つた氣色もない



ので、今のは夢か……現か……現でもなし夢でもなし、幻の怪異は何者かと、思ひわづらつて、その一と夜を明かしました。

あくる朝、左近は起き出ましたが、ゆうべのことばかり心にかゝりまして、気分も優れず、病と云つて人にも逢はず、居間に閉ち籠つてゐましたが、

『オ、こういふ時こそ、萬姫の面を見て、心を慰めやう。』と、床の棚から、面箱を取り出して萌黄の紐をといて蓋を外し、紫の帛紗を開けて、一と目見た左近は、

『アッ。』と驚きの聲を上げました。

左近の心をひきました名作の萬姫の面は美事に、眞向より二つに割れて、しかもその面には今までのやうな、美しい、艶やかさも消へ失せ、その眼ざしには何とも云へぬ悲しみの色が見えました。

(をばり)

大風のゆくへ

(朝爲物語語)

三島霜川

寺内萬治郎畫



九二

鬼夜叉

島には、暖い潮風が吹いて、ほか／＼した日和が続きました。そして、白椿や紅椿の花も咲き出しました。島の正月は、もう真んとの春でした。

爲朝は、梁田の二郎の歸ッて行ッた其の日から、島ちうの麻を集めさせました。そして、それを、島の者を集めて、太い風糸のやうに編はせました。それが、幾日も／＼續きました。さうして、その太い風糸のやうに編はれた麻の緒は、だん／＼、だん／＼長くなッて行きました。

『すてきだな。この島を七廻り廻しても、まだ、あまる位だらう』

島の者たちは、さう云合ッて、魂消て居りました。しかし、誰もその編はれた麻糸が、何になるのか知りませでした。

すると、ある日、爲朝は、鬼夜叉たちに、長さ一丈八尺もあらうといふやうな、大きな風を作るやうに命じました。

『そんな大きな風を作ッて、何んになさるのでござります。』

鬼夜叉は、不思議で耐らないやうに、たづねました。

『伊豆の下田の方まで飛ばせて見るのちや。面白いぞ、飛ばせたら子どもたちも、さぞ悦ぶことであらう。』

爲朝は、のんきらしく、にこにこしながら然う云ひました。

『それにしては、風が餘り大き過ぎは致しませぬか。』

『いや、大きいから面白いのちや。昔、唐の國では、大風を人にく、りつけて揚げて、軍器としたものちやと聞くぞ。子どもたちの、轆がてら、俺も試みて見ようと思ふ。』

作れ／＼。そちの力ならば、それほどどの風も、やす／＼と揚げられる。』

爲朝は、非常に元氣で、そしてたいそう、乗氣でした。

『戦の稽古になるといふなら作りましよう。』

鬼夜叉は、シブ／＼承知しました。

爲朝は、この島へ流されると聞

九三

もなく、この鬼夜叉と腕相撲を取りました。鬼夜叉は、この島に生れて、この島に育つて、十五人力もあるといふ、うんと力の強い男でした。そして、爲朝は、肘を抜かれた當座のことでしたが、やつて見ると、子どもが大人に向つたやうに、鬼夜叉が負けました。鬼夜叉は口惜しがりました。「島一番の強力のおれが、こんな答はない」と、云つて、今度は、棕櫚の木のように毛むくじやらの太い双手をかけて、ウン／＼云つて、爲朝の腕を捻倒さうとしました。が、やつぱり、駄目でした。鬼夜叉の鬼のやうな顔には、膏汗がだら／＼流れて來ました。それでも爲朝の腕は、ビクとも動きません

でした。「とても、かなはない。」と、鬼夜叉は、まわつて了ひました。「弱い奴だな。」と、爲朝は、軽く笑ひました。「お前様が強過ぎるのだ。」と、鬼夜叉は頭を掻きました。さうして、爲朝の方に、すっかり感心して、すぐに家來になりました。鬼夜叉は、見かけは、怖い男でしたが、しかし、心は優しく、正直でした。それで、爲朝が生まれると、づつと其の子守を致しました。次男の朝稚も然うでした。爲朝の島の子は、三人ともに、鬼夜叉の毛むくじやらの手に守りを

されて育ちました。それで、爲朝も、たいそう、鬼夜叉を可愛がつて居りました。「風を作るのも好きが、そんなに大ツかいのちや、厄介だ。」さう思ひながらも、鬼夜叉は、爲朝の呼びつけ通り、すぐに、大風を作る支度に取りかかりました。そして、まづ、大きな竹を五六本ほど伐つて來ました。それから、竹を割つて、親骨を作り、子骨を作つて、風が、だん／＼組立てられて行きました。さうして、紙が張られ、その紙には、爲朝の指圖で、油が塗られました。この油を塗つたことには、爲朝に深い考があつたのですが、それは誰も氣が付きませんでした。

さて、四五日すると、大きな大きな風が出來上がつて、糸目もつきました。

海上飛行

朝から東風が程よく吹いて、いよ／＼其の大風を揚げる日が來ました。

爲朝は、「今日は風の揚初めをするのだぞ」と、云つて、大勢の島の者に風を持たせて、濱の廣場へ出ました。その風糸が、島の者が二人で、やつと擔げる程もありました。爲朝、朝稚——三人の子どもたちも、その母の彭江も、爲朝の後に從いて行きました。鬼夜叉もお供をしました。三人の子どもたちは、雀躍して、悦んでゐま

した。「お父上、わたくしは、あの風に乘つて、伊豆の國の方が見たうございます。」と、何にを考へたのか、朝稚はふつと、そんなことを云ひました。それが、本氣でした。「ナニ、風に乘つて見たいといふか。面白いことをいふ。この風は海の上へ飛ぶのだぞ。」爲朝は、思もかけぬことを云はれたやうに、ちよつと驚いて、立停まりました。そして、じつと、朝稚の顔を見ました。「海へ飛ぶことは、よう存じて居ります。でも、お父上は、昔、唐の國では、風に乘つて、敵の城を窺ふたものちやと、お話をされた

ではござりませぬか。この風でございしたら、わたくしが、乗られましよう。」「それは、乗れる。」と、爲朝は、少し、にこつた顔つきになりました。「では、乗せて見て下さりませぬか。」と、朝稚は、熱心に云ひました。「ちやが、危ないぞ。落ちると、死んで了ふのだぞ。」と、爲朝は、嚴に、そして、おどかさやうに云ひました。「かまひませぬ。わたくしは、伊豆の國が見たうござります。鳥でさへ、空を飛びます。人が空へ揚がれぬ道理はないと、わたくしはいつも然う思ふて居りました。」

「面白いぞ。ほんとに乗って見るか。」

と、爲朝は、愉快さうに云ひました。

「はい。」

「きつと、乗るか。」

「はい。お父上は、命が惜うては好い侍にはなれぬと、いつも仰せられたではござりませぬか。」

朝雅は、立派に云ひました。

「えらいな。では、乗せて遣るぞこりや、鬼夜叉、館へ行て、和子を風にくくりつけるほどの麻繩を持ッて来よ。」

と、爲朝は、悦しくてならないやうに、勇立ッて云ひました。

鬼夜叉は、爲朝も、朝雅も、真ん中に然うする氣らしいのを見

て、呆れて了ひました。そして、「これは、大變なことになった。」と、只、きよろ／＼して、行くのをしぶつてゐました。

母の鰯江も、びっくりしました。

「風に入をく／＼りつけて飛ばすとは、昔々から、聞きも及ばぬことぞござります。もし、和子にお怪我あつては、嘆ともなりましよう。これは、お止めあそばしたが宜しうござります。」と、泣顔になつて、不賛成を唱へました。

爲朝は、怖い目で、ぐいと、鰯江を睨みました。

「獅子は、そ



の子を谷に突落して、剛柔を試むるといふぞ。朝雅を風に乗るのは、その膽力を練るためぢや。女の差出口は聞かぬぞ。」と、叱り飛ばして、

「行かぬか、鬼夜叉、愚圖々々すな。」と、追立てるやうに、きつと命令しました。

鰯江は、

泣出して了ひました。爲朝は、それを振向いて見ようとしませんでした。そして、懷ろから、一流の白旗を取出して、風の真中の骨に結びつけたりして、それ／＼支度をしました。

朝雅は、胴や腕や足を、布や麻繩で、しツかりと、風の骨にく／＼りつけられました。そして、大勢の者が風を起し立てる。爲朝は、自分に風系を取ッて、一町ほどもかなたから、手繰り始めました。

風は、地上を離れました。爲朝は、程よく風系を手繰ッては、繰出す。風はや／＼強く伊豆の方へ吹いて、風はだん／＼に大空に伸びて行きました。さうして、長い尾

と共に、

ヒラ／＼と

翻る白旗が

紙ぎれほどにな

つて見えるやうに

なりました。

風は、高く、遠く揚

がりました。そして、も



う風糸も無くなりました。そこで爲朝は、風糸の片はしを、ある岩角に、三重にも四重にも巻きつけて、くっつけました。

「目が眩むで、朝稚様は、伊豆の國が見えるところではあるまい。」

鬼夜叉は、さう思つて、ほかんと風を見上げて居りました。

「もう、お下しになりましたが可いではござりませぬか。」

と、鰐江は、願ふやうに云つて今にも風が、海上に、眞ッ逆さまに落ちはせぬかと氣を揉むで居りました。

しかし、爲朝は、返事もしませんでした。さうして、鬼夜叉に、風の番をするやうに命じて、自分

しばらく沖の方を眺めて居りました。

沖の沖の、ブツと沖の方に、五六艘の漁船が、木の葉を散らしたやうになつて見えて來ました。それが、風の揚つてゐる方を目掛けて、だん／＼に近よつて來ました。

もちろん、島の船ではありませんでした。

と、見てゐるうちに、その船の一艘から、何かの合圖と見えて、烽火が上がりました。空も海も澄みきつてゐたので、黒い煙が一筋バツと空に騰つたのが、ハッキリと見えまして。

それと見た、爲朝は、につこりして、急いで巖を駆下りました。そして、風糸の片はしをくっしつ

けた岩角のところまで來ると、いきなり、差添を抜放つて、ふつと、風糸を切りました。それが、電光石火——鰐江も鬼夜叉も、「あッ」といふ間もない位でした。

風は、ズル／＼と、少し下がったかと思ふと、直ぐに傾いて、それから逆さになつて、まっしぐらに落ちかゝりました。鰐江は、兩手で顔を押へて、砂地に、どつと泣きくづれて了ひました。

「お前様は、氣でもお狂ひなされたか。」

と、鬼夜叉は、かつとなつて、爲朝に掴みかゝつて、嘸鳴りました。

「騒ぐな。朝稚は、海へ捨てたのだ。朝稚を捨てようために、あの

大風を作つたのだ。」

爲朝は、鬼夜叉の手を振りはらつて、また、以前の巖へ駆上がりました。鬼夜叉は、鬼のやうになつて、その後を追駆けました。風は、流れ星のやうに、海へ落ちて行きました。

沖に來てゐた五六艘の小船は、梁田の二郎の船でした。さうして梁田の二郎は、海に落ちた風から朝稚を拾上げました。

爲朝は、朝稚を海へ捨てました。それで、朝稚は、島に流されてゐる天下の罪人では無くなりました。さうして朝稚は、下野の足利義康のところへ連れられて行きました。この、朝稚を風に棄せて、海へ捨てるといふことは、梁田の

二郎が、爲朝に智慧をつけたのでした。

爲朝は、館に歸ると、よく其の譯を鰐江に話して聞かせました。

それで、鰐江も、安心しました。すると、それから四五日経つて

からのことでした。沖の方に、多くの軍船が見えると云つて、島の者が、慌だしく知らせて來ました。鬼夜叉に物見をさせると、それが果して、朝廷の名を借りてやつて來た平家方の船でした。

「よし、平家の奴等に、一ツ泡を噴かせて遣らう。」

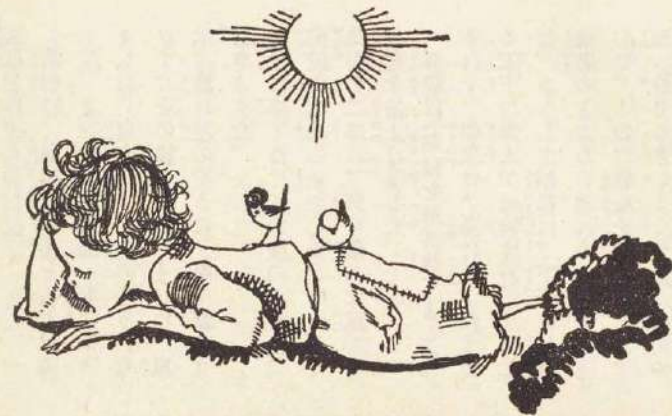
爲朝は、さう云つて、大きな弓を持つて出て行きました。さうして、その軍船の一艘を射て沈めました。それは、雁股の矢で、帆綱

を射切つて、船を顛覆させたのでした。さうして、館へ引返して、館に火を放けました。

程なく平家の軍船が、雁の行列のやうになつて、島へ押寄せて來

ました。その頃にはもう、爲朝の館は、殆ど焼落ちて了つてゐました。平家の軍兵は、その焼跡を探して、黒焦になつた大きな男の死骸を一ツと、それから女の死骸を

一ツと、二ツの子どもの死骸とを見つけました。子どもの死骸にも女の死骸にも首がありませんでした。さうして、大きな男は、腹を切つてゐました。平家の軍兵等はそれが多分爲朝の死骸だらうと云つて、島を引上げて行きました。



呆阿さぐのも

郎一喜平片

畫一歸本岡

一〇〇

南の方の或る町に、ひとりのたいへん白痴な男が
ありました。——それは、生れつきの白痴な男で、
その上に、お父さんもお母さんもない、獨りぼつち
者で、たいへんに貧乏でありました。

それですから、その男は、いつも頭の毛といつた
ら、まるで栗の毛毬のやうにぼう／＼とのばしたま
まで、また着物といつたら、年が年中、一枚の汚なら
しいぼろ／＼のものを着てゐるといふやうな始末で
日に三度の御飯さへもろく／＼食へることが出来な
いやうな、それは可哀さうな生活をしてゐたのであ
りました。

ところが、その男は、そんな風に、たいへん貧乏
な生活をして居りながら、根が白痴な生れつきの爲
でありませうか、それは／＼、たいへんな懶け者で
ものぐさ者でありましたので、町の人々は、その男
のことを『ものぐさ阿呆』と、呼んで、誰一人とし
て、その男の可哀さうな生活に、同情して呉れる人

はありませんでした。

けれども、その男は、白痴のくせに、妙に片意地
の強い男でありましたから、いくら町の人々から、
白痴だの、懶け者だの、ものぐさ者だのと、悪口を
言はれたところで、そんなことは、ちツとも、恥か
しいことだとも、情ないことだとも思ひませんでした
し、また、いくら町の人々から、可哀さうだと、
同情をされなくとも、決して、心細いことだとも、
悲しいことだとも思ひませんでした。それどころ
か、却つて、町の人に話かけられでもすると、それ
に挨拶をしなければならぬものですから、それさ
へも非常にものぐさがつて、いつも、そんな時には
知らん顔をして、横をむいて了ふといふ程の。もの
ぐさ者でありました。ですから、手足を動かして、
仕事をするなど云ふことは、猶のことです。田や
畑へ行つて働いたり、車を曳いて働いたりして、お
金を儲けて、樂な生活をしようといふことなどは、

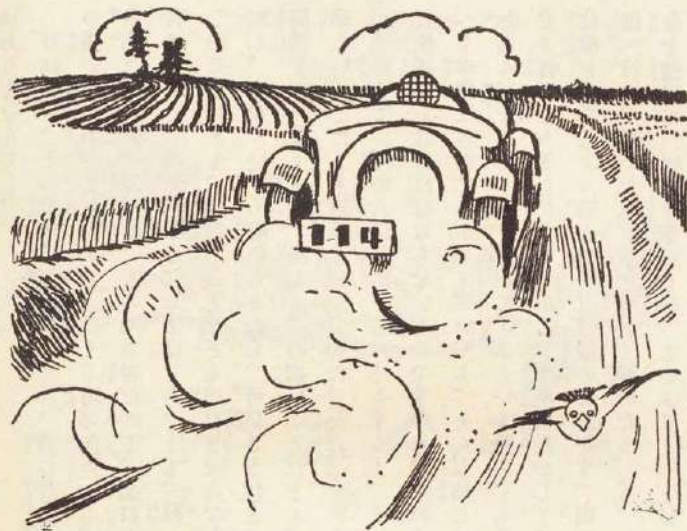
決して考へたことはありませんでした。

毎日毎日、日あたりのいゝ、道端の草原の上に寝
ころんでは、何を考へるといふこともなく、日向ぼ
つこをしながら、うつら／＼と、晝寝をして居るの
でありました。そして、それが、また、この男にと
つては、お金持ちになるよりも、何よりも増しな、
樂な生活なのでありました。

ところが、或るお天氣のいゝ日のことでありまし
た。——丁度、その日も、朝から、からりと晴れて
お天道様の暖かい光が、そこら中をぼか／＼と温め
てゐる、それはいゝお天氣だつたものですから、も
のぐさ阿呆は、

『これは、うまい／＼。こんなお天氣のいゝ日こそ
日向ぼつこをしなければや嘘だ。』

と、云つて、いつものやうに、道端の草原へ出か
けて行つて、ごろりと寝ころんで、何を考へると云
ふこともなく、うつら／＼と、日向ぼつこをしながら



ら、晝寝を始めたのでありました。

すると、それから間もないことでありました。丁度、ものぐさ阿呆は、お天道様の暖かい光に、ほかほか照らされて、いつの間にか、いゝ心持ちになつて、うつら／＼と寝込んで了つて、天国の夢をみてゐた時のことでありました。

「ブブーッ！ブー！」

と、それは／＼、たいへん大きな音をたて、ものぐさ阿呆の頭のところを、まるで、大きな鳥かなんかゞ、飛んでゞも行くやうに、素晴らしい勢ひで走つて行くものがありましたので、折角、いゝ心持ちになつて、天国の夢を見てゐたものぐさ阿呆も、流石に驚ろいたとみえて、

「ヒヤ——ッ。」

と、いつものものぐさにも似合はない、大きな聲をたて、ひよくりと飛び起きました。そして、すぐさま、素晴らしい勢ひで走つて行つた、怪しげな

物音の方を振り向いて、ちいつと、その後姿を睨みつけました。

ところが、皆さん！

何といふおかしなお話ではありませんか。その素晴らしい勢ひで走つて行つた、怪しげな物音と云ふのは、勿論、大きな鳥でも獣でもありません。まして、化物などは、この開けた世の中には居る筈があ



りません。なんのことはない、それは、近頃、都から買ひ入れて來たとかいふ、町のお大盡様の小型の豆自働車でありました。ものぐさ阿呆は、走つて行つた豆自働車の後姿をちつと見つめて、棒のやうに立つたまゝ、

「ちえつ畜生奴！折角いゝ心持ちになつて天国の夢を見てゐたのを驚ろかしやがつて、畜生奴、畜生奴。」

と、走つて行つた豆自働車を恨みました。けれども、いくら、ものぐさ阿呆が恨んだところで、そんなことは、豆自働車の知つたことではありません。豆自働車は、何も知らぬ顔して、ブー／＼と、ラッパを鳴らしながら、ものぐさ阿呆の頭から、すつかり土

煙をあびせかけて、向ふの方へと走つて行つて了ひました。

この時の、ものぐさ阿呆の口惜しさ云つたら恐らく、ものぐさ阿呆が、この世の中に生れて来てから始めてのことでありませう。もう、影も姿も見えなくなつた、豆自働車の方を見つめたまゝ、兩方の眼には、大きな涙の玉を浮べて居りました。そして、その涙の玉が、する／＼と、頬を流れて、ぼつたりと下へ落つこちると、同時に、ものぐさ阿呆は、『わアッ』と、大きな聲で泣き出してすひました。そして、心の中で、

『畜生奴、今に俺もお金持ちになるぞ。そして、俺も豆自働車を買つてやるぞ。』と、云ひながら、ぼろぼろこぼれる涙をぼ／＼と落し乍ら、どんなにか自分の貧乏なことを口惜しがつたか解りません。

とは云ふものの、いくら、ものぐさ阿呆が、今更口惜しがつたところで、根が白痴者のものぐさ阿呆

もう、先刻の豆自働車の恨みなどは、何處へやら、すつかり忘れて了つて、只、お金持ちになりたい、お金持ちになりたいと、心の中は、そのことで一杯でありました。

ところで、ものぐさ阿呆は、遂々、お大盡様の家へ、お金持ちになる方法を聞きに行きました。

そこで、ものぐさ阿呆は、お大盡様の家へ着くと、

『今日は、旦那様に、ちよつとお願ひがあるんですが、旦那様に逢はして下さい。』と、玄關に立つて叫びました。すると、その聲を聞いて、奥の方から、ズシン／＼と大きな足音をたて、太つた番頭らしい人が出て来ました。そして、ちよつと、ものぐさ阿呆の顔を見ると、

『何だ、ものぐさ阿呆か。何の用事だ。早く用事を云つて歸れ。こゝはお前などの来る所ではない。』と太つた番頭らしい人は、その身體のやうな太い聲で

です。どうすればお金持ちになれるのか、そんなことは、いくら考へたところで解らう筈がありませんでしたが、それでもものぐさ阿呆は、一生懸命になつて考へました。

『どうしたら、お金持ちになれるかな。解らないな。……しかし、俺だつて、お大盡様の一人息子と同じ年月に生れたのだから、同じ年月に生れてゐながら、俺が貧乏で、あの一人息子が金持ちと云ふ法がない。俺だつて、きつとお金持ちになれる。だがどうしたらお金持ちになれるのかなあ。』と、ものぐさ阿呆は、考へて、考へて、考へてみました。が、それでも、どうしてもお金持ちになる方法が解りませんでした。それで、遂々、ものぐさ阿呆は、『こりや、ひよつとしたら、お大盡様のところへ行つて聞いてみたら解るかも知れない。願つてみたら、きつと教へて呉れるに違ひない。』と、思つて、心を決めて、お大盡様の家へと出かけて行きました。そして、

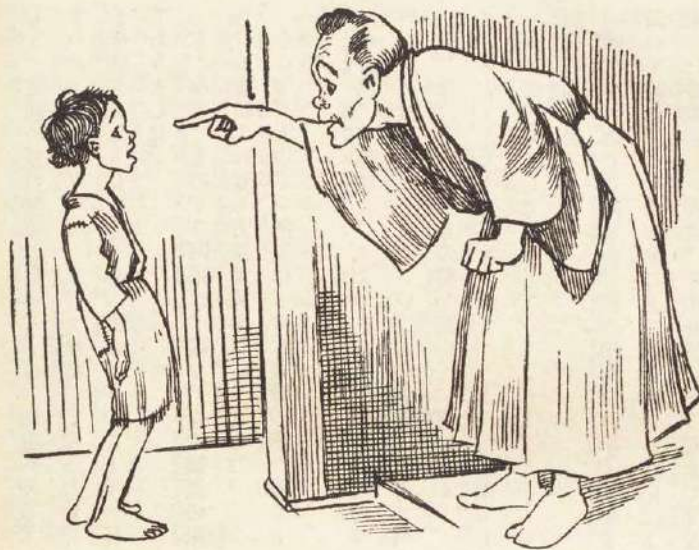
言つて、ぎよろりと睨みました。

ものぐさ阿呆は、その人に睨まれると、まるで自分がその人に叱られてもした様に思へて、何といふこともなく、ぶる／＼身體が震へて来ました。

そこで、成るべく小さな聲で『實は、私は金持ちになりたいんですが、金持ちになる方法を教へて貰ひたいんです。』と、恐る／＼言ひました。すると、太つた番頭さんは、また、太い聲を出して、

『馬鹿なことを云ふな。ものぐさで、阿呆のお前なんぞがどうしてお金持ちになれるものか。』と、また睨みました。

ものぐさ阿呆は、もう、身體が震へて、震へて、どうすることも出来ませんでした。何だか、太つた番頭さんに、ぎよろりと睨まれると、心臓のあたりが、どき／＼して来て、眼まひがするやうな氣がしました。けれども、ものぐさ阿呆は、この儘、こゝでお金持ちになる方法を聞かなかつたら、もう、何



處へ行つても、きつと教へて呉れる所がない、と云ふやうな氣がしました。それで、ものぐさ阿呆は、ぶる／＼震へる身體を、足の先に力を入れて、ぐんと踏ん張つて、元氣を出して、

「でも、番頭さん。いくら私が、ものぐさでも、阿呆でも、この家の息子さんと、私は同じ年月に生れたんだのに、それに、この家の息子さんばかりがお金持ちで、この私が貧乏だと云ふのはどんな譯でせうね。それが私には解らないのです。しかし、私は、きつとお金持ちになれるやうな氣がするんだが、どうか、番頭さん、お金持ちになる法を教えて下さいな。」と、口早やにべら／＼と云ひました。すると、それを聞いた番頭さんは、急におかしうな顔をして、でも、わざと、氣むづかしいやうな顔をして、笑ひをかくしながら、

「ふん。そんなにお前は、お金持ちになりたいのなら教へてやらう。」

と、云ひました。

お、その時の、ものぐさ阿呆の嬉しさと云つたら、恐らく、これも、生れて始めてのことでありませう。

「ありがたう／＼。一體、どうすれば、お金持ちになれるのでせう。番頭さん、早く教へて下さい／＼。」と、ものぐさ阿呆は、まるで、番頭さんを神様のやうに思つて、手を合せて拜みました。

それを見た、番頭さんは、あんまり、ものぐさ阿呆の格構がおかしいので、今にもふき出したい程なのでしたが、猶も、氣むづかしいやうな顔をして、

「ところで、ものぐさ阿呆、お前は、そんなに金持ちになりたいと思ふなら、これからお前は、毎日遊んでばかり居ないで、働らかなければ駄目だ。田や畑へ行つて働いてもいい。また、車を曳いて働いてもいい。何でもいゝから働らかなければ、お金持ちにはなることが出来ない。解つたか。」と、云ひま

した。しかし、ものぐさ阿呆には、番頭さんの云ふことがよく解りませんでした。働らかなければ、お金持ちになれないと云ふことが、よく解らなかつたのです。それで、

「でも、番頭さん。」と、ものぐさ阿呆は、聲を勵まして、

「こちらの息子さんは、働らなくなつとも、生れた時からお金持ちだが、どうして、私だけは、働らかなければ、お金持ちになれないのでせうか。私は、それが不思議でならないのです。」

と、云ひました。

すると、番頭さんは、太い聲を猶々太くして言ひました。

「だからお前は、お金持ちになれないのだ。そんなことはちつとも不思議なことではない。それは運命と云ふもので仕方のないものだ。だから、お前は、若し、本當にお金持ちになりたかつたら働かなければ

ならない。それとも、働くのが嫌だつたら、今度生れ変わる時に、神様にでもお願いして、お金持ちに生れ変わるやうにするのだ。」

「へい。それでは、今度生れ変わる時に、神様にお願いすれば、お金持ちになれるのですね、さうすれば働かなくとも、お金持ちになれるのですね。」と、ものぐさ阿呆は、働かなくとも、生れ変わる時さへ神様にお願ひすれば、お金持ちになれるのだと、思ひこんで、何んだか、心の中が急に嬉しくなつて來ました。

そして、言葉を續けて、

「さうすると、番頭さん、私が今度生れ変わった時に、お金持ちになると——勿論、その時は、こちらの息子さんは、貧乏人に生れ変わるのせうね。」と、ものぐさ阿呆は、いかにも嬉しさうな顔をして言ひますと、今まで、ものぐさ阿呆の言ふことを黙つて聞いてゐた番頭さんは、急に、大きな太い聲を張りあげ

て、

「何を言ふのだ、馬鹿つ！」

と、云つて、今にも、ものぐさ阿呆に、飛びかゝつて來るやうな風をして、眼をぎよろツと光らせて睨みつけました。

と、その時のものぐさ阿呆の驚ろきやうと云つたら、その割れ鐘を叩いたやうな番頭さんの聲が、がーんと耳に響いて來たと思ふと、もう、すつかり膽をつぶさんばかりに吃驚仰天して了つて、無我無中になつて、其處を飛び出して、もと來た道を、すたころ／＼と駆けて、遂々、いつもの道端の草原のところにまで逃げて來て了ひました。そして、草原の上に、どつかりと腰をおろして、

「あゝ、やれ／＼、金持と云ふのは、何でも彼でも大きな聲を出すものだ。今の番頭も、先刻の豆目働車も同じやうな聲を出しやがる。」

と、云つて、ものぐさ阿呆は、どき／＼する胸を

撫でながら、

「まあ、然し、これで俺も働かなくてお金持ちになることが解つたから、まづ安心だ。兎に角、これからは、ゆつくりと日向ぼっこをして、お金持ちに生れ変わるのを待つことだ。そして、俺もお金持ちに生れ變つたら、一つ大きな聲を出して皆を驚ろかしてやらう。」

と、云つて、その儘、ごろりと草原に横になつて、

(をばり)

うつら／＼と晝寝をはじめました。

と、この時、丁度、道端の向ふの枯木の梢にとまつてゐた、一羽の鴉が、何か思ひ出しでもしたやうに、ものぐさ阿呆の方を向いて、

「阿呆、阿呆」と、叫びながら、西の方へ飛んで行きました。



汽車

若山牧水

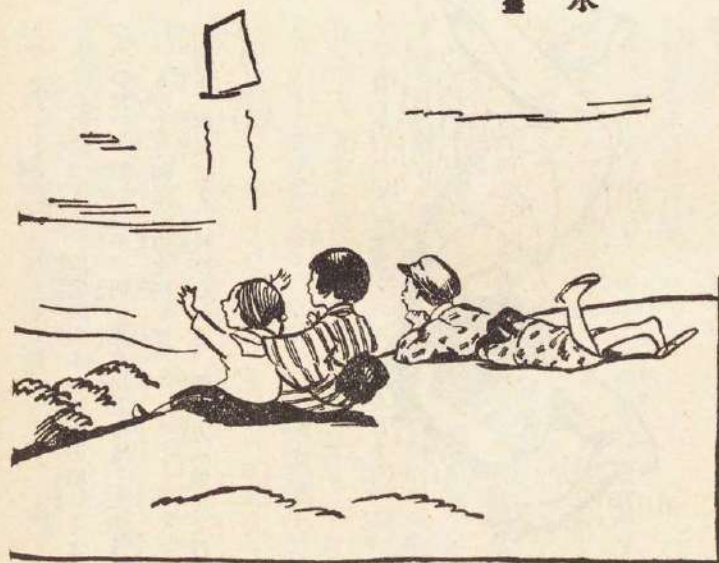
寺内萬治郎畫

汽車がゆきます

海ぞひに

海岸 少々

まがり也



汽車も曲つて
ゆきました



五百七號室

三井信衛

寺内萬治郎畫

【前號までの梗概】 滋の家は、寶石商で、三年ぶりに御園四から歸つた父は、ラヂオの機械を土産に與へた。するとそのラヂオから、毎夜不思議な暗號の鐘が聞えた。突然に電報が來て、父は再び上海に行つたが、その後滋の家では、七個の寶石が偽物とすり替へられ、刺へ東京市内には夜毎七軒づゝの盜難事件が起つた。ある夜滋が、少年店員の夏雄や誰一とラヂオをきいてゐると、聞らずもそこから洩れたのは『しげる、悪魔だ、神だ』といふ父の聲だつた。



一一二

と、その明る晩、父が突然戻つて來て『今までカミオン商會といふ悪人の家に監禁されてゐた』といふ。ところが奇怪にも、その話の最中更にラヂオから『しげる』といふ聲が聞え、同時に、今まで目の前にゐた父の姿が消えて、その代り見るも恐ろしい怪人が、ヒストルをつきつけて立つてゐた。滋は必死になつて屋上に逃れたが、力つきて遂に五階の頂上から飛び、大怪我をして養心堂といふ病院に入つた。

漸く滋の傷も治り、支配人の松本と夏雄と誰一が見舞に來た。その時松本は『店員の奥原が、病氣のまゝ、店を逃げた』と告げる。と、さう話す松本の顔がサツと蒼ざめて、その場に倒れ、殘る夏雄に誰一の二人も、同時にそこへバツタリと昏倒してしまつた。滋が驚いて醫師を招びに行くとそこは冷度この病院の手術室で手術臺に寝てゐるのは、端なくも今松本の言つた奥原であつた。その奥原は切開手術



その四 綠玉石の

ネクタイピン

1 誰もゐない

光つてゐます、きら／＼と明星のやうな鋭い光を放つてゐます。あの大きなダイヤの珠が一つ手術刀を握つた醫者の掌に。たし

歸つた登里野氏は何處にゐるか？ 再びラヂオから洩れた父の聲は？ 滋を襲ふた怪人の正體は何者か？ 松本と二少年は何故氣絶したか？ 患者の奥原は何事を暗示するか？

一一三

かにそれは登里野の店にあつた、佛國ナバアル會社から輸入したダイヤモンド！

大手術室のドアの側で思はず棒立ちになつた滋の顔を、二三人の醫師も白衣を着た看護婦も、言ひ合したやうに、ちいつと見つめました。

『どうしたんです？ まだ身體がすつかり快くならないのに、矢鱈に歩き廻つちや困りますね。』

『それどころぢやないんです！ 見舞に來た三人が急に倒れてしまつたんです。早く來て下さい！』

『えッ？ 見舞に來た三人が……？』

『……といふと、あの松本さんといふ方と、少年店員さんですか？』

『さうです、早くどなたか來て下さい！』

『さう！』

それを聞くと、一人の醫師と二人の看護婦が、バタ／＼と廊下に出ました。急ぎ足に駆けてゆくその後から、滋も息をついて歩いて行きました。丁度醫師が滋の病室のドアを開いた時、

『君、誰もゐないぢやないかい！』

『えッ？！』

驚いて滋が病室の中に入ると、これは不思議、今までそこにぐつたりと倒れてゐた三人が、影も形もなくなつてゐて、只そこには、松本支配人の黒い鞍の打鞆と、さうして謙一少年の風呂敷包とが見えるばかりです。

『おやあッ！』滋は叫びました。

『君、倒れたつて嘘なんだらう！』

『誰も居ないぢやないかい。』

『いゝえ、そんな嘘をついて、何のためになるんです？ たしかにこゝで倒れたんですよ。今し方まで三人は、こゝで話してゐたんですよ。』

『變だなア。おい、高安さん、その邊を一度調べてごらん。』

言はれて看護婦の高安さんが、これもバタ／＼と廊下をかけて、病院中をすつかり調べて見ました。三人の姿は何處にもありません。しかも三人の履物は、まだちやんと玄關に脱いであつたのでした。

2 父のネクタイピン

一體どうしたといふのでせう？ 滋は少しも合點が行きませんでし

た。今、手術室で見た眞原といひこの出來事といひ、何かしらそこに、怪しい連絡があるやうにも思はれたけれど、さりとて、どれがどういふ風に連絡があるのか、さすがの滋にも、想像さへつかなくつたのでした。

と、その時、ちいッと腕を組んでゐた醫師の磯部先生が、不意にベッドの側にあつた、三つの茶碗を手にとつて、それをためつ透しつ眺めてゐたが、何思つたか、傍の藥罐の蓋をサツととると、一心にその中へ、鼻を入れて嗅いでみました。

『あッ君！ 湯の中に、強烈な麻酔剤が入つてゐる！』

『たしかに麻酔薬だ。三人はそれを知らずに飲んだのだ！ うむ、待て。一體どのどいつが、こんな恐ろしい事をやつたのか……』

俄かに不安の表情に變つたかと思ふと、磯部先生はそのまゝ、あたふたと病室を出て行きましたが十分間ほど経つと、息せき切つて戻つて來ました。

『滋君、わかつたよ。炊事場を調べてみたら、大きな湯沸しの中にこれと同じ劇薬が入つてゐた。さうして炊事場のばあさんが、一時間ばかり前に、一寸外へ出たといふこともわかつた。きつとその間に、何者かこんなことをしたに違ひない。實際早く氣がついてよかつたよ。』

『ちや、外から誰かぞ、入つて來たんでせうか？』

『どうもさうらしいな。その證據には、病院の藥品室には、何の變りもないんだ。』

次から次へと起る不可思議な出來事！ 滋自身があのお茶を飲まなかつたことは、せめてもの幸でした。劇薬を入れた悪い奴は、勿論滋をも掠つて行くつもりだつたのでせう。

いや、今はそれどころではありません。磯部先生の許しを得た滋は、看護婦の高安さんと共に、直ぐさま病室を出ました。さうして表門の番をしてゐるおぢいさんにいろ／＼と訊いて見ましたが、この一時間ばかりといふもの、誰一

人出入りをしたものはないといふ返事でした。
 『高安さん、實に不思議ですね……』
 『でも坊ちゃん一度裏門を調べてごらんになつたら如何でせう?』
 『さうだ、どうせ悪い奴だ。表門から三人を運ぶ筈はない。』
 高安の言葉に力を得た滋が、再びこんもりと木々の茂つた裏門に廻ると、思はずちいッとした土の上を眺めました。その雨上りのジメ／＼とした土の上には、確かに新しい靴の足跡がありました。が、それも誰のものだかわかりません。
 ……と、その一瞬間、思はず滋は、つと腰を屈めたのでした。お

お、門の出口の石だ、みの上に、燦爛と緑に輝く、寶石入のネクタイピン! たしかにそれは、あのフランスから歸つた父の登里野氏が、ネクタイにつけてゐた、緑玉石のピンではありませんか!
 『お、ッ、ネクタイピンだ!』
 言ひもあへず、滋はそれを手にとつて、素早く懷中に秘したのでした。
 3 『これです、これです!』
 淺黄に染つた西の空も、いつしかとつぷりと暮れ果て、病室の窓からは黄色い町々の灯影が、何となくさびしく見えてゐました。
 思へば父がフランスから歸つて以來、あの盜難事件、ラヂオから

洩れた父の聲、滋を襲ふた怪人、そしてこの病院の事件……数へ立てれば、謎を見なかつた日の方が、少なかつたくらゐです。
 以前は滋の味方として、蔭日向なく盡してくれた、あの松本も二少年も、今は不意にその行衛が知れなくなつて、滋は全くの獨りぼつちになつてしまひました。
 『ねえ、高安さん。』と滋は眺めてゐた窓から目を放して、看護婦の高安に言ひました。
 『あの今日手術をした患者ね、あの人は何時入院したんです?』
 『さうですわね、え、と、……さう、丁度滋さんがお入りになつた、その次の日でした。』
 『ふう、その次の日……。そして

今日の手術で、ダイヤの珠が出ましたね。あれについてあなたは、

『え? 木村さん? あの患者がですか?』



何かお心當りはありませんか?』
 『え、何でも木村さんは……』

ですけど、その時木村さんのお兄さんとかつていふ附添のお方が、

木村さんがダイヤモンドを過つて呑み込んで、それがお腹に引つかかつたらしいから、手術をしてくれとさう仰有たんですわ。』
 『え? 木村さんのお兄さん? ……それは何んな人です?』
 『さうですね、四十五六のお背の高い、面長で色の淺黒い、それから髯も眉毛も胡麻鹽でした。』
 『え? それから、それから着物は?』
 『鼠色の洋服でした。』
 『え、ッ? その人は若しや、ネクタイに大きな、緑玉石のピンをつけてゐませんでしたか?』
 『あ、さう、確かにさうでした。何でもあの木村さんが、ダイヤを過つて口に入れたと仰有る

し、それにそのお附添の方が、立派な寶石のピンをつけてゐたので、病院では、きつと寶石の御商賣の方だらうなかと、お噂してゐましたのよ。」

「おッ、高安さん、もしや、もしやそのピンといふのは、これぢやありませんまいか？」

滋は得も言はれぬ不可思議の表情を浮べ、さつき裏門で拾つた父のピンを、高安さんの前にそつと出したのでした。

と、それを手に取つた高安看護婦。

「おッ、滋さん！これです、このピンです。この大きな卵形の緑玉石に違ひありませんわ！」

「まア、何うして滋さんはこれを……？」

「ふうむ……あゝ高安さん、僕は少しも見當がつかなくなつた。何が何だか、まるで見當がつかなくなつた……。」

さう言つて滋は、ぐつたりと顔を伏せてしまつたのでした。

4 突然消えた光明

看護婦の語つた、與原の附添の顔形は、父の登里野氏にそっくりでした。

いゝや、この緑玉石のネクタイピンまでも、そっくり同じだといふのです。

それは一體、何を説明するのでせうか？

松本支配人の言葉でも、又夏雄や謙一の言葉でも、未だに父が行衛不明だといふことはわかつてゐる。

その行衛不明の父が、家にも歸らずに、わざわざ與原に附き添つてこの病院に來る譯が、何處にありませう？

そればかりか更に不思議なのは、現在このネクタイピンを、滋が裏門で拾つたことです。

「その附添の人は、今もこの病院にゐるんでせうか？」滋は訊きました。

「いえ。」

高安は首を振つて、

「直ぐにお歸りになつて、御入院から今日の手術まで、誰一人お附

つた！」

それはきつと父の筈はない。容貌こそ父に似てゐるが、必ず惡漢の一人に違ひない。そしてこのネクタイピンは、父から奪つたものに違ひない。

その惡漢は、偶然滋がこの病院にゐることを知つて、今日の企てをしたのであらう。

「さうだ！この同じ病院に、圖らずも與原のゐるのを幸、どうしてもそこら、何かの手掛りを得なければならぬ。」

確かに一縷の光明を得たやうに心に強く囁いた滋、その目も急に生き／＼と輝いて來ました。が、丁度その時です。

バタ／＼と、廊下をかける看護婦の足音、その足音が、滋の病室に近づいたかと思ふと、俄かにこつ／＼とノックの音が聞えしました。

「高安さん、ちよいと高安さん。」

「はい？」と高安は立ち上りました。

「すみませんけど、一寸お手を貸して頂戴な。」

「まア、何うなさつたの？」

「あのね……」

とドアの外の聲は急に低くなつて、「あのね、あの八號の木村さんが、手術の経過が悪くて、今、たうとういけなかつたのよ。」

「えッ？」

「その附添の人は、その日は直ぐ來るなり歸つたんですか？」

「いゝえ、夜の八時頃までいらつしやいました。さうして晩御飯の後に、廊下を散歩してらつしやるのを見ました。」

「ふうむ、廊下を散歩！そんなら病室の前には、名札が掛けてあるから、僕の名も知れる譯だ。しま

「えッ!」
思はず滋も身を起してしまひました。

「まア……!」
「え、脳貧血で急に……!」

「おッ!」

滋は再び、悲痛な聲を出しました。

「おッ、この突然の死! 弔ふべきか、嘆くべきか、又呪ふべきか、只一つ事件を索る端緒であつたあの與原が、圖らずも今急死しようとは……!」

5 與原の遺した紙片

松本支配人と二少年のことについて、滋が電話で知らせると、日

本橋の店からは、直ぐに守屋といふ青年店員が來ました。

守屋は滋から、今日の事件の一件を聞き、磁部醫師にも秘密に與原のことを話して、二人はやがて第八號の與原の病室へ入つたのです。

さすがに二人が與原の死顔を見たとき、長い間同じ店で働いた青年であるだけに、思はず目を伏せて涙を浮べました。おッ、しかも意外であつたこの罪の人さへ、死の前にはもはや全ての口を閉じて只そこには永久の眠りがあるばかりです。

事件の端緒を得るにも、死人に口なしで、もう全ては後の祭。

失望と落膽のうちに守屋と滋とは、お互ひに顔を見合せて太い吐息をつきましたが丁度その時でした。

四五人の看護婦は、與原の死體を別室に移して、今まで與原の寢てゐた白い夜具を、靜かに脱つて疊み始めました。と、その一刹那……。

「あッ!」

鋭い滋の聲がしました。

端なくも、その夜具とベッドとの境目に置いてあつたのは、白い小さな一枚の紙片!

「あッ、守屋さん、何でせう?」

「おや、紙片だ!」

言ふなり早くそれを手にとつた

滋。その目は一時にサツと明るみがさしたが、急に又ちいつと眉をよせてしまひました。おッ、それこそは、惡漢の秘密を告げる書き物でもなければ、又與原の遺言狀でもない。

「あッ、何を語るのか何を暗示するのか、不思議な恰好をした一枚のクロスワード・パ

ズルなでした!

「守屋さん、何でせう、これは?」

「ス・ワ

「ドおやありませんか?」

「さうですね、たしかにクロス



(今夜中に) (明日中に) (明日行く) (明日中止) (警戒) (集合)

(54)

とはいへんに、現在はこの光明も、まづばり一つの謎ではありませんか！たとへラヂオの暗號が分つたとて、それが事件探索の上に、何れほどの役に立つといふのでせう？ それに又この變なクロス・ワード！一體こんな譯の分らない手掛り、事件の真相が探らるのでもないか？ 次號でいよう、物語は高潮に達し、更に奇怪な變轉を生じるのです。

中村紅蔦

(三等當選) 眞鶴純子

恩を返したスツボンの話（二等當選）…木村緑生





恩を返した

スツボンの話 (二等當選)

木村 緑生

寺内 萬治 郎 畫

昔、琵琶湖に沿うた豊浦といふ村に、それはくやさしい徳彌爺さんといふのが住んでゐました。徳彌ちいさんは、家もゆたかで、何不自由なく暮してゐましたが、或年の冬風邪をひいたのがもとでロウガイと言ふ大病になりました。お爺さんはもとより、家の人達は大層心配して醫者よ薬よと手をつくしましたが、少しも快くなりません。もう此上は

死を待つより外に仕方がありませんので、家の人達は仕事も手につかず、心配ばかりしてゐました。ところが、或日のこと見舞に来てくれた隣村の人から、大津の濱にロウガイをなほす偉いお醫者がゐると言ふ話をきいたので、徳彌爺さんは、早速取る物も取りあえず、舟で大津に渡つて、其のお醫者に診て貰ひますと、お醫者は一通り診察したあとで、「これはなかく大病です。私のみたてによると、もうどんな薬を服んでも治りつこありますまい。」

と、申しました。

徳彌爺さんはすっかり失望して、すぐ／＼と醫者の家を出かけますと、醫者はちいさんと呼びとめて『毎日スツボンを一疋づゝ殺して百ヶ日の間に百疋の血をのんでごらんさい。さうすれば或は治るかも知れないが、其他に何の方法ありません。』と言ひました。

二

畑で蛭一疋傷つけてさへ、お念佛を唱へてお詫しなれば氣の済まない程やさしいお爺さんです。何の罪もない百疋のスツボンを殺して其の血をのむといふやうな、そんな残酷な真似はどうしても出来ません。思ふだけでもゾツとして肌粟粒ができません。ところが、どこまでも情深いお爺さんは、或日フ

『ムザ／＼百の生物の命をとることはやて、その代り、これから百のスツボンの命を助けてあの湖水へ放してやらう、それがよい／＼。』そこで徳彌ちいさんは、その日からすぐ、出入の魚屋に頼んで、スツボンを届けさせ、毎日一疋づゝ湖水の中へスル／＼と放してやりました。それから毎日のやうに、ちいさんは自分の手を放れて、あの澄みきつた水を潜つて泳いでゆく嬉しさうなスツボンを見ては、言ひやうのない喜びを感じました。

三

お醫者の言葉に背いて養生をしないのだから、だん／＼重くなつてゆかねばならぬ筈のお爺さんの病氣は、不思議にも日一日と薄紙を剥ぐやうに治りだしてきました。青白かつた頬には血の色が浮んできました。痩せこけた腕には肉が盛上つてきました。

薬も服まず醫者の言葉にも背いてゐるのに、どうしてこんなに治りだしたのでせう。お爺さん自身も不思議でなりませんでした。

七十、八十、九十と放してやるスツボンの数が重なるにつれ、おちいさんの病氣はだん／＼よくなり終には以前にもまして若返つたやうな元氣なく體になりましたので、お爺さんは申すに及ばず一家の人達の喜びは一通りではありませんでした。

四

或る暖い日でした。一艪の舟は、多勢の人を乗せて打出ヶ濱を離れました。それから二

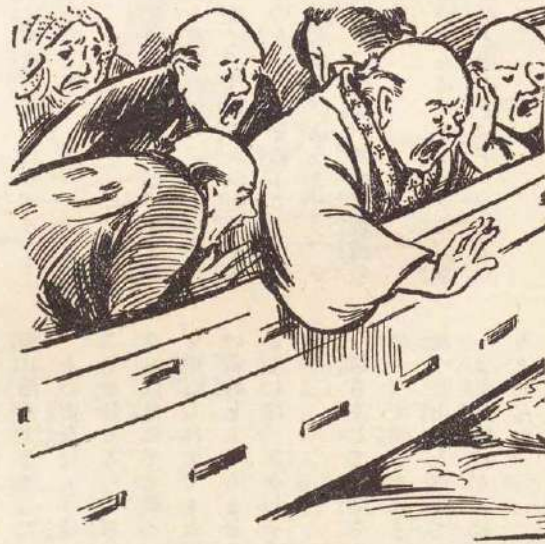


時許りも経つたかと思ふ頃でした。今の今迄、威勢よく走つてゐた舟足が急に止まつてしまひました。船頭は一生懸命「エイヤ／＼」と漕ぎますけれど、杭にでも引か、つた艪が芋蟲のやうに首を振るばかりでいつかな進まうとはしません。少しの風もなければ波も立ちません。湖面は鏡のやうに平らかなのに何と言ふ不思議なこととせう。人々は事の意外にどうなることかと案じました。船頭は漕ぐ手を止めて今度は櫂を逆手に持つて舟底を掻きまはしてみましたが、何の邪魔物もありませんでした。

そこで船頭に櫂を捨て、その場にドツカリあぐらをかきました。そうして暫く考へ

込んでゐましたが、やがて乗合の人々に向つて、

『これは皆さんの中にどなたか一人此の湖水の龍神様に魅られてゐなさるお方があるのです。それで龍神様は其のお方の生命をほしいために、かうして舟足を止なさつたのです。もうかうなつては致し方がございせんから誠に御氣の毒ではござ



います、どうぞ皆さんの持物を、何でもよろしいから一品だけ此の湖水へ投げ込んで下さい。若し投げたものが浮ばずにズブリ……と沈んでしまつたな

えながら、それ／＼もつてゐるものを湖水の中に投げ込みました。

投げて浮んだ人達は皆安心して喜びましたが、タ

ら、お氣の毒ですが、その方こそ龍神様に魅られてゐなさる證據ですから、水の中へ入つて頂かねばなりません。さあどうぞ何なりと投げ込んで下さい。』

と、言ひました。

五

人々は皆恐れ戦ひて、誰も何一つ投げ込もうとする人もありませんでしたが、早く早くと船頭にせきたてられるので今は仕方なくブル／＼ふる

ツタ一人心配さうな顔をしてちつと湖の上を眺めてゐる人がありました。それは長い間病氣であつて、やつと近頃達者になつたばかりの徳彌ちいさんでした。

爺さんの投げ込んだ手拭が鉛のやうにズブリ……と水中深く沈んでしまつたのです。

お爺さんは思ひました。

「何故に龍神様に魅られたのか知らないが、今となつては致し方がない。當り前だつたら、今頃はとうに病氣で亡くなつてゐる私だ。自分一人の生命を捨てたなら、此のたくさんの人の生命を救ふことができるのだ。私は思ひ切つて水にとび込みませう。さうすれば此の舟は動き出して、皆様が無事に豊浦の濱へ着く事が出来るのだ。」

舟べりに立つた徳彌ちいさんは、手を合せて、遙に故郷の空を伏し拜んだかと思ふと、ドン……と水に飛び込んでしまひました。



六

一二八

一旦沈んだお爺さんのからだは、暫くすると急に何物かに押し上げられでもしたやうに、ポツカリ水面に浮んできました。

その頃舟はもう遠く離れてお爺さんの浮び上つたことを知るものは誰一人ありませんでしたが、お爺さんは舟にでも乗つたやうに、それとも曳綱をつけて引張られてでもゐるかのやうに、濡れた脊中の黒い着物をふくらませながら、東へ／＼と流されてゆきました。さうしてやがてとある岸に運ばれました。

暫らくしてお爺さんは夢から覺めたやうに、吾にかへつて顔をあげますと、目の前にコンモリとよく茂つた山がそびえてるのが見えました。

よく見ればそれは生れ故郷豊浦の惣見寺山ではありませんか。

お爺さんは死んだ筈の自分が、いつの間にか、故郷の濱に打ちあげられてゐるのが不思議で、たまりませんでした。もしや夢ではないかと四邊を見まはしてゐるうちに、フト腹這つてゐる地面に目をやつて、思はず「アッ」と叫びました。

叫んだのも道理、砂の上と思つたのは何萬何千とも知れないスツボンの、寄り集つたなめらかな脊中でした。

徳彌ちいさんは、濱にとびおりて、砂に額をすりつけながら、湖水の方にむかつて、手を合せて拜みました。

其時湖水の波は、かなりひどく荒れてゐました。徳彌ちいさんはあのお舟が無事にこの豊浦の濱へ着くやうに祈りながら、お家へ歸りましたが、お舟は其日も其の翌日も着きませんでした。

(を は り)

こんく姉さん (三等當選)

眞鶴純子

柳田謙吉畫

昔、陸中國、藤里村に、お里といふ可愛らしい娘がありました。

秋のある日のこと、たつたひとり山へ行つて、栗を拾つてゐますと、カン／＼と日の照つてゐる、雲一つ見えない青空から

雨が降つてきました。お里は不思議に思ひながら、何處か雨宿りの場所がないかと、あたりを見廻しますと、大きな樅の樹の幹に、

こん／＼こん助
これでもよく見りや
三國一の
花婿様よ

と調子よく唄つて居りましたが、不思議なことに、いつのまにか、立派な若様の花婿姿になつてしまひました。

すると間もなく急に何だか多勢の人が近づいて来るやうな氣配がして、やがて、ほーいほーいといふお先ばら

丁度人を入れる程の洞があるのを見ました。早速、その中に入つて雨のやむのを待つてゐますと、薄暗い隅の方で、むく／＼と動いてゐるものがあるのに氣がつかしました。何かしらと思つて、よく見ますと、一匹の可愛らしい小狐が、鏡に向ひながら、しきりに化粧をしてゐます。小狐はお里が息をこらして見てゐるのも知らずに、一生懸命にチヨキンと立つてゐる耳のあたりや、突き出た口のあたりを撫でまはしながら、



ひの聲が聞えました。同時に多くの供の者に取圍まれた一挺の駕が樅の樹の前に下されて、袴をつけた供の侍達は、駕の兩側に並んで手をつきました。すると狐の花婿は直ぐにその迎への駕に乗りました。そして、行列は晴れた日の中を、雨にぬれながら、どこかへ見えなくなつてしまひました。

お里は暫く、呆然と、行列の後を見送つて居りましたが、ふと我れに立ちかへつて、奇妙なこともあるものだと思ひながら狐の置いて行つた鏡を見ますと、自分の顔が、不思議なほど美しく見えます。お里は、まだ一度も白粉をつけてみた事がありませんでした。で、何心なく狐の残してあつた白粉をつけてみますと、顔はだん／＼美しくなつて行きます。お里は、あんまりうれしかつたので、つい、うかうかと、

こん／＼姉さん
これでもよく見りや

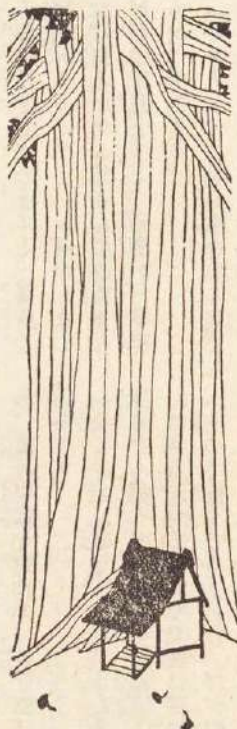
三國一の 花嫁様よ

と狐の歌つた歌の眞似をしますと、不思議なことにはこれもまた、いつのまにか、立派なお姫様の花嫁姿になつてしまひました。

すると又、前と同じ様に、大勢の袴をつけた供の侍に護られた駕がやつて来て、樅の木の前にとまりました。お里は面白半分にその駕の中に入りますと、行列は何處ともなく立ち去つてしまひました。お里はそれから再び藤里村に姿を見せませんでしたが、今でもカン／＼と日の照つてゐる時、雨が降ると、村の子供たちは、お里の嫁入だといつて、

こん／＼ねえさん
これでもよく見りや
三國一の 花嫁さまよ
と、うたひはやします。

(作者住所 東京市外杉並町天沼四六九 高杉信方)



お狸様

(選外)

中村 紅 蔦

水島 爾 保 布 畫

これはあの有名な、東京の浅草の観音様にあつたお話です。浅草の仲見世が、まだ今のやうに夜店を開かない頃でした。仲見世の直ぐ裏に、お絹ちゃんといふ可愛い女の子が居りました。お絹

ちゃんのお父さんは大工さんで、直吉さんといひました。お絹ちゃん、毎日観音様の境内を抜けて、三味線のお稽古に行つてゐました。観音様の境内には、今でも銀杏

の木が澤山ありますが、其の頃あの池の傍に、それはそれは大きな銀杏の木が一本、大空にニコキリと立つてゐました。此の銀杏の木の根元に小さなお社があつて、誰が云ひ初めたか「お狸様」「お狸様」といはれ、狸がまつてゐるのだと信じられてゐました。併しこの「お狸様」は何分お社が小さいので、お詣りする人としては滅多にありません。お絹ちゃん、お稽古の道に其の前を通りますので、何時からともなく、お社の前で一寸立止つて、お辭儀をしてゆくのが、例になつてゐました。或る朝、何時ものやうに「お狸様」の前でお辭儀をしようとしたと、まあどうでせう「お狸様」

のお社はすっかり取崩されて、其の邊に大きな穴が掘つてあつたり、石が轉がしてあつたりしました。お絹ちゃんは一寸變な氣がしましたが「あゝこゝへお家が立つので「お狸様」がこはされたのだわ。」と思つて、其の儘お稽古にゆきました。しかしどうした事か妙に「お狸様」の事が氣になつて仕方ありませんでした。

それから四五日たつた或晩の事です。お絹ちゃんの家ではそろそろ寝仕度をしてゐますと、臺所で突然バラバラツといふ音がしました。驚ろいてお父さんの直吉さんが行つて見ますと、砂利が一杯散らかつてゐます。

「おや／＼、ひどい事をするな。」

誰かしたんだらう。おや引窓が開いてゐる。お絹、お前引窓を引くのを忘れたな。」

直吉さんはお絹ちゃんに、かう尋ねました。

「いゝえ私さつき閉めましたわ。」

「おかしいな。すつかり開いてゐるよ。」

「まあひどい事！」お絹ちゃんのお母さんも臺所へ出て来て、かういひながらお掃除をしました。

翌る晩にも同じ時刻になりますと、誰か引窓を開けて、石を投げ込みます。

「全くひどい事をするな。よし今度來たら捕へてやるから。」直吉さんはさう云つて、其の翌晩は屋根へ上つて待つてゐました。だが何

時までたつても、誰も來る様子がありません。

「今夜は危いと思つて來ないらしい。」直吉さんは屋根から下りて來ました。すると臺所でパシャ／＼ツと音がしました。

「おのれツ。」と、直吉さんは直ぐ様外に飛び出しましたが、誰も居る様子がありません。念の爲もう一度屋根へ上つて見ましたが、何も居りません。家の中へ入つてみますと、堅くしめておいた筈の引窓が開いてゐて、臺所は水だらけです。

「又やられた。ひどい奴めツ。」直吉さんはすつかり怒つてしまひました。それから毎晩のやうに、お絹ちゃんの家へ何か投込まれ

ました。それもお絹ちゃんの家だけです。

「一體誰がやるのだらう。」

「誰か直吉さんを怨んでゐる奴の仕業だらう。」

「いや、直吉さんはおとなしくて人に怨まれるやうな事をする人ぢやない。」

「それぢや誰だらう……。それにしても、よつ程素早い奴だな。」近所の人達もあやしく思つて、色々噂をしました。

直吉さんは何とかして悪戯者を捕へたいと、人を頼んだりして骨を折つてみましたが、みんな無駄でした。一寸油断してゐる中に、どこからか來て投げ込んで行きま

すので、流石に直吉さんも、がつ

かりしてしまひました。

其の中に誰云ふとなく、

「それは狸がやるのだ。」お狸様が怒つてやるのだ」といふ評判が立ちました。お絹ちゃんの家では、其の悪戯に閉口してゐましたので、

「お狸様がこの家にだけたゝるといふのは變だが、物は試しだ。」お狸様のお社を建て、みよう。」と思つて、お絹ちゃんが毎日お詣りしてゐたのを幸に、お絹ちゃん

の名で、近所の人から寄附を募りまして、今度はあまり邪魔にならぬやうな所へ、小さなお社を建てました。出來上りますと、觀音様の直ぐ隣の傳法院といふお寺の、お上人様にお願ひして、丁寧に拜

んで貰ひました。所が不思議にもそれ以來、あの悪戯がびつたりと止みました。

「あゝ、やつぱり「お狸様」がやつたのだ。」

と誰もが思ひました。お絹ちゃんの家でも悪戯が止みましたので、すつかり安心しました。お絹ちゃんは、お稽古の行き歸りに、やはり「お狸様」を拜む事を怠りませんでした。

其の後暫くは、何事もありませんでしたが、丁度其の年の冬の或晩でした。お絹ちゃんはたつた一人で炬燵にあつて、本を讀み乍らお留守番をしてゐますと、誰か室へ入つて來た様に思ひました。「おや」と思つて、ひよいと首を

上げますと、頭を美しく剃つた可愛い小僧さんが、座つてゐます。お絹ちゃんもびっくりしました。逃げる事も出来ず震へてゐますと、小僧さんは

「もし、何もこはくはありません。私はいつぞやお世話になつた狸でございます。」

と云ひます。お絹ちゃんも薄氣味悪く思ひましたが、悪戯をする様子もありませんので、氣を取直してこわい、

「ではお前があの狸様なの？」と尋ねました。

「はい、其の節は色々有がたうございまして。今日伺ひましたのは、一寸お知らせする事がございまして……。實はこの二三日中

に、観音様のお堂が焼けるかも知れません。どうぞ氣を付けて下さい。」かう云ふかと思ふと、お絹ちゃんの驚ろいてゐる中に、小僧さんの姿はもう見えなくなつてゐました。お絹ちゃんは何だか氣味が悪くて、仕方がありませんので、蒲團かぶつて、じつとしてゐました。間もなくお父さんが歸つて来ましたので、お絹ちゃんは

「お父さん、今随分怖かつたのよ」と、今あつた事をすつかり話しました。様子を聞いた直吉さんも、前の事がありますので、薄氣味悪くなつて、翌朝早速傳法院に駆けつけて、お上人様に其の話をしました。

「ないから、放つておくがいい。」とお上人様は笑つてゐられます。直吉さんもあまり自分が慌てゐたので、恥かしくなつて歸つてまゐりました。

すると其の晩、傳法院のお上人様が書院で本を見てゐますと、後の襖が開いた様なので振り返つて見ました。ところが見えない小僧が座つてゐて、ペコリと頭を下げました。

「お前は誰だ？」

「はい、私は御厄介をかけた狸でございます。」

お上人様は「はあ、これがあの悪戯者の狸か。」と心に思ひ乍ら静かに、

「あゝさうか。昨夜お絹の家へ行

つたのもお前か。さうか。あんな事をして人を驚かしたり、悪戯をするものではないぞ。」とお叱りになり

ますと、小僧は又頭を下げて、

「はい、相済みません。驚かすつもりでは無かつたのですが、お絹ちゃんが驚いて終ひましたので、大變氣の毒でした。それで今夜はこちらへ



上つたのです。」

「うんさうか、そして何んの用かな。」

「はい、二三日の中に観音様のお堂が焼けますから、氣をつけて頂きたいのです。」

「あゝさうか。よし、氣をつける事にしやう。用はそれだけか。」

「はい。」小僧は頭を一つ下げると消えて終ひました。お上人様は、

「悪戯をする狸だな。」と思つて、あまり氣にも止めませんでした。ところが翌晩になると、又小僧がやつて来ました。

「おや、又お前来たのか。」

「はい、どうも危くて仕方がありません。」

「さうか、では今夜から氣をつけ



鈴の音 (推薦)

岡山市 山岡 静子

ちんから ご門の

鈴が鳴り

父さまおみやは

お人形さん

お人形だきだき

ねんねすりや

夢でも ちんから

鈴が鳴る

よう。」

お上人様の此の言葉をきくと、狸は又どこかへ、行つてしまひました。お上人様は狸が餘りうるさいので、夜廻りの者に注意させました。

丁度狸の小僧がお絹ちゃんの家へ来てから四日目、夜の十二時過ぎでした。直吉さんは、

「火事だッ。」といふ聲に目を覺しました。観音様が火事だッ。」といふ聲が又はつきり聞えます。『さては』と思つた直吉さんは、直ぐ仕度をして観音様へかけつけました。見るとお堂の縁側が燃えてゐるので、七八人の人がもう集つてゐましたが、火がかりもしないで、何

かガヤ／＼面白さうに話し乍ら、眺めてゐます。直吉さんは怒つて、『何をしてるんだい。早く消さないかッ。』と怒鳴りました。

「怒るなよ、まああれを見ろ。」かう言はれて一人の指す方を見ますと、まあどうでせう。五寸位の可愛い小狸が、五十四程もゐませうか、皆火事装束に身を固めて、火がかりをしてゐます。水を運ぶもの、龍土水を掛けるもの、櫛を振廻すもの、簾口で毀すもの、一生懸命働いてゐる様は、人間の火消そつくりです。直吉さんもすつかり驚ろいてしまひました。其の中に段々人も集りましたが、皆餘りの不思議に「アレヨ／＼。」と見てゐるばかりです。やがて火は、

一三八
お堂の縁側を四五間焼いたばかりで、消えて終ひました。火が消えると、小狸達は勢揃をして、櫛を真先に次に龍土水、梯子、簾と列を作つて、お狸様のお社の方へ、走り去りました。

翌る朝此の事を、お上人様に申し上げました。お上人様も狸のこの不思議な仕業に、大變驚かれました。やがてお狸様のお社は、傳法院の境内に移され「狸大明神」といふ名になり立派な祭が行はれました。此の事があつてから、此「お狸様」を火防の神として、お札を貰ひに来る人が澤山出来ました。今日でも傳法院の奥庭に、この「狸大明神」のお社が残つてゐるといひます。(をばり)

【作者住所 東京府下中里三六七大川邸内】



童謡

野口雨情選

(子供篇)

ごんぐり(賞)

東京 長尾あき子

どんぐりころころ

どこへゆく

町かお里か

ころころり

どこまでいつたら

とまるのか

ころころどんぐり

どこへいく

お手玉(賞)

山形 石澤 知彌

ころころお手玉

ちんちろりん

ちやかちやかお手玉

ちんちろりん

小春日和

青森 石橋晋太郎

ホロロン

鳩が呼ぶ

小春日和だ

出て来いうさぎ

ホロロン

青まつ

東京 多田八重子

お池のそばの

青まつが

かつたるそうに

下むいて

お池の中の

みづみてた

がん

千葉 土屋 ふみ

夕風吹くの

がんが渡る

おやどりことり

そろつてわたる

やつで

愛知 大島 健吉

むくの木の下の

やつでの葉

むくの實おちろと

手をだした

向ふのお山

山口 末弘 梅代

向ふのお山に

風ふけば

こちらのお山も

風がふく

向ふのたけやぶ

こちらのたけやぶ

風が吹く

うらの木

群馬 鹽野 なか

うらの

さとしほ

あまいな

すすめは

たかつて

ちゆつちゆつちゆ

さとしはたべたべ

ちゆつちゆつちゆ

木の葉

岡山 吉岡 満子

このはの踊り

ちら／＼ちら

お山の方から

とんで来た

このはの踊り

空と鳥

茨城 茂呂 まさ子

空はどんより

雲り空

空飛ぶ鳥の

なく聲も

お空の様な

くもり聲

麦

山形 石澤 正雄

青い麦

小さい麦

雨に

たふかれた

あひる

京城 河野正三郎

あひる



お日さんのうつゝてる

小川の水に

あひるがグワ／＼

とびこんだ

たくさんならんで

とびこんだ

竹馬

千葉 大川 政雄

はいはい

どうどう

ひんどうどう

いくらさわいでも

竹馬は

ゆつくり

ゆつくり

あるいてる



通信

傳説童話選後評

沖野 岩三郎

数ある原稿の中から擇りに擇つた原稿六篇。それは、石橋宗雄さんの『金紙銀紙』、中村信郎さんの『お狸様』、土橋里木さんの『京の日野屋大坂の日野屋』、金森武夫さんの『さんしよ山のおたけぼし』、木村緑生さんの『恩を返した感心なスツボン』、眞鶴純子さんの『こんく姉さん』でした。

『金紙銀紙』は書きかたは素直ですが、あまりにうちこちこちで古き古き材料です。『京の日野屋大坂の日野屋』は面白い人たちが、よく話す傳説です。しかし、これは何と考へてみても、不気味な話です。それが一つ二つの奇怪ならば、まだしもま、子いぢめ、山へ捨てる、手を斬落す、狼の群奸計、手の生える話など、折重なつて来る

ので、どうする事もできません。不思議に眼が見えたとか、耳が聞えたとかいふ事は奇賢として承認出来ませんが、無い手が生えたなどは、あまりにグロテスク過ぎます。

『お狸様』選者すぎる程の書きぶりです。しかし前半には非常な矛盾があります。狸の社を取拂つた人をよそに、此の社に目なけた人の家に石を投げたり水をぶちまけたりする事件は、大人には何でも無いが、子供の頭には、どうしても解明がつかません。火がかりの所は急に面白い可愛いものになってゐますが――

『さんしよ山のおたけぼし』書きぶりに非難があります。すつかり大人の小説です。どこをどう見ても、童心の香りが漂つてゐません。お書きになる心が、兒童を對照にしてゐない事が、あまりに明瞭です。これだけの筆をもちながら惜しい事です。

『こんく姉さん』は、普通の狐の話ではあるが、狐よりもお狸といふ狐を主とした話であるのが面白い。これには大した不気味もなく、ちよつとした事を眞似てみたてゐるの、相當のユーマアを含んで現されてゐるのがよいと思ひます。筆もあつさりした書きぶりです。

『恩を返したスツボンの話』は書きぶりに多少の難はあるが、内容は面白いものです。前半は佛教思想から出た慈悲談で、中程がユダヤ、ロシアの古譚とそつくりな出来ご

とで、最後が又た浦島太郎めいた所が面白いと思ひました。

私は讀返してしまふ、遂に、

二等 恩を返したスツボンの話 木村 緑生

三等 こんく姉さん 眞鶴 純子

といふ決定を下しました。惜しいことには、今度の應募原稿には、一等とすべきものがありませんでした。

幼年詩選評

若山 牧水

▼今月はいへん佳かつた。とびぬけて佳いといふのは無かつたが、皆揃つてよかつた。掲載外佳作に落すに忍びない様なのが、多かつたけれど、どうもしかたなかつた。

『ごめんなさい』と云ひ／＼落して行つた。

▼學校組では山形の横澤校と千葉の平岡校が目立つてゐた。然し横澤校のなば、つともあまり澤山出ずので、今度は少し遠慮さして貰ひました。ごめんなさい。

▼個人組の投票のふえたのが嬉しい。そして佳作も多かつた。

▼海邊公子さんの久し振に發表します。よく讀んで下さい。

第二回

傳説童話の結果に就て

齋藤 佐次郎

傳説童話の募集は今度で第二回目でありましたが、その結果は第一回の時に比べてかなり劣つてゐました。一等入選作のなかつた事、また二等、三等とも各一篇しか得られなかつた事を見て知られます。

應募の總数は約三百篇で、その中から兎も角も豫選になつたものは入選作を別として佳作欄に掲げた作がそれでありました。

嚴選の結果、最後に残つた六篇の作に就ては沖野先生が一々の作に就て批評を述べてなれますから、こゝには省きます。

佳作として残つた二三の作で、是非誌上に發表したいと思はれたものがあるのと、とりあへず今月號では中村氏の『お狸様』の一篇だけを掲げました。尙次月號でも二篇位を發表する豫定になつてゐます。

何時讀んでも面白いのは傳説童話です。日本の傳説であるだけに、われ／＼が讀んで見ると、郷土的な色彩を持つてゐて、何ともいへない親しみを感ぜさせられます。

『金の星』募集の傳説童話もこれで二回であるだけに随分な数に上つてゐます。各地の面白い話が山程集りました。表現に多少の加筆をしたら、非常に面白い話になるも

のが、澤山に集つて来てゐます。これと、嘗て募集した『郷土童話』を合すれば、實に偉大なる日本の傳説童話の研究材料を得た譯です。何れ『金の星』は第三回、第四回と此の様な計畫を實行して、日本の童話のために立派な記念碑を築ける積りでありますが、とりあへず近く、これまでに集つた童話を編集して一冊の本にまとめる事になつてゐます。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ／＼の特典と便宜とがありま

すから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。

これは、やがて例の有名なドイツのグリム兄弟が後世に残したやうな研究にも比較される可きものでありたいと思ひますので金の星社としても十分な努力をおしまない覺悟で、此の仕事に向ふ決心であります。

いよ／＼まとまつて、完成されるまでには、一々寄稿家と打合せして、話の出所等を明らかにして十分誤りのないやうに努める事は勿論ですが、寄稿家の名も巻末に入れてその努力を記念する筈です。

尚、この計畫に就ては何れもう少し具體化した上で御報告する事にします。

皆さんの御助力を切に希望します。

編輯室より

○漸く春めいて來ました。今年は多らしい日が僅かで早く春の來たのは何よりです。皆さんもいよいよ御健康の事と思ひます。

○『金の星』はいよいよ立派なものになつて行きます。童話雜誌界第一人者として何人も認めて下さるやうになつたのはありがた

い事です。今後とも益々努力して皆さんの御期待にそふやうに努めます。

○菊池寛先生の童話は次號に掲載されます日本の文壇の第一人者として有名な先生が久し振りに童話を執筆され、しかも先生としても非常な苦心の結果、出来上つた名作『日本の犬』といふ長篇を寄稿して下さいました。

○「日本の犬」といふ長篇を寄稿して下さいました。必ずや皆さんから大に歡迎される事でせう。

○「正ちゃん」の冒險の作者として有名な織田小星先生も本月の傳説童話號を機に「傳説童話」を毎月お書き下さる事になりました。本月號のお話を讀まれたらすぐおわかりになる通り、先生のお話は實に面白いものです。このやうな先生方が熱心に力を入れて下さる『金の星』は、いよいよ光りかがやく事であります。(記者)

傳説童話掲載外佳作

金銀紙 石橋宗雄
さんしよ山のおたけぼし 金森 武夫
京の目野屋大阪の目野屋 土橋里木
光秀の刻印 近藤富士雄
辰子娘物語 山田 紅一
音羽の池 三浦 大船
柳の精 輪 本幸雄
狼の話 川井多重郎
しら百合 山口喜市
石になつたアイヌ 西原 周二
狸のお寺 池谷 三郎
油風呂へ飛込んだ武士 今井 譽次
鶯になつた仙三 早田 裕夫
やうらくつじ 池谷 青水
お寺の由來 川口 楓洋
腕田 上 芳夫
天狗の萬さん 太田 俊夫
石すめ 板 島西男
猿曳き小唄 寺 中澄晴
狐の石地蔵 山本 ゆき
姥ヶ嶽 小田 太一郎
貞任時 近藤 麗月
三池山の火玉 森 康雄
西行腰掛け石 船越 次雄
こはれた水かめ 袋 津次郎
夜泣き石 政 二郎

腹の中で猫がなく
實のらぬ鬼灯
備前堤の人柱
かびたりをつかぬ村
田 中 雄三
瑠 運 一
森 下 新治
豊 島 泰

幼年詩掲載外佳作

山 本 榮(東京) 山下 文雄(北海道)
岩谷ミヨノ(秋田) 太田 貞夫(愛知)
ナガサヘイ三(東京) 池田まする(兵庫)
山川 ちよ(山口) 御園 成次(千葉)
石原 清子(山口) 三井 藤雄(山梨)
神澤まさる(兵庫) 高野 政一(埼玉)
伊藤 歌子(東京) 酒井 いと(千葉)
長坂 美文(山梨) 平野 貞吉(千葉)
金子 満群(馬) 中島 泰子(東京)
東 政二郎(京都) 渡邊喜代太(北海道)
鎌北元太郎(埼玉) 二杉しづみ(兵庫)
村越 春始(長野) 岩谷ミヨノ(秋田)

童謡掲載外佳作

(大人篇)

増 田 寅次郎(新潟) 水戸 孝道(神戸)
小野伴三郎(新潟) 山路しづれ(愛媛)
都築やす路(愛媛) 福永幸次郎(京都)
仙波しげる(愛媛) 名方 和郎(大阪)
山田 茂夫(東京) 澄川 長治(神戸)
吉村 徹三(大阪) 本多 鐵磨(東京)
中村 利雄(大阪) 橋田凌次郎(秋田)
葛本 和夫(高知) 小谷 時信(鳥取)

神代 好美(茨城) 逸見 子鳩(埼玉)
滋谷由紀夫(神奈川) 磯原 久實(長野)
中村 利雄(大阪) はさます子(茨城)
中津川山茶花(長野) 陸 敏(朝鮮)
安孫子清水(山形) 橋田香津美(東京)
石川 榮一(大阪) 石 原 孝(東京)
近藤 健二(神奈川) 西野 光兒(岩手)
末廣 朝人(山口) 【子供篇】
戸籍 カツ(青森) 佐藤 唯志(新潟)
吉田正太郎(京都) 東 政二郎(京都)
千代田愛三(東京) 三船 周二(岡山)
石井 すみ(千葉) 戸 嶋 忠(山口)
水上 和匡(東京) 高山 喜一(群馬)
神澤まさる(兵庫) 山本みゆき(滋賀)
金子まさる(山梨) 山田 千鶴(東京)
清水 竹子(山梨) 山田主基蔵(宮城)
細田さん子(東京) 中島義雄(神奈川)
山村加枝子(熊本) 井 坂 睦(香川)
渡邊喜代太(北海道) 齊藤 邦一(和歌山)
吉村つぎ子(東京) 吉田 美雪(富山)
吉田 光京(熊本) 吉田 歌子(茨城)
長尾港太郎(東京) 石橋晋太郎(青森)
高 塚 俊(千葉) 川 村 睦(栃木)

新誌友名簿

保澤章次郎(廣島) 西永つむぎ(長野)
朝倉 卯一(東京) 船倉ひろし(東京)
齊藤 利三(宮城) (以下次號)

面白い童話を募集す

これは所謂自稱新進作家の童話を求めるものではありません。全国各地に於て、面白いお話の種を持つて居られる人々の手に成つた童話を募集するのであります。純朴な、澄冽たる表現を持つたものであることを要します。一篇は二十行二十字詰原稿紙十五枚限り。稿料は一篇十圓以上三十圓以内の程度で贈ります。宛名は金の星社募集係宛の事。原稿はお返し致しません。(返却を求められる方は原稿に二錢切手封入の事) 第一回締切三月三十一日。
この募集に就てのお問合せ等は凡て郵便で願ひます。編輯部は非常に多忙につき一々御面會出来ないのを遺憾に思ひます。

金の星編輯部



讀者だより

▼本年はどうしたわけか「小寒」に入っても雪が何年どほり降りませんでした。東北特有の大吹雪もなく、ほんとに暖かでした。けれども一月の二十日に、突然に大吹雪が参りました。それは、東北の人でなければとても耐へられぬのです。ゴトと樹木の枝が唸ると一瞬もはなれて居る家が見えなくなりまして。その吹雪が三日もつづいたので、秋田のある所では、汽車が十時間も立往生しました。けれども勇敢なる東北の少年達はスケートやスキーをやつて、少しも寒さな顔なせずに童謡を歌つて居ります。東京の諸君のやうに炬燵にばかりあつて居りませ

ん。(秋田市 小玉禮之助)
▼私は始めて金の星の愛読者になりました。新読友名簿に御記入下さい。野口雨情先生の「鬼が来い」水谷先生の「村の英雄」沖野先生の「指郎さんのイギリス行」等面白く読みました。「日向ぼつこの輪も好です。(大阪 石川榮一)」
▼三月號只今読きました。袋を開けて見て、思はず「やア、綺麗だなア」と叫びました。蝶の標が踊つてある春野のあたり、なんといい美しきでせう。寺内先生に厚く御禮申上ります。(弘前 工藤直治)
▼学校から歸つて見ますと、私の好きな金の星が来て居るではありませんか。私はうれしくて「仕方ありません。さつそく開いて見ました。岡本師一先生のお梅のきれいな事。すぐに切つて机にかざりました。先生次號もたくさんお書き下さい。おれがひびくします。(熊本 山村加枝子)」
▼記者様。毎月先生が買つて来て下います。種々な雑誌を、私等何百人といふ生徒は、みんな喜んで読んでゐます。其の中でも私は金の星を大へん愛らしく思つたので、投書してみたくりました。之か

ら毎月ふるつて投書してみますから、どうか投書にしないで下さいませ。(高知縣 石川ちえ子)
▼「金の星」は面白く爲になる話がたくさん出てゐて嬉しい。又岡本師一先生や、寺内萬治郎先生の書は私は大好きです。三井信衛先生の「五〇七號室」は大そう面白く感じました。諸君一生懸命に良いものを書く様に勉強させよう。(秋田縣 岩谷貞三)
▼思ふことあつて、しばらく投書を休んでゐましたが、又今月から復活することにしました。どうかよろしく。岡山純美兄、度々御言葉あそばさう。どうか元通り交際して下さい。君も本年は中学校を卒業なさるんでせう。僕も――。(愛媛 仙波しげる)
▼野口先生の「鬼が来い」大變面白うございまして。沖野先生の話は「金の星」が出るとまつききいつでも読みます。推薦童謡の「橋の袂」には感心しました。と同時に、自分の拙劣さと思ふと汗顔の至りです。自分の童謡はたつた一度掲載外佳作に出たきり――童謡欄四頁になつたのは嬉しいことですが、それから、何月號だつたか、

「金ちゃん歸る」と言ふ作を見て下さつた小山勝清氏の御覧が、其後さつぱり見えた下で、又、あのお言ふものを見せて下さいませんか。(川島秀雄)
▼御誌三月號の岡本師一先生の口繪は、今迄の内一番私は可愛く好きです。どうしてあんなにおかきになる事が出来るでせう。私達の楽しい桃の節句が近づいて参りました。私はお友達を皆、金の星愛読者にしたと思つて居ります。そして金の星といふ名のとほりに光がキラリと世界中まで輝く様に祈ります。(東京 鈴木英子)
地方文藝雑誌名簿
新興童話 東京市本郷區菊坂町二丁目 新興童話協同
こほろぎ 東京市外平塚村下乾庭二丁目
秋本方 こほろぎ會
岩手縣一關町新大町ハ
二關方 東北童話協會
高知市水通四丁目
毛利方 星の光
▼記者先生、お初にお目に、愛読してゐます。今度僕は妹に逢つて、どうぞよろしく御指導下さい。では記者様初め皆さんによろしく。さようなら。(東京市 千代田愛三)

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集致します。誌友には色々の特典や便宜がありますから、振つて御加入下さい。ハガキで本社へ御申越次第、早速誌友規則を御送り申上ります。

誌友には毎月「小馬」と云ふ美しい小雑誌を無代進呈致します。「小馬」は誌友諸君の研究室であり、娯樂室であります。誌友の方々の、童話童謡に關する研究や、自作の童話童謡や、其他隨筆消息等あらゆる種類の原稿を掲げます。誌友の方々は、どしどし御投稿下さい。この「小馬」は、永い間休刊してをりましたが、今度いよいよ装ひを新にして出る事になりました。三月下旬までには誌友諸君の御手に這入ること、思ひます。

金の星社

出版目録を御送りいたします

「子供の本なら金の星社」と云はれて居りますやうに、金の星社からは、児童向きの書籍が澤山出て居ります。御申越し次第、圖書目録を御送り致します。

新しく出た本

◆創作童話 正チャンとリス

(織田小星著 東風人畫)

正チャンの名は、日本國中知らぬ者はありません。そのお馴染の正チャンとリスが、美しい一冊の本で皆さんにお目にかかることになりました。正チャンのおちさんで、知られてゐる者は、三年も讀いてゐる正チャンのお話の中から、詩趣のあるものばかりを選んで、そして一層面白く書いたので、正チャンは大喜びで、皆さんのお手にペーじの間を待たせてゐるさうです。東風人の畫は、相かはらずの美しさで、正チャンとリスを活動させてゐます。楚人冠の序は、よく内容を説明してあります。その一節に、「正チャンの冒險は、ただ讀む者を笑はせるに非ずして慰め、面白がらせるに非ずして教へた」とあるのは、よくこの本の評になつてゐます。金篇とリスとに面白一中に、詩趣の豊なお話は人世をうたつた一篇の詩集とも見られます。興味と、教訓に富んだこの本は、定めて各家庭の歡迎を受けるであらうせう。四六判繪表紙美本、本文二四七頁、色刷挿畫數十葉、定價金五拾錢、總刷所水田町二ノ三〇(金屋文淵堂發行)

金の星童謡曲譜第十一輯
藤井清水先生作曲
野口雨情先生作謠
夢のお國

世界少年少女名著大系(22)

目曲

夢のお國、櫻の歌、兎が來り、銀の鈴、猫さんお手まの沙の数、

▽定價 金八拾錢
▽送料 金六錢

▽定價	金九拾錢
▽送料	金六錢

再び『金の星叢書』に就て

こんなに澤山の數に發行する事は、未だかつてない事でありました。しかも、第一回に四種もまとめて發行するのでありますから、實にスバラシイ大仕事であります。その結果、こゝに此の叢書を發行するだけの仕事をするために金の星社の一部分として（いはば）出見世ともいふべきものでありますが、金塔社といふのを獨立させて、此の一大計畫だけの仕事は全部そつちでさせる事にしました。金塔社は金の星社の以前の發行所であつた東京市外田端三五一番地に設けました。そして、はなはしく此の一大叢書の發行に着手する事となりましたから、大にお力添へ下さる

金屋藏曲作曲家としての藤井浩水先生は、最近出版された『夢の国』は金の星堂讀曲譜の第十一輯として近日發行になります。藤井先生は關西樂壇に作曲家として最高の名譽ある方であります。先生の童謡作曲は、最も郷土的色彩を發揮してゐるといふ點と、伴奏の妙味に於て、他に比較のない名作曲であります。先生いよく近く上京され、東都樂壇で一大活躍をされ

名譽大士の第廿二篇として有名な「イ島」が發行になりました。この作は日本の少年少女諸君にも、早くから知られてゐて、劇になつたり、活動寫眞になつたりしてゐます。チルチルとミチルといふ兄妹が、青い島を探しに行く旅を書いたもので、その間にいろいろの國へ行つて、様々の冒険に出あつたりして、いさよつげ面白さを持つた名作です。原作は劇として書か

金星社のパンフレットに就ての大計畫は前號で大體のお知らせいたしましたので、いよいよ本月は發行の準備も出来て、各書店の店頭にあはれる事となりまして、本社はこの大計畫を一層大規模なものにしたい希望から、俄かにこれまでの計畫を變更する事となりました。

その理由は、各冊とも三萬部といふ大數を發行する事になつたのであります。一種の本を一度に

アラビヤン、
ナイト
（シンドバッドの航海）

關口野薔薇先生譯
（第二編） 驢馬の一生

票流物語

大戸喜一郎先生譯
(第四編) 盜まれた王女

定價各冊・金貳拾錢
送料・金六錢
四六判頗る美本
各冊内容一三〇頁

○定價の安い事 百三十頁ある立派な一冊の單行本が僅かに貳拾錢で讀む事が出来るのです。これは全く他にない事でありま

（内省の立派な事）といふと、いはゆる赤本と見なされていふ。その赤本といふ種類のものは、實にお話にならない内容のひどいものばかりでありまして、ところが、此の叢書は金の星社が責任をもつて内容を厳選したものに、各篇とも、何處へ出してもししくない立派なものばかりで

○挿畫の澤山ある事　これ

はこむての如何なる本にその見
ない特長で、如何なるものも
開いても殆ど書が出て来るやう
に、各冊五十枚内外の挿書が入
つてゐる。しかもその挿書は外
國でも最も模範とされる有名な
畫ばかりを集め、それに金の星
庄、専閣の名家が補つたものであ
りますから、その立派さは一度本
書を手にとられた方であつては
解りますまい。

尙一々こと細かに述べればまだいろいろの特長があります。要するに金の星社が日本の少年少女諸君に世界の名物語を紹介したい希望から一大犠牲を覚悟の上、着手した一大仕事である事は認めていたとき度いと思ひます。

アラビヤン、
ナイ

(シンドバットの航海)
本の内容の大體を記しませう。
第一編は、有名なアラビヤン、ナ
イトの中で最も代表作とされてゐ
る一大長篇船乗りシンドバットの

航海であります。これこそ、一度
読みだしたら最後の頁まで讀ます

には本を掛けない程面白い作であります。シンドバッドの七度の航海を記いたお話であつて、奇々怪々、これこそ眞にアラビヤン、ナイトらしい話であります。

(第二編) 驢馬の一生

年とつた驢馬が飼主の坊っちゃんに送つた手紙といふべきお話で、驢馬が自分の一生を物語つた實に面白い自叙傳であります。そ

れはく、お腹なかとへるやうな面
白い場面もあるかと思へば、また
思はずホロリとさせられるやうな
哀れな場面もあつて、めづらしい
本です。

（第三編）
ロビンソン
漂流物語
これは皆さん御承知のロビンソンが難船して無人島で暮す有名な世界的名作です。

（第四編） 盗まれた王女
これもめづらしい、そして面白
いお話です。ペルシヤの物語で、
王女が魔法使のために盗まれ、そ
れをあらゆる困難を冒して王子が
助けに行くお話で、少年少女の皆

には、胸をおどらすやうな場
かりです。

沖野岩三郎先生著

勞働の少年

四六判箱入美本
口繪、挿畫澤山

定價金	送料金
1000	1000
2000	2000
3000	3000
4000	4000
5000	5000
6000	6000
7000	7000
8000	8000
9000	9000
10000	10000

こんなに面白い小年小説がまた
とあるでせうか。二百五十頁近く
の一大長篇ですから、實に大した
ものです。鐵山で働く二人の少年
を主人公にした雄大な小説です。
賣切れぬ内、急ぎ御注文下さい。

出版部
金の星社發行の書籍に就て、皆さんがお感じになつたことを、そのまゝ遠慮なく記してお送り下さい。よい批評には賞品を差上げます。

懸賞創作募集

【意注】童 童 【意注】綴 幼 自

自由畫 山 本 鼎先生選
 年詩 若 山 牧 水先生選
 方 編輯部選
 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は三月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は六月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地の星社。

【意注】金の送
 大正十五年三月九日印刷納本(毎月一回)
 大正十五年四月一日發行(一日發行)
 廣告料は御照會次第お答へ致します
 振替口座東京五九五六番
 電話小石川五三八七番

沖野岩三郎先生の五大名著

父戀し
 森の祈り
 労働の少年
 赤い猫
 金の釣瓶

何といふ清く美しい物語りである。少年の心と少女の心を描き、その間に流れる愛の物語り。作者の筆は、静かに、しかし、力強く、読者の心を打ち抜く。これは、作者の代表作である。作者の筆は、静かに、しかし、力強く、読者の心を打ち抜く。これは、作者の代表作である。作者の筆は、静かに、しかし、力強く、読者の心を打ち抜く。これは、作者の代表作である。

東 京 本 郷 町 金 星 社
 振替口座東京五九五六番
 電話小石川五三八七番

K2A-32

さくら ちらちら、
 野の鳥も ちりちりつんと鳴いてゐる。
 わたしは
 朝も寝るまへも、
ライオンはみがきを使ふので、
 お歯もまつしろ、
 お口もきれい、
 からだも丈夫で遊べます。



ライオンねりはみがきを
 にお使ひなさい。
 ライオン歯ブラシ

「金の星」第八巻第四號

(大正十一年六月十三日)

大正十一年三月九日 印

原 稿 本

「定賣金四下巻」

「金」一巻五頁